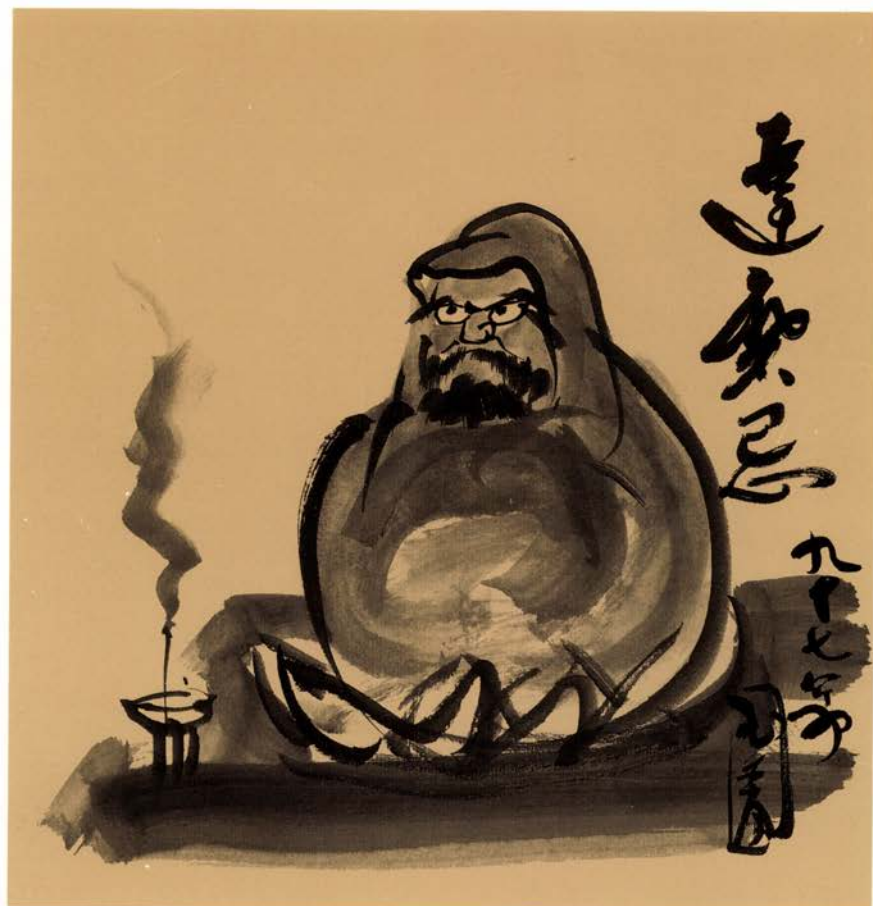


川柳塔

創刊大正十三年 通卷八七〇号



日川協加盟

No. 870

特集・第5回川柳塔まつり

十一月号

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしく願います。

★個人 一口 二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円 ③ 3/3頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月25日

〒545-0006 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。

■締切 11月25日（本社事務所宛）

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX (06) 6372-1178

ご挨拶

橘高 薫風

皆さん、ようこそいらつしやいました。遠方からお出まし下さった方、昨日から総会にもご出席頂いた方、大勢のご参加を心から御礼申します。

麻生路郎先生ご在世の頃、七月の先生の誕生日近く「川雑川柳祭り」というのを催していましたのを、『川柳塔』改題の十月に替えて発足したのですが、今回第五回となりようやく軌道に乗った思いが致します。

今年、事情があつて同人総会を前日に開きましたことは、遠方からの方に特に迷惑をお掛けし、深くお詫びします。

総会では種々の報告を致しますと共に、規約改正、役員補充などのご賛成を得て、杜の運営に更なる強化を進める体制が整いました。私もこれからの二年、川柳塔の発展に微力を尽くしたく思いますので、変らぬご支援をお願い致します。

これからは地方の時代です。広い視野で杜の運営をはかり、次の世代に引き継ぐ所存でおります。積極的なご協力を重ねてお願いします。

皆様方今日一日、たのしいお祭りを楽しんで下さい。

右は、今大会で申し上げた私のご挨拶。さて、鳥取県は川柳塔のお仲間が多い所で、その不参はとても寂しいことでしたが、予想を越えるご出席者を得、また佳句も多く披露され、大会ムードは盛り上がりました。懇親会も、よく飲みよく語り、友情とアルコールが溶けて和やかに弾み、来年の再会を誓い合いました。鳥取勢の不参になったことは避けねばならぬことでした。分かりきったことの出来なかつた運営を反省しなければなりません。私自身、大しくじりをして事前投句の方に厄介を掛けました。老体体調の不安はありますが、あと二年の主幹の役割りを渾身の力で尽力致します。

私は去る五月に醍醐寺（太閤花見の会の名刹）で文化講座の講師として「川柳のたのしさ」について話をしてからの縁

で、月に一度写経に出向いています。体調悪化すると精神も安定を欠くからです。凡聖不二 実修実證

とある双幅の揮毫の前では、路郎先生の句の息づかいまでが偲ばれて半日の対話をたのしんで来るのです。

若いうちに生命を断つ人は苦の中に旅立ちます。七十を越えての老化は、無の世界へ近づく修業であるに違いなく、般若心経を写しなから、かつての私の句

心経の無の字の多き金泥なり

を思い返したり、いのち衰えてなお川柳をたのしめる自分を果報者と思えと言われているように、先生の終焉と想いを重ねながら私なりに心に納得をさせて帰るのです。その日その日に別の安心を頂けるのです。

写経の目的を記す欄に、今までは

「為 父母の霊菩提」と書いていますが、次の時には「為 自己安心」と書けば、笑われるでしょうか。

しのび寄る秋が今年を音を立て
芋の葉の露は仏舍利然とまるとい



座右の句

牛の瞳に人間何をあわてとる

私の句

箸を割る森の嘆きを聞きながら

(栗)

岸本宏章

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ご挨拶

句文集刊行余話

川柳塔(同人吟)

佳句感想

自選集

大空のころ (106)

川柳の群像 加賀美白英子

誹風柳多留二四篇研究 11

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

橘高薫風 …… (1)

田中正坊 …… (2)

橘高薫風選 …… (4)

橘高薫風 …… (53)

橘高薫風 …… (54)

橘高薫風 …… (57)

東野大八 …… (58)

河内天笑選 …… (64)

木本朱夏 …… (62)

森山盛桜 …… (89)

句文集刊行余話

田中正坊



去る八月、喜寿を記念して川柳句文集『ペンシル』を刊行し、十七年間の作品八百句とエッセイ七編を収録した。これまでになく

わ川柳「私の百句」など、百句を編んだ小句集を三点出しているが、まとまった句文集の出版は、今回がはじめてである。

今となつてはどうと言うことはないが、刊行するにあたっては、ずいぶんためらった。作品を世に問うという気はさらさらでないが、このようにつたない句を誰が読んでくださるだろうかということが、何回となく脳裏をよぎった。文学でも美術でも音楽でも、およそ創作的な活動にたずさわる者は、どのような形にせよ作品を発表すべきである、というのが私の持論である。そうであれば、私自身を例外としてはならないと思った。

ここは一つ、私のすべてをさらけ出してみようと考えた。全作品に近いものを発表するということとは、全身をストリップするようなものである。もともと私の作品は、私小説ならぬ「私川柳」的な傾向が強いが、これに加

渺湖抄	八木千代選	(90)
エッセー 泥の功德	蒔苗果林	(93)
茴香の花	宮西弥生選	(94)
「野」	宮本かりん選	(96)
一路集「出会い」	高田美代子選	(96)
「願う」	池田善守選	(97)
初歩教室「声」	吐田公一	(98)
第五回 川柳塔まつり		(100)
役員会・同人総会・各賞表彰記念句会・懇親会		
各地柳壇（佳句地十選／清水潮華）		(110)
柳界展望		(126)
十一月各地句会案内		(128)
■編集後記	みつ子・希久子	(130)

座右の句

減るものでない真心を出し惜しみ

私の句

蒔いた種刈るには骨が折れすぎる

（柳宏子）

岸本孝子

えて回想的な文章を主とする本誌の目次下エッセイ七編を配した。戦前・戦中・戦後の激動期をくぐり抜けて、平成の現代に生きる一人の男の「自分史」ともなれば、この一冊は意味がないことはないという気もした。

こうしてできた句文集を、あちこちの句会で知り合った人や賀状を交換している人たちに謹呈した。この中には川柳人だけでなく、一般の人にもふくまれている。一段落すると、次々と電話がかかり、便りが来る。およそ七割以上の人から何らかの反応があった。川柳人では便せん数枚にわたって鑑賞や批評をしてくださる方が何人もあってありがたかったが、特にうれしかったのは、全く川柳に縁のない人から率直な感想を寄せられたことで、「川柳についての認識をあらたにした」と言われる方もあった。

おわりにふれておきたいのは、詩人の土井大助さんが新聞の読書欄に長文の書評を書いてくださったことである。評文は、

鶴彬にかわり一筆もの申す

など十九句を引用しつつ、さまざまな角度から作品を分析・評価し、「評者はこの一冊によって、現代川柳の訴求力にあらためて刮目した。この国独特のこの文芸を民主主義的活力の今日の表現と納得させられつつ、新鮮に楽しく心を洗われた」と結ばれている。やはりこの句文集は、出版してよかったと思つた。



橘 高 薫 風 選

唐津市 久保正剣

蛸焼屋公的資金に恵まれず

夏の波手をつなぐ人連れてくる

イソップの頃は無かったドナーカード

よこしまなときめきも折る時刻表

ミラクルもメーカードラマもない余生

夏帽子夢を残したまま仕舞う

鳥取県 新家完司

商才も博才もなし野望なし

生まれつき良心虚弱体質だ

嵐と嵐の間しばらく秋日和

路郎句碑薫酒を受けてふと揺らぐ

破門だぞと路郎の句碑に叱られる

確実に一行は載る死亡欄

弘前市 高瀬霜石

生きている限り百点貰えない

税金が真面目な奴を追いかける

はらわたを見せる人には勝てません

風と手を繋いで歩くひとり旅

鬼っ子のひとり名前は癌という

コンビニに群れるさびしんぼうその他

寝屋川市 森 茜

波乱多き人生唯今午睡中

目覚めると治っていたよ若かった

おうい雲少し話していかないか

非常識を面白がられても困る

壁に毯ぶつつけバランスとる自愛

蓮の葉に泰然自若たる蛙

大阪市 川端 一步

広辞苑どっしり置いて一字読む
昼読んだ詩人と夜も酌み交わす
言い負けて父は楽しく酔っている
仲のよい夫婦も願ひごとは別
わが家にも迷宮入りがたんとあり
スランプの克服奇手はないらしい

富田林市 藤田 泰子

残り火の芯まで響く鬼太鼓
巖然と過去は生きてる身上書
このごろは夫を良夫と書いている
新世紀も古いおんなを看板に
秋風が怖い私の泣きどころ
夏ごもり自動制御の風の中

和歌山市 木本 朱夏

酔芙蓉果てて始まる風の盆
玄関に人待つあかり風の盆
星に近く胡弓を泣かせ風の盆
風の盆坂から坂へ影移る
風の盆男踊りに男酔う
あかつきに指さき染めて風の盆

松江市 舟木 与根一

わき見する小道具というサングラス
スズメ蜂荒神さまに居を構え

出来ものは悪性ばかり途上国
アルツハイマー二人羽織が決まらない
ちやほやとのつぺらぼうを育ててる
タイガース負けタイガースらしくなる

吹田市 古川 喜美子

征った子には行ったままなり母白寿
八月をゆったり着物着る自信
教養講座たつぷり眠りパーゲンへ
唯ひと言返事下さい仏さま
養うてはくれぬ勲章持っている
私の予定を聞いてどうなさる

松江市 川本 畔

笑い声久しく聞かぬ町にいる
庭石が光りもの言う秋になる
風の盆踊ってみせる旅帰る
鈍行はゆっくり青い海くれる
男と女城見台にて小半日
計をきいて蛸も木もおし黙る

豊中市 田中正坊

句集出す生前葬をふと思つ
一冊の本が絆をたぐり寄せ
この次は米寿 娘の御託宣
朝飯がうまいも少し生きられる
八十はすぐだと嫌なことを言う

風吹いて紅葉が僕を誘い出す

竹原市

三宅 不朽

むかしむかしずっと昔も曼珠沙華

赤とんぼカタカナまいたように浮き

海はまぼろし海に定まる色がない

開け放つみどり絵はがきもみどり

月さんさん母がふくらむ塔の尖

落花生猫も黙って来て座る

出雲市

園 山 多賀子

ひと雨が米寿の坂に虹を描く

米寿もう重石になれぬ次元の差

逆貢繰る癖がある他意はない

返り花わたしをたしなめるように

不束な婦随を演じ六十年

蛇口全開今日のブランがほとばしる

高槻市

川 島 諷云児

前ばかり見て気づかないうしろ指

知恵袋ずいぶん軽くなりました

食卓に人生がある華がある

いつからか待たなくなった誕生日

事なかれ主義で賞罰ない履歴

追い風が吹いてきたのにまだ迷う

鳥取県

土 橋 螢

こころ今ばかんと秋の空にあり

昭和史の焦点にいろ一飛曹

初嵐君に逢いたくなってくる

恥ずかしいこと置き去りに秋なかば

蟬が出た穴に入ってゆくみみず蚯蚓

明日は川柳今日は松茸採りにゆく

鳥取市

谷 口 次 男

コオロギが歌を忘れた不気味な夜

たっぷりと白粉塗った国である

とっぷりと日が昏れ国も床に就く

やはり母へそくり作る子のために

猫様が高い薬に慣れました

夫婦だがホットとコール注文し

岡山県

小 林 妻 子

ブランコが揺れなくなった鍵っ子よ

封建の館も修理するくらし

むらさきと差し違えても紫に

昔なら破門組です浮気ぐせ

真ん中に立たせて最後までしゃぶる

半世紀二十歳の記憶戻らない

宇部市

平 田 実 男

嬉しくて笑い淋しくても笑う

脳味噌が移植出来たらなと思う

十歳の孫と混浴しています

噛めば噛むほどの一句がまだ出来ず

外濠も内濠も孫埋めてくれ

奥の手も切り札もない亀が勝ち

豊中市 安藤 寿美子

こっそりと来てさつと吹く秋の風
孫たちに囲まれ媼顔になる

孫にしてやれる事ただ祈ること

大阪弁で説明したらようわかる

落ちこんでいるのに誰も知らん顔

月落ちたくらがり立秋立ち上がる

島根県 伊藤 寿美

色即是空 空海展の盆の数珠

君が代論 散りし防人何と聞く

むらおさだった先祖の村をまだ守り

暑気当たりのわたしに水をやる残暑

評論家いつも日本は駄目と言う

黄昏れて夫婦が同じ夢を見る

八尾市 高橋 夕花

診察券一枚ふえて秋になる

愛恋も悲恋もしやれた絵になった

自画像はちよっぱり美人過ぎたかな

こだわりの一品見つけた陶器市

老いのこと話すと孫のやさしい瞳

病葉よ枯葉よ何処へ消えたのか

弘前市 佐治 千加子

鳩笛を吹けば津軽の夕茜

音のない風ばかりなり耳を病み

蓮池のかわせみ翔んで亡夫の声

西の窓ちいさな秋の祈りかな

キーホルダーの鈴が記憶をする温み

飛行雲 地球脱出の夢をのせ

和歌山市 堀畑 靖子

平和ボケ夏バテ仕切り直さねば

誠実が売り物だった店じまい

根っからの悪になれない笑いジワ

十分に私を生かす台所

五十代わたしを主語にして生きる

自己主張しないと握りつぶされる

可児市 板山 まみ子

熱帯夜終れば夏が惜しくなる

人の目のふれる所だけ草むしり

見栄張った細身の服のきついこと

乱打戦野球ではないゴルフです

鬱憤を晴らすスイング絵にならず

爪染めて糠床まわし茄子の藍

尼崎市 長浜 澄子

折り目正すと人間臭が消えてきた

曼珠沙華きょうも可もなく不可も無し

片足をまだ引きずっている虚像

ラガールカード今日の行く先だけ秘密

縄抜けの旨い小猫に騙される

口にする度 感激が薄くなる

堺市 山本半銭

落日に影伸び伸びて頼りなし

高野槇活け菩薩像書き写す

古着探しいつか私をかざるだろ

蟋蟀もかき餅の音も秋の夜

甘栗とハイビジョンありながい夜

帝国ホテルのケーキ目当てに上高地

鳥取県 田村きみ子

ニラの花少し眩しくなつて秋

母が逝くともきれいな雲の上

オムライスの隅が大好きミニトマト

皺美人になりましたねとコンパクト

肩を組むほどの味方で恙なし

ジャンケンに勝つても亀の暮しぶり

香川県 川崎ひかり

内職の窓から見てる遠花火

法師ゼミ夏から秋の風の彩

谷底で加減乗除をくり返す

握手したくらいで埋まる谷じやない

お弁当朝から「チン」と鳴りどつし

幸せが私の前でイレギュラー

高知県 小澤幸泉

老人力なぞと言われて翔んでみる

君が代に死んだ兵士が眼を覚ます

逝くのかもそんな会話がささやかれ

コスモスは人の善意を知り尽し

楽譜には伴奏だけを書きつらね

罪深いいのちの果てにある平和

大阪市 渡部さと美

宗教の陣取り暗い世界地図

母さんは安定感のよい太日

絵手紙をくれる心も絵だろうか

結ばれた無口へ妻ももの静か

生まれ来て赤ちゃん伸びてつっぱって

すすき二本話せば長しお月様

和歌山市 福本英子

満ち足りて敵も味方も愛してる

先生が欠伸をすると皆なごむ

予定まだ半分なのに法師蟬

逆立ちをしても胃下垂治らない

甘やかし過ぎて手をやく猫と老い

逃げ道をゆるめ叱れば逃げられる

神戸市 中村ゆきを

弾んで隠れて君よ鞠の化身か

辛いから辛いというのさなあ雑草

ハイネック頭を出さずアカンペー

秋だなあ馴染みの屋台になじみ客

参観日運動会倒産を機に皆勤賞

色即是空どこまでも秋 田も空も

下関市 石川 侃流洞

エブロンが制服だった婦人会
クワガタへ一千万は阿呆かいな
宝くじハイエナたかる夢を見る
痩せたって子には重たい僕の骨
ひと回り母小さくなり百となる
腐っても鯛長老の役どころ

島根県 堀江 正朗

目を閉じて開いてみても聞ばかり
喜びは米寿の胸をふくらます
思ひ出を両手に余るほど数え
白杖とはずんで今日も遊園地
妻の手が何処にでもある ありがとう
見えていた日を連れてくる祭り餅

大阪市 北 勝美

病床の妻は知らない秋の風
コスモスの花を挿しても無表情
毛糸針操る指は過去のもの
七十年連れそう顔を忘れられ
小さい声遠い耳とは噛み合わず
萩咲いて根方空蟬しがみつ

出雲市 竹 治 ちかし

宇宙からみればたわいもない話
海山が無口になって新世紀

善人の中であくびを噛み殺す
末席で後頭ばかり見て帰り
上げ底は見せず綺麗な包装紙
脱皮する度に凡人らしくなり

松原市 玉置 重人

錯覚と錯覚楽しくなりそうだ
道端でキスアメリカに負けてない
あちこちで月の初めの保険証
ありがたい余慶二千年の鼓動
二千年まだ四島が還らない
一句を残せ一句を残せ竹を踏む

寝屋川市 北岡 波留吉

大胆な妻に宣戦布告する
重い罪消えず再び遍路笠
喜怒哀楽噛み締め上る八十路坂
五臓六腑満足させた祝い酒
案じたが五体揃えて呱呱の声
嫁が来て五穀豊稔過疎の村

出雲市 富田 蘭水

いつ見ても白亜灯台夢みさせ
うまいお茶いつかは一人凡夫婦
父の汗知らぬ振りしてみつめてる
愛憎のそりを持つていい瓦
梅干しを食べては勝利信じてる

秋夜長句会かず数ねむらせぬ

八尾市

神原 まさと

孫の日が出来たと孫が言いくる

来年のために書いてる日記帳

知恵の輪を抜くより世間むつかしい

蟠り少し残った無礼講

一歳の子の目とらえるコマーシャル

正論で返事するから話さない

堺市

神原 文

花惜しみ月を眺めて輪廻とや

残月もわたしも今朝は二日酔

熱帯夜去らず中秋来てしま

ひとりでに育ったような子にもたれ

親馬鹿をばあさん馬鹿が聞いている

一言が堂々めぐりして三日

寝屋川市

堀江 光子

女同士母の生涯思いみる

共に居るだけで安らぐ母と居る

手をとって母と行く人羨む日

野良犬の頭撫でれば後じさり

そのままに医者 of 返事を聞かされず

変異することで自然は返事する

島根県

松本文子

誰でも仲良しになるカラスの子

老後とは石を背負っているような

ひっそりと焼くものがあり女には

みんな振り向く野仏の花に

何を耐えんとして氷塊を噛み砕くか

石に字を刻むと人は立ち止まる

唐津市

宗水 笑

うつ病のような気象にねまる街

不条理も仏の慈悲と僧は説き

本流が司馬で支流が周平か

惚れ込んだ卑弥呼を追うて独り者

石になり神にもなった恋の果て(松浦佐用姫)

額の父偉人に見える時がある

弘前市

須郷井蛙

代々の境界石が和を守り

お上手に蟹を食べてる文化人

飢餓の国あるのに減反強いられる

シンデレラ今夜も出掛けるダンス会

雪帽子庭が絵になり詩になる

孫の声聞けば無重力になる

大阪市

稲本 凡子

世話になる娘を怒らせた敬老日

満二歳笑い袋も提げて来る

一日が早い愚鈍になつてゐる

有頂天自分をみんな出しすぎる

不況時に年金暮し愚痴るまい

空しさに負けそう花屋まで遠い

鳥取市 石上悦子

お嬢さん呼ぶと振りむくおばさんだ
わが家にも居ついてほしいドラえもん

医学書を開くと起きる風がある

パン好きな息子が米屋継いでいる

抗菌の必要がある金バッジ

幸福へ向かう前菜悲しみは

西宮市 井上信子

人の良い母がふるまう祭り寿司
浮き草の水にたゆたうごとき母

うとましく思う父にも母優し

婚約のお返事できぬあまつたれ

秋風は弱気の頬を打って行く

虫の声秋風よりも早く聴く

枚方市 栗林光夫

早く来て仏壇きれいに拭きました

金縛り解けて君が代流れ出し

大預言二〇〇〇年まで預けとく

太陽を七十五周誕生日

人生の山坂電動自転車で

ときどきはうんと言つてよ扇風機

熊本県 高野宵草

丁寧な髭剃ってゆく齒科の台

若いからトイレの扉音高く

宗教の守護神たちが殺し合う

年輪に驚くときは伐られて居

寝返りも出来ぬ檜山白い部屋

ペンとメモ本まで持ってゆく寝床

和歌山市 細川稚代

マスコミに流した涙すぐ乾く

滝壺を覗いて再起考える

甘酸っぱい傷の一つもあつて古稀

叱れない所詮私の遺伝子だ

遠い日のまんま雑巾ぬれている

追いつけずインターネットという魔物

八尾市 高杉千歩

写経するひととき私とり戻す

祥月命日 母の歳まで五年ある

冗談を詰めてクロネコメール便

鼻先の紅落してもピエロです

あと戻りする気はないか赤まんま

終電車働き蜂へ風も秋

富田林市 松本今日子

深呼吸幾度したか霧が峰

バスクリン誰が入れたか白根山（お釜見学）

町中に猿鰐住んでピラニヤだ

朝顔が咲かなくなつて新学期

楽しげに内緒話の孫二人

降り続く雨また楽し花柄で

神戸市 木村 貴代子

芋のつる青々のびて敗戦忌

宿題の出来がよすぎてブルーな娘

無い方が幸せだった物あまた

都合よく自然を変えたつもりでも

暑さまけ天より見舞果実たち

少年期何故か西瓜は父と買う

鳥取市 岸 本 宏 章

初任給三千円へ母も泣き

曼珠沙華黒く咲いたら怖かろう

明日まで待てとは虫のいいはなし

マジックの鳩もびっくりしてみせる

ネクタイを外しただけで変わる視野

見下ろして見る十階の住みごころ

河内長野市

井 上 喜 醉

時刻表いじると秋が燃えてくる

二千年人生最初へ戻りたい

薬漬けハイハイハイと聞いておく

生きるのも芸でボケたら粗大ゴミ

老兵の記憶は手帳の世話になり

姿なき風へ人生浮き沈み

伊丹市

山 崎 君 子

朝顔の終り濃いくれないの小さい花

夕顔の香りききたい月あかり

里の井戸西瓜の上に月がある

夏茗荷泥ついたまま里匂う

派手な傘借りてとまどう俄雨

地藏盆むかしむかしのひねり菓子

八尾市 生 嶋 ますみ

子のことになると夫はメチャ弱い

老人力笑って捨てる古い服

シルクより綿が私の肌にあう

へりコブター内緒ばなしをかき回す

老い二人おいしかったと食べ残す

カタログを見て幸せな妻でいる

大阪市 辻 川 慶 子

電話より思いなおして手紙書く

氣心を知るコーヒーのうまい事

懸命に生きる証の日記帳

物思う歳ではないが秋の雲

空調の音しずかなりベンをおく

改革の折れて曲げての選挙戦

竹原市 古 谷 節 夫

激動の百年だったなあ地球

小脳が錆びないようにヤジロベエ

秋晴れへ正月用の種を蒔く

人間もゴミからやがて灰になる

天高しこころの窓も透いて見え

問診へお酒の量が減してある

熊本市 永田俊子

一筆啓上携帯電話に笑われる

逆風を味方につける男坂

水槽から出られぬ魚の葬列

恍惚という消しゴムを持たされる

秋夕日すくと落ちて誰か逝き

唐津市 田口虹汀

我が儘と知りつつクーラーから逃げる

老骨を寒暖の差が振り回す

入歯でも父のは高い音が出る

水主町の太鼓の文字は僕の筆

供日が来お会式が来て年の暮れ

唐津市 仁部四郎

市町村合併蛇は反対だ

市になって祭りが一つ消えました

スペシャルレジャーお庭の草むしり

感想を聞かれて困るレジャー事故

スーパ―が来ても逃げてでも街騒ぐ

唐津市 山口高明

姉ちゃんのカバン覗くとスタンガン

ころす気の無い殺人が大流行

宜なるか無名兵士の墓に札

偽りの恋に疲れた刃物沙汰

喋っては成らぬおんなの密ごと

唐津市 山門幸夫

風の丘水平線と高い空

朝顔を数えて走るランドセル

蚊に吸わせじつと見つめるお爺ちゃん

レンジ急くはいはいと立ち上がり

金髪に染めて鼻まで高くなり

唐津市 山門タミ

終戦日五十四年の線路あと

一歩出れば命がけです今の世は

足弱り頭と口と胃は達者

孫去って広い畳のひとりごと

シャボン玉孫と一緒に眼が遊ぶ

唐津市 市丸晴翠

子等巣立ち戸籍出発点に立つ

下敷きに母の生き方あり耐える

過去捨ててリストラの父靴磨く

何枚も舌を持つから縛れ出す

叱られた思い出囲む三回忌

唐津市 井上勝視

几帳面に蚊とり線香果てている

おじさんが叱ってるよとそれつきり

ノアを忘れ今また人が墮落する

歌麿は帯解く余韻までも描き

ペイオフの話ヒソヒソ会葬者

唐津市 樋口輝夫

左遷され駅でバンザイされた俺
黒山の人が群がる店じまい
心太のように法案通過する
近いのに北京経由の遠い国
押売りにチャイムの故障注意され

香川県 木村 あきら

すがすがしい顔いっぱい朝の駅
人間を信じて居らぬ鍵の束
虫干しのタンスの中に亡母の顔
あの星に手が届きそう肩車
汗をした貌に夕陽が燦さんと

香川県 工藤 吟笑

海苔を干す島に淋しい母の詩
酸性雨知らず咲いてる百日紅
青山は亡父母の住む理想郷
子のために齧れる脛は残しとく
口八丁手も八丁で氏もよし

香川県 成重 放任

六十路過ぎやつと谷から這い上がり
一言が谷の底まで落される
童心に返ってはしゃぐハイポーズ
干し上げたマムシの皮が刺を取り
かなかなの声が残暑を吹き飛ばし

香川県 池内 かおり

反抗期育児日記を読み返す
言うだけは言うてはみると躲される
旧姓で呼べば御転婆よみがえる
育児書になかった母の子守唄
バーゲンに行けば相手の思うツボ

松山市 丹下 美津子

人の住むこんな谷間にソバの花
九十八の叔母に光ちゃん頼られる
出勤の親子見送る姑の役
息子の衿直して嫁の目が刺さる
大きい声しないで耳は聞こえます

松山市 宮尾 みのり

いい縁を感謝しながら酌み交わす
講釈を言う包丁の味が落ち
品格に尽きるおしゃれの難しさ
キューピッドの手元狂ってからの仲
割れ鍋に閉じ蓋夫婦して詩人

今治市 野村 京子

繚乱の百花百仏おわす里
生きるのもつらいものですほとけさま
逃げ水を追う回り道ばかりする
ブランコでひとりぼっちの影と会う
方円の器に浮いた氏素姓

今治市 越智一水

布衣を着てあなたに染まる夏の恋

蕎麦の花 白々咲いて村貧し

蕎麦の花 山の高さへ雲走る

豊作へあきたこまちは牛のエサ

子規の書に感動をしてまだ死ぬず

高知市 北川竹萌

大鉢へ土懇ろに糸瓜植え

結びたる糸瓜日に日に垂れ太る

成熟果取る前我と丈等し

果を取りて終糸瓜水二升程

薬剤師手を経て糸瓜化粧水

高知県 赤川菊野

花束を抱いて姑の名をもらう

バグマンの帽子は私の青春だ

若者の闘志をわかつ竜馬像

ひとり居はじぶんで自分論しつ

毒舌の他に言葉を知らぬ男

岡山市 井上柳五郎

人柄のよさから軽くあしらわれ

自己弁護もつともらしい嘘並べ

やさしくに育ちこの子は落ちこぼれ

うっかりのミスの重なりわだかまり

父母祖父母曾祖父母までひ孫撮る

倉敷市 田辺炎六

喜寿過ぎて傘寿へ欲の橋を架け

年金の余生緑を友として

服すればやさし逆らう水きびし

贅沢のゴミで地球の首を絞め

花の数減して朝顔秋を告げ

倉敷市 井上富子

一期一会のお茶をすすめる出し袱紗

年金を少し省つて義援箱

頓服も吞んで稼いでいる学費

草臥れて一寸甘えた広い肩

ウーマンの他人に頼らぬ眉を描く

岡山市 荻野鮫虎狼

蜘蛛の糸程の絆を大事がり

主義主張違つて騒ぐ秋の虫

同窓の女の過去は語るまい

牛乳を吞む口髭が邪魔になり

御信心ですと僧侶の無表情

岡山市 二宗吟平

亡娘のお墓小鳥が枝で帰り待ち

古日記整理暫く若返り

ご縁日金幣の風有り難し

送り火の争いもなく列続く

出歩くな姥捨て山は己が部屋

岡山県 富坂 志重

あの方の住所しり度く地図を買う

溺愛の花はゆがんで咲いている

谷川の橋にもたれて過去といふ

また逢えるおしやべりの種ボケツトに

逝く日までまだ追う夢が残つてゐる

岡山県 矢内 寿恵子

咲いて散る野の一輪の名も知らず

めくるめく仏と私の時間帯

あれも夢これも夢かや名残り月

忍従で育てた子等に報われる

厳しさを通した長い旅つづく

岡山県 山本 玉恵

石仏の丸さに置いて来た涙

想い立つて駒を進めと肚の虫

鬼の目の涙を近くで見えしまゝ

浅きゆめみし北風のまん中で

胃の中にあればん坊が宿かりに

岡山県 大石 あすなろ

コンパクト今日は若いと煽て癖

しばらくは無口のままで清め塩

哀の彩少し含んだ抽象画

虚と実と混せて流れは渦になる

恋のシャッター開けるパワーを貯めている

呉市 横田 英詩

眼を閉じればドラマの余韻ひしひしと

正面の大仏さまは仮眠中

反省の鴉忽ち白くなる

柿の種八年先は遅過ぎる

所により雨とは傘を愚弄する

竹原市 小島 蘭幸

師の手紙父の手紙がある秋よ

柳誌ずらりまだ仏壇は置いてない

なにも言うことがなくなり父といふ

十八歳と二十歳 我が娘でありけるよ

自転車を生き返らせて街光る

竹原市 森井 菁居

生涯現役目ざす句帳の心意気(九十三歳A女史へ)

参考として運勢の吉と凶

フランスに恋して枯葉口ずさむ

忙中閑 小さい秋見つけた

佳日優麗 秋の女の貸衣装

竹原市 岩本 笑子

辞書出して来てはかどらぬラブレター

恋の微熱かほっこり温い石地蔵

涼風をもらう自動ドア越しに

行つて来ますキーもサイフもまた忘れ

クイズ解くお昼休みが短すぎ

竹原市 時 広 一 路

吃水線塗り変え荷物軽くする

切手貼る一つの切りがついたから

八時間眠る暮しで恙ない

たつぷりと有った時間に急かされる

太平の世だね堂々へアヌード

広島県 藤 解 静 風

二千年問題わたしも狂うかも知れぬ

淋しいね外面ばかり見る世相

米を研ぐこれも料理というのです

人間と言うおもしろい芸をする

語るにはまだこの体熱すぎる

美祢市 安 平 次 弘 道

二枚目の舌が出かかるから困る

明日開く花を仏に切つてあげ

過去帳を繰れば先祖はえらかった

光るものひからせ女おちてゆき

引き潮になると肋が疼きだす

鳥取市 武 田 帆 雀

男振り小さいが風を握つとる

未発弾きれいに育つ三姉妹

信用は第二自分が忙しい

腹いっぱい食べて糞して菊の虫

運は無いまたも束子を引いてくる

鳥取市 春 木 圭 一 郎

毒を飲み皿まで食べるひとが増え

毒蛇も工夫をすれば精がつく

毒舌の合い間に本音見えてくる

挑発し毒牙にかかるのも悪い

酔眼に毒毒しさが心地よい

鳥取市 岩 原 喬 水

西方浄土仏にすがる歳になり

老妻はどうせなおらぬ癖と知り

うちの子はのびのび育てあかんたれ

定退がだんだん強い妻にする

夢叶うまでは人生幕降りぬ

鳥取市 上 田 宣 子

母さんをずっと待ってる鳩ぼつぼ

わたくしも帰りそびれた伝書鳩

止り木でうなずく鳩になつてゐる

携帯の奥から響く鳩時計

酔芙蓉しばまぬ先に鳩もどる

鳥取市 徳 田 ひろこ

家系譜を貫いているお人好し

控え目に光る貴女も母であり

ハンドルを握って私光りだす

おおらかな空が呑み込む伝書鳩

と金まで信じる一步二歩すすむ

鳥取市 杉本孝男

幸せに浸るカーテン替えた夜
仲裁が入り興奮また募る

公然の秘密が通るけもの道

仰向けば愚痴も怒りも吞む青さ
うわ言も三度目本音らしくなる

鳥取市 美田旋風

四季の風乗って楽しい途中下車

会長の肩書き腰を上げさせる

欲の皮突っ張り過ぎて蟻地獄

歳月がいつか来た道忘れさす

子が釣った鮎は骨まで噛みしめる

鳥取市 植田一京

隣の塀越えた熟柿はただこう

弾み過ぎ跳んでしまった境界線

過ぎしことサラサラ愚痴は言うまじく

リハーサルの時にはいつもよく出来る

願ひ叶って終着駅へ掌をつなぐ

鳥取市 西村黙光

作物とやつと話が出来だした

作物も外語チョイチョイ使い出す

涼風へ一氣に進む腹時計

汗掻くときさらさら光る握り飯

月の出へ桃源郷の畑仕事

鳥取市 山本正光

岸和田はいいな関空近いから
相槌を沢山した人が味方

改めて日の丸掲げる日和かな

父母の汗浸み込んだ土間あたり

にんげんに成ろうと長い経あげる

鳥取市 坂田和歌子

お祭りが済むまで鬼と手を結ぶ

窓際へ切手のように蝶が死に

師の一字もらい野党に成り下がる

時計さえ重く感じる病もつ

水か湯か解らぬ熱さ湯灌なり

鳥取市 近藤佳子

さんま買う猫も私も大好きで

母おくるけむりに空が青すぎる

親の背に重く貧乏物語

終の日の覚悟が出来ぬ未熟者

ヒラヒラのニューファッションもローンです

鳥取市 岸本孝子

命名の墨はたつぷりつけて書く

追い風で自然に跳べた水たまり

麻酔から覚めたら次の欲がでる

米びつをいつも満たしているゆとり

若い娘の光を少しだけ盗む

鳥取市 富山 檳榔樹

老いの坂看護させられ看護され

時化するも風ぐも彼女次第の風になる

睨まれるタルマに嘘がつけますか

ゆつたりと老ゆるとしよう月を見て

観月に屋台酒酌むかぐや姫

鳥取市 倉益一 瑤

大輪の花を咲かせと抱きしめる

赤ちゃんの笑顔に仁王目尻下げ

泣き声に遠い記憶の乳房張り

赤い靴買つてスキップまだする気

夕焼けの赤は仏の残り火か

鳥取市 河川 洋々

仰ぎ見る虹は無欲の色でない

愛告げる手話十本の指が炎え

手さぐりの愛はだれにも覗かせぬ

主義通す帆だぞためぬだっちゅうの

もしもしが届かぬ恋の氷河期よ

倉吉市 野口 節子

御両家を互角に褒める披露宴

アリバイも嘘も崩れる妻の勘

のこのこと酒のつまみになり来た

森羅万象神の恵みに斑がある

風紋の虜になったカメラの眼

倉吉市 松本 よしえ

道の駅うちの間引き菜売れている

河岸でいまライバルが跳ぶ構え

ライバルがわたしの倍も力んでる

難民のキャンプに雨が降り止まぬ

消しゴムがとなりに行つて戻らない

倉吉市 淡路 ゆり子

野良一筋に走り続けた足の裏

恩返す包み切れない母の愛

一匹の秋刀魚二人で足りる食

平凡は非凡と電気消して寝る

灯明にこころのしこり溶けてゆく

倉吉市 山中 康子

コスモスが仲間を誘う秋日和

打診する中は望みがあるらしい

柵の厚さに耐える遍路みち

感傷の秋つぶさないように抱く

抜け道をやいばに向ける子の悲し

倉吉市 米田 幸子

雑草も何時か天下をとる夢を

厳格な父が選んだ回り路

傷ついた鳩を労う母の杜

ゆつくりと走る部品もがたがきた

大かきで目差しています向こう岸

米子市 神庭詩郎

退職後婦唱夫随に切り替わる
介護保険只今施設建設中

寝たきりへ敬老会の案内状

理解しているのと許すとは違ふ

しかばねを残して終わる蟬しぐれ

米子市 石垣花子

パンの耳捨て中流の顔をする

人命救助手柄顔さえ一つせず

助手席で妻の助言が的を射る

幻の世界見事に新能

腹も立てずに猫の破った障子張る

米子市 木村富美子

蓮の葉の滴ころころ仏色

いつまでも合図ののろし待っている

仲間からリレー電話で来るニュース

しまい風呂今日と同じ明日でいい

遺された彩が次第に美しい

米子市 林瑞枝

生きる道愉しむ旅の達人に

悪夢消す髪 南天をかんざしに

額に入れ想い出飾っている夫婦

昭和史の戦死の兄もいる家並み

花は利巧で暦に合わせ咲いている

米子市 青戸田鶴

北へのあこがれ青森の空高かった

岩木山も弘前城も絵のようで

ねぶたらの強烈しい武者の貌

みちのくの心にふれた熱い旅

編棒の先にも秋がしのびよる

米子市 澤田千春

象の足まで引きずりこんだ蟻地獄

夕顔がもの言いたげに身をゆする

人間の姿に戻り水を飲む

おおらかな想いをくれる山の峰

東京タワーのてっぺんで見る我が手相

米子市 光井玲子

節を越え又ここからの橋渡る

心の隅に先祖の神話置いてある

折々の風が勇気をくれている

小出しして記憶の景をいとおしむ

静かすぎて老夫の部屋をふと覗く

米子市 野坂なみ

ダンボールの倉庫鈴虫鳴いている

配られた飴をついつい口にする

世紀末 法話も落語 講談で

隣合わせたご縁が今も続く柳友

黒子役の芝居そろそろこの辺で

殺ぎ落とす物を落として校了す

米子市 政岡 日枝子

大芝居打って連休大作戦

萩の道風のかたちでついでくる

酸漿の朱になるまでの物語

誰も無言でティッシュペーパー貰ってる

米子市 白根 ふみ

夏草の城趾孫との隔りが

石垣が五万石ほど反りをうつ

しのび寄るように夜長になつてゆく

月下美人ようやく時が迫りだす

吠えすぎる犬に残暑がなおつらい

米子市 中井 ゆき

年とつた獺も一緒に川渡る

夏疲れお願いごととも数へらす

コスモスと地ビール飲んで天国よ

好きやねん大阪弁なら言えそうで

石の家石の道ゆき旅の顔

米子市 鷺見 正子

我が父を越える男にまだ逢わぬ

お帰りとまつ先に言うビール缶

水は白かったよ水色のクレヨン

外遊の鞆で銭の音がする

真っ直ぐに見るのがとても難しい

延命器具に縛られたまま友が逝く

米子市 永井 三津子

近過ぎて三年振りの里帰り

休日のひとつも見えぬ母の窓

ふるさとに焦れたまんまビルの月

捨てなくちゃ捨てなくてはとタンス買つ

米子市 茂理 高代

どうしても忘れられなく海にゆく

この海に沈めたいもろもろがある

鈴虫は思い出ばかり掻きたてる

悲しいと仏間の畳拭いている

この世には泳ぎつかれたあめんぼう

米子市 門脇 晶子

再起する足に似合つた靴探す

還暦の恋は財布がついている

雨の夜昔の夢と添寝する

生きているあかし風車が回る

沖まではスロースローで行くことだ

米子市 木村 春枝

枝の先祭りの名残りゆれている

玩具箱遠い昔が遊び出す

就職を悦ぶ孫へ老婆心

一期一会 孫と松江の小旅行

時どきに駆け込み寺を利用する

夕木立白鷺宿り花の如し

鳥取県

林

露杖

ワープロの手紙名文そっけない

はいはいと二つ返事で放つとかれ

あら嬉しちつともうれしそうでない

満更でないまなざしにうろたえる

鳥取県

乾

隆風

ゆつたりと新米コメ櫃を満たす

大根の持ち味と添う五十年

責任の無いのがあだこうだ言う

矢面に立つ男なら推してやる

善人の顔にカラスが首傾げ

鳥取県

乾

喜与志

老いたなあボチボチ歩く暮らしする

おい元氣かと声くれる者も減り

涼しくなった詩がまだ詠えるな

少子化の世に曾孫らの十二人

晩酌のおかげで坂を上られる

鳥取県

幸家單車

苦勞させ人の痛みを悟らせる

ライバルの飛躍秘訣を探り出す

馬鹿役のタレント一座盛り上げる

銭積んで飛躍の種を蒔き散らす

下駄履きでタップダンスを踊ってる

ドナーカードの善意で生きているいのち

自分史の節目節目にあるいのち

予定どおり着地をしたい二千年

西からの風が予定を狂わせる

リストラで勤勞感謝できません

鳥取県

橋本多哥由

退化せぬように気合をかけている

気が晴れた素足で砂の私語を聞く

芸一つ違ふと猿の芝居です

一枚の板のドラマは一つの絵

筋金をいれて厳しい道進む

鳥取県

原みさを

ビールごろ寝 日本の夏に耐えている

死体ごろごろ地球は今日も病んでいる

月天心結論は出ぬまま歩く

自然からもらう厳しい請求書

地球儀の尻のあたりに火がついた

鳥取県

羽津川公乃

計の続く空しさ作句中休み

声出さぬ日は思いっきりドッコイシヨ

祖父母との暮らしも知らず祖母となる

天高し局まで五キロ ペダル踏み

結婚も出産も無い秋深し

鳥取県 塔 寛子

鳥取県 土橋 はるお

ドブ漬けの紫楚楚と朝の膳
絵手紙に描き残された茄子のヘタ
ハーモニカとぎれとぎれに過去つれて
芽を出さぬコスモス多分笑ってる
ホールインワンもあつて達者で幸せで

鳥取県 石尾 かつ乃

鳥取県 土橋 睦子

バス停に待つ習慣の親ごころ
香煙の列から偲ぶ過去あまた
うれしいな活字となつた五七五
減反の田から湯が噴くどうしよう
麦藁帽一雨ごとに秋の風

鳥取県 吉田 孔美子

鳥取県 岩崎 みさ江

二歳児の奇声お盆を貰いた
真ん中にナイフ左右に幼い目
光りものさして食指も動かない
ため息のような呼吸で生きている
捨てる足袋洗つてと言う母でした

鳥取県 奥谷 彩子

鳥取県 津村 八重子

朝の空気一人占めして万歩計
国訛り触れて心の鬱融ける
念入りに髪セットしてフルムーン
リストラ無残人情も袈裟懸けにして
秋実り少女も羽化を急ぐなり

蟻の列中にまごつく蟻もいる
鮎鯨がのぞく女のグラスボート
ポアされるような覚えはありません
カーテンの隙間から良心がのぞく
地震に強い爺ちゃんの大丸橋
無関心よそおい耳を傾ける
秋桜をお喋りにする風が吹く
まだ古希と小鳥の世話に明け暮れる
光る日もあろう路傍の石になる
万華鏡のぞく私の小宇宙
一つまた童に還る誕生日
リストラの無いしあわせの葱刻む
老犬もドッコイショツと立ち上がる
獣のように死ねたらと思うお葬式
火は風を産み風は火を育て
天高し秋風薫るススキ野に
此の町を誇つて咲くかそばの花
米余りカカシの弓も張りがない
庭の花一枝切ろう亡父の忌よ
学び舎の友彷彿と夢にうく

鳥取県 西川 和子

姿から素敵な人と思ひ込む

それなりの姿のままに枯れて行く

しゃしゃり出て大きな穴が待っている

一言によけいまごまごしてしまふ

寝たきりになつても母は子を案じ

鳥取県 近藤 春恵

雨乞いの傘がシャンシャン派手に舞う

雨宿りコーヒー店で鉢合わせ

餌運ぶ蟻に休日などはない

喧しく言えば子供は貝になる

移り変る世相だんだんこわくなり

鳥取県 石谷 美恵子

背をのびし歩こう歳にためらわず

穏やかな水面へ深き油断する

胃潰瘍なぜか見舞いが多過ぎる

糞虫になつて嵐をやり過ごす

ご詠歌の声は弾まぬ方がよい

鳥取県 さえき やえ

さぎそうが咲いて一日笑い声

ごんたの手紙でにをは抜けて詩となる

まだおんな少しおぼろに髪を染め

やがてくる終の日までの花つくり

別れとはさらに稲穂の音がする

鳥取県 村上 信子

バスツアーゆつくり仏像おがめない

亡母の忌に雑巾がたく搾つてゐる

老いの身も儲け話に気が動く

叫びたい本音は小さい声になり

酒も呑み薬も飲んで燃えている

松江市 安食 友子

こつそりとあつぷあつぷをしてる敵

ある予感わたしにもありますハート

反省にファッショ的ですよ虫の声

セレナーデ愚かな希望忘れさす

無頼でも別れの時はやはり泣く

出雲市 板垣 夢酔

快復期空気おいしく吸うてみる

頑張つて葉はいるけれど花は枯れ

俺よりも影が上手に会釈する

去る者が去つて構内虫の声

スズ虫よ上手に鳴けと朝の茄子

出雲市 久谷 まこと

四面楚歌生きるも死ぬも一人ポツツ

不揃いな親子力の米作り

寄り道が多く帰れぬ影法師

雨足のますます強く虫黙す

雷鳴の一際高く梅雨上がる

出雲市 吉岡 きみえ

近くても遠いと思う血の絆
瘦せたなあ秤の上のひとり言
もう一度ふんばってみよう生きてみよう
雲が行くわたしひとり置いて行く
仏さまうしろの正面だあれ

出雲市 岸 桂子

行間に遊ぶ一人のサスペンス
老いと言う字にこだわっている六十路

頑固さが老いの車を重くする
筋のない芝居で終る今日の幕
一灯になればと貯める一円貨

出雲市 小白金 房子

抜き立ての野菜洗って娘に持たす
ふる里へ力んだ孫の初便り
納屋の隅主役をおえた乳母車
敵味方持たぬ女の丸い鼻
祭り笛刈り田を渡る秋の天

出雲市 石倉 芙佐子

軍団のラッパの音は幻か
孤独感切々せまる群の中
四五人と付かず離れず旅をゆく
一粒の真珠は群に潰される
群がって強い力を遠巻きに

出雲市 小玉 満江

美人画展やさしい顔で見て回る
同居して孤独だなあとと思う夜
慟哭の湖よ幼い水死体
もの言わぬ案山子の目玉恐い顔
追いはぎがひよっこり出ぬか山の道

島根県 小砂 白汀

天に連なるごとし海の青
やけくそで打った一打がホームラン
父さんをこどもに還すプロ野球
年寄りよそのけそのけ車がとおる
また転ぶさては大地が恋しいか

島根県 榊原 秀子

美術館私やさしくするところ
抽象の絵も字もわからぬままに見る
乾山の話主治医とうまが合う
残照の中で私を見失う
ためらってまだ本心が話せない

島根県 堀江 芳子

故里は夕焼け雲の中に生き
金縛りの如く互いを離されぬ
もう埋めた思い出つくく虫しきり
腰痛も二人三脚だと主治医
重い実を真夏に万年青初春を待つ

京都市 都倉求芽

星はみなどこへ行つたか街の夜
結審の頃にはがらりと世が変り

潮境 海にも主流派反対派

昨日まで憶えていた字を今日は辞書

愛の異仕掛けて孫を待っている

京都市 山海友熙

一日を無言で過ごす枯芒

帯きゅつと締めて写経の墨をする

夕月やわたしも化粧して出掛け

旅に出て波打際で恋ごころ

そして女そして男の影法師

京都市 稲葉冬葉

3Bが短くなって句が冴えぬ

割勘で通した恋にむりがあり

棚からのぼたもち賞味期限切れ

逆光に晒すと根性見えてきた

恋重ぬれど愛遠かりき万華鏡

神戸市 山口美穂

お見舞は元気な声を置いて去に

口許からふわっと人柄こぼれ出る

庭の花こぼれ種です遅れ咲き

弟の横顔ふつと亡父に似る

遊ばれているのはわたし犬と居る

尼崎市 春城 武庫坊

逃げ風船落ちつく先は故郷か

台風それで髭と爪とがよく伸びる

おしゃべりが続くと嘘も混じり込む

鰯雲旅人の心そそのかす

播州路に沿う鉄塔は夏疲れ(叩の花吟行)

尼崎市 春城 年代

北山川の原風景を恋うしきり

涼風のごとき娘のたより着く

故郷のお盆捜しに八百屋まで

クラスメートの夫の背中見て歩く

すべからく愛されている蘭の花

西宮市 奥田 みつ子

ハロキティ 姑も参加の紙婚式

乳飲ました記憶がかえる秋夜長

好きだった秋を嫌いにした月日

親切のつもり 迷惑かも知れぬ

鼻欠けた地蔵と話す丸い月

西宮市 西口 いわゑ

谷底の石も努力をしています

酒とろり心の通うひといる

生きている証のような満員車

たたかいを終えた背広の眠くなる

壇上のばらが大会やわらげる

西宮市 山本 義子

障子貼りせめてここなと秋のいろ
マンション暮らしふと庭掃除懐かしい
種蒔いた蒔いたとあまり力まない
街に出て秋のカラーに気付く古い
同じような間違いつてる同じ歳

西宮市 秋元 てる

四捨五入 五入切りで楽しかり
去る者は追わないなどと若かった
ひよいと来てころころしゃべりついと去る
過ぎし日の喜怒哀楽が味になり
土産物すぐ開ける癖この人も

西宮市 門谷 たず子

ケセラセラでゆこうコスモスが揺れる
改札機腹立たしげに出すカード
帰らない山びこを待つ老いの影
生も死も何れ無になる海の碧
余白にはわたくし流の絵を描こう

西宮市 牧 渕 富喜子

糠づけを終えて八月十五日
米を研ぐさざれ石のがふと浮かび
水道使用量のお知らせ 晩夏
ぶり返す暑さ裏切りだと思ふ
指輪するそのエネルギー エネルギー

西宮市 菊池 トミエ

西瓜切る一瞬夏がほどばしる
箸割って冷麦さらり喉を越す
他愛ない話弾んでかき氷
四捨五入いつも切られる側に居る
明日の身は約束できぬ乱れ萩

西宮市 長谷川 淳

恐れ入る下手の横好きなんて嘘
お酌する手つきで変わる酒の味
算数がいやで先生まで嫌い
歴史書にタイムカプセル雨の夜
うちの妻勘のよいのが玉に瑕

西宮市 井上 松煙

盥蘭盆会亡母への詫びが増えていく
墓洗い亡母のきびしき懐かしむ
鬼灯を供えて亡母と話し合い
孫去んで余韻たのしむ二日ほど
かまきりの茶色になるも鎌をたて

西宮市 亀岡 哲子

子等キャンプ ニュース雨雨雨報ず
ひよっこりとキャンプ土産の郡上味噌
手の届くあたりの秋を探り寄せ
秋草を摘む小鉢を持つ散歩
運転の子の肩幅を愛おしむ

芦屋市 黒田能子

川西市 松本ただし

真一文字結んだ父の返事なり
齒ブラシの二本の暮し静かなり
お互いに隣の庭が美しい
それぞれのゴールは同じ泳ぎ方
母ならばどうしただろうこの迷い

加古川市 吐田公一

リストラと違う倒産やと息子
銀行へ政府支援は早すぎる
失業へ政府支援は遅すぎる
勤労へ感謝したいが職はなし
ご先祖へ残暑見舞の墓洗う

姫路市 古川奮水

月下氷人一言過ぎて鼻につく
悔しいと言うて表でおべんちゃら
膝曲げて高いサンダル履きたがる
不器用も口は達者で腕を組み
今日も無事明日へ靴のほこり拭く

相生市 中塚礎石

腹の中決めているから眼鏡ふく
へそくりをちびちび貯めた使い道
喜寿がきてやっとな跡目を考える
竹トンボ夢半分で急降下
可愛い目鮎の養殖見破られ

決心のついた所で足踏みし
マシンのドアは我が家の大手門
イヤイヤもフンフンもして芒の穂
下剋上 酒の力を借りただけ
三分で愛想も加えてくれる医者

宝塚市 嵯峨根保子

四月三日にさくら咲いてもさかずとも
静かにしずかに旨い蕎麦屋は子がきらい
奥さんもうどうぞと言ふときと来る
舌下錠とけたら饒舌りたくなつた
もの想う場所はクローラー効きすぎる

宝塚市 黒台伊佐武

趣味の輪が老いの生きがい支えてる
蛸が去つて鳴きだすちちろ虫
パソコンを贈られ猫に小判なり
移り香を言い訳しても赦されず
敬老と介護保険に因果無し

三田市 北野哲男

敗戦忌声にはせずに海征かば
恋詩を遠近メガネかけて読む
鈴虫の声置いてある無人駅
一気呑み怒りしずめるつもりだが
振花はよじれて天に向き孤独

兵庫県 大谷 幸次郎

大阪市 松尾 柳右子

夏ばてを労るように冷や奴

恐いもの無しとうそぶく田舎もの

蟻も来ぬ蟬の骸を埋めてやる

一枚の葉書で厚く札を言う

言の葉の重さ分厚い辞書に訊く

大阪市 西出 楓 楽

ひよっとして亡夫からかも受話器とる

時どきは自分にくさり掛けている

主義主張持たずワインはいつもロゼ

愛された記憶の中の萩の花

気がつけば近頃喧嘩していない

大阪市 神夏磯 典子

愛犬を悼むつきないものがたり

翔ぶ遊ぶつかい棒があればこそ

無関心同士綱引きやつている

白が好き他人は色をつけたがる

八方美人顔が足りなくなりました

大阪市 津守 柳 伸

趣味多彩生ある限り前向きに

夜更かしが止まず血圧いたわられ

一人旅プールサイドの物思い

夜目遠目満更でない待ち合わせ

眉細く軍艦靴の自己主張

豪快に嘘を抱いて島を出る

いさかきも無く金婚を迎えた人

人の輪が切れてしまった熱帯夜

電話機を取り替えたのと電話来る

厚靴に夢いっぱい青春譜

大阪市 井上 白 峰

練り過ぎた策が裏目の勇み足

焦点が合わず話がすれ違ふ

意地悪の影に嫉妬が見え隠れ

乾杯の後は知らない紙コップ

明暗を分けるコインの裏おもて

大阪市 町田 達子

露草の葉も入れて故郷便り

旅立ちの友のことなど追伸に

不思議の国ネコのダヤンの物語(池田あき子原画展)

曼珠沙華午睡の夢に平戸島

ご先祖に報告あれこれ彼岸寺

大阪市 本間 満津子

非常識慣れしてモラル忘れまい

もうリサイクル出来ぬ心に残るもの

遙々よう来た雨拭いてやる手紙

ささやかに器たのしむお晩菜

丸すこし欠けたところで肌が合い

大阪市 梶本 落児

文楽の頭いちずに結うている

勝つ時も負ける時にも躍動感

粒々と雫が走る九月雨

九月雨イルミネーション消えており

逆立ちで僕がこの世に残すもの

大阪市 大塚 節子

鯽と煮てと添え書きがあり夏大根

定年で長いお休みもろてます

驟雨来て腰落ちつけた秋祭

大事件地蔵盗難古い町

風邪菌痛負けず頑張れ老いの秋

大阪市 板東 倫子

リストラを終えて社長も職を辞す

反論はお酒を一くち呑んでから

図にのるな単に若いと言うだけで

秋の鮎中流意識まだ抜けず

仏にも鬼にもなれぬ鬼子母神

大阪市 小林 周信

孫弟子が路郎師唄び句碑詣で

世話好きの老母に内助の老父がいる

白旗を掲げた後もまだ迷う

飲む会は二つ返事と読まれてる

ハンカチの白は今更変えられぬ

大阪市 清水 絹子

一番星今日も一人が無事に暮れ

約束はせぬがいつかは母介護

困ってから親の同居はなお困る

叱るにもまた明日にするなさぬ仲

いつの日かお側ちかくへ侍りたや(室生寺展)

大阪市 岡本 久峰

惜しげも無く万札はたく食い倒れ

和服美人引き立つ北の繁華街

改札へ軽く一札無料パス

オールドミス女医三人の北の旅

注文書働きづめの老いの日々

大阪市 川内 叭笑

蟬達をそつと叩く虫の声

なだめ役叱る役目も居て丸い

そらあんな食べ過ぎてっせ試食品

「タガ」緩み何かありそな世紀末

不況風管理職にも容赦無し

大阪市 清水 利武

焼きたてのさんま新米うまい秋

土佐の海鯨見るのに金がいる

嫁姑ぼそぼそいっている姑

苦勞して育てた我が子母殺す

飲み過ぎて言語障害生き地獄

大阪市 杉澤 汀

ナイターの勝ってるうちにつく家路
買ってきたヒヨコ残して孫ら去ぬ
古稀すぎて亡父の背中を思いだす
観光に積んだわけではない棚田
飛鳥路に伽藍の跡と曼珠沙華

大阪市 玉置 英子

蠅取蜘蛛ここはわが家とのんびりと
それはみな老化と医者は軽く言う
補聴器をつけて聞き入る虫の声
いつもどおりおなか空かない日も三度
生きにくいこの世田螺はなおのこと

大阪市 中田 あい子

泣き笑いするテレビから教えられ
根菜に果物かかさずケセラセラ
無関心よそおう父がすべて知る
甘えられ甘える人なき身にも秋
世紀末暗いニュースがふえ続け

大阪市 川原 章久

散らかし魔片付け魔とが寄る夫婦
銅鐸の調べを運ぶ秋の風
切符買わぬ親に小一ふくれ面
自我強く黒着る女に無い妥協
下駄放って試し度い秋気象庁

大阪市 津村 志華子

母さんが幸せそうに鍋みがく
笛太鼓遠い思い出消したダム
万燈の灯に亡父の影亡母の影
カーテンが揺れて小さい秋の使者
朝顔の彩を納めた黒い種

大阪市 安達 はじめ

人情をコンピューターは感知せず
言いたいと言えど女房が背を向ける
少子化に老人ばかりの地藏盆
子も孫も同じ神社で七五三
責任者聞こえは良いが部下はなし

大阪市 田中 節子

風呂帰り残り香誘うすれ違い
秋風の立つ二人にも初心なころ
目立ち過ぎ打たれる杭にさらされる
湯豆腐のちりちり淋しひとり膳
秋しんしん壁の写楽と酌み交わす

大阪市 鈴木 トヨ子

痛烈な恋が花火と共に散り
母の形見未練がみちて抱きしめる
今年こそ孫出来てほしい願かける
山里のカラス野性の顔で啼く
喜びは趣味を生かしたボランテア

堺市 桑原道夫

太陽に届けと西瓜の種を吐く
寺町に来てハンカチでぬぐう汗
冷蔵庫にやつ当たりしてよいものか
水を打つ音もそろそろ秋になり
父の握り拳だおもむろに開く

堺市 黒田真砂

側溝の鯉にみとれて歩をのぼす
キッチンに初秋の風が忍びこむ
茶髪にもピアスもしない孫が好き
探し物ばかりが増えて脳老化
未だ女であり度い想い紅をひく

堺市 志田千代

よその子がバッチリ撮れた徒競走
カルガモの母さんツンとして泳ぐ
雨々ふれふれ母は迎えにこなかった
氷枕 私一人の母になれ
母さんが金づちだったとも知らず

堺市 宮本かりん

生きて来た時を溜めてる砂時計
住職と声を合わせるとお命日
酒飲めぬ人生損をしたような
別の事考えながら意見合い
ぎりぎり走り出す癖なおらない

高石市 浅野房子

赤い花青い芝生のあるとなり
オバタリアン喋らなければ淑女です
助手席に乗せてはくれぬ距離があり
看取る人となないが入院もせず
人間の諸行無常と知った骨

豊中市 吉田あずき

いくさの絵巻 地球果てるまで続く
白と黒流行り黒へ逃げてみる
ロボットに手をひかれてる新世紀
カレンダー早めにちぎり秋早む
秋の空しっかり筆を洗わねば

豊中市 井上直次

惚けたなアと笑い合えてるのもゆとり
万歩計秋が好きらしせつつかれ
有難い法話が誘う夢至福
マニユアルの通りにしたと言う油断
ペアルック男の顔がないと爺

豊中市 滝北博史

中心はモミジアオイか盆の庭
五山の火にさらばさらばと京の夏
若人が意外に多い盆の寺
心配も不安も無いと言う白寿
再起する決意で抜いた大白歯

豊中市 湯浅馬洗

点滴は今の自分と向き合わせ
点滴十日喜怒哀楽の灰汁が出る

川柳塔 人間観の万華鏡

こころの風景川柳塔を噛み締める
あるが儘こころを記し駄句二三

池田市 岡本吉太郎

朝ドラを何べんも見て涙す老い

川の流れのような生涯で悔いなし
四季という時計で見れば早いこと
時間とは何も彼ものむ力持ち

貧乏人ストレス逆手に生きてます

池田市 栗田久子

からからとどちら向こうか風見鶏
限界と知れば王者のうちに去る
進みたい方へこの顔まず向ける
吾亦紅 渋茶の色で揺れている
てっぺんに大輪一つ白い菊

池田市 藤井計光

煩惱をたち切る雲を追っている

無駄のない人生模様息苦し

厚顔で理不尽ひもとく永田町

活断層ゆるがす火柱抱く小沢

リハビリで三歩歩けて拍手され

箕面市 椎江清芳

象の鼻長さに理由などはない
極楽へ行くには舌が長すぎる
税務署が怖くなったら一流だ
水割りの底で煩惱まだ消えず
めまいしたぐらいで酒はやめられぬ

箕面市 岩津ようじ

夫婦ともあんないい人別居中
反論も笑いもせずに聞く惚気
喜寿すぎて五キロ太った怠け者
後輩が上司と妻に切り出せず
自自公という真剣な福笑い

箕面市 出口セツ子

松茸を買って慎ましやかな幸
帰省子に一品多いと次男言い
うち潜む私発見してる旅
自立せよ甘えても欲し親のエゴ
名月に浮世の垢と嘘を恥じ

箕面市 唐住実

秋風に妻の思わぬ事思う

皆既食ブラハの街と月と陽と

御返事に返事を出してから続き

大阪の残暑 名物一つ増え

秋風にさそう手付きもチョコとなり

仮りの世の命とて惜し胡蝶蘭

吹田市 山本 希久子

夫の傘と彼岸へ続く橋の上

弥勒仏の光背思惟の刻深し

衆を頼んでしたたかなコスモスよ

六十年女偏とは縁切れず

吹田市 瀬戸 まさよ

汽車弁に温いお茶ない夏の旅

汽車弁の鰻井だけが温かい

登山者のメツカ何処に上高地

林道のシャッター紛う稲光

経験の差に歴然と登山靴

吹田市 石原 靖巳

流れ星アバンチュールがしたいのか

秋風にさて朝顔の意気地なし

四捨五入出来ぬ私の苦勞性

散髪をせよと敬老サービス券

よき教師ないは孟母の昔から

茨木市 井上 森生

じつくりと余生は歳で温める

旧友に元気な一句をEメール

猛暑よし活気のもとが取り込める

ウッソーはまことヤングの感動語

久方の大阪城へ同期会

日傘ごと会釈をし合う顔見知り

遠回しノーと言ってる女文字

母に似て妻が好みの豆御飯

入道雲男言葉の少女達

投函後ほっと一息喫茶店

茨木市 堀 良江

自慢する人も話も好きじゃない

階段を数えてもぐる地下の駅

お顔よりボディがはつとする美人

タイピンに誕生石を小さく入れ

夏休み終る日を待つ母と子と

高槻市 井上 照子

現し身のまた幾度の命乞い

玉音に頭を垂れて灯がついた

発芽待つ花待つ実待つ欲深し

囲われた鈴虫心ある如く

夫の詩を創って閉じていく回向

高槻市 傍島 克治

我を折って実入りの多い方につく

反論が出来ず無口が続けます

おはようとおやすみだけの夫婦です

矢印を疑いもせず不覚とる

立読みの続きの本が売れてない

守口市 結城君子

先ず犬のお見舞を言う電話口

寝屋川市 岸野 あやめ

パンドラの箱 合鍵はいりません

お話がとつても合うの昼の月

この道はいつか来た道姉さまと

コスモスの猫撫で声にだまされぬ

寝屋川市 江口 度

地味な服かえつて目立つ披露宴

たまに顔出しとく殺されないために

信楽焼も狸からふくろうに

コスモスの前で約束などしない

箒目の波に浮沈のこぼれ萩

寝屋川市 高田 博 泉

大輪の菊咲いてから落ち着かぬ

ギンナンが重い頭に降ってくる

酒の味うまいと分かる呆けてない

熱燗をなめて現役主張する

お上りがホームレスから道を聞き

寝屋川市 柴田 英壬子

鶴屋八幡ちと早すぎた内祝い

区切りつきたい髪がなかなか整わぬ

真実の姿をさらす心算なり

なぜあんなに泣いたのいまも孤独だよ

雨に打たれた舗道から夜が明けてくる

秋彼岸ずんだ餅など手作りに

君が代に民のいのちは謳われず

同心円描いて夫婦もやるせない

盛り場へ行きたし秋の服買うて

その昔ハンサムでした痴呆症

寝屋川市 平松 かすみ

合宿を元気で帰る麦茶色

捨てられぬ孫の土産の包装紙

落ち着きのなさをカメラにきらわれる

自画像のグイやは本物のように

塩もみで落ちたでしようにか体脂肪

寝屋川市 太田 とし子

新世紀隣はどここの国の人

たそがれた命を告げる鳩時計

ベッドからベッドに通う人心地（事故に遭う）

なんやかや言うても嫁を待つベッド

わつと来てわつと帰ってゆく仲間

寝屋川市 妻谷 重三

かんにんな紙のリボンのプレゼント

カラオケに予定ある日の朝の経

夏休み子は宿題を訊いてこず

敬老日介護保険の本を買い

狭き門少子化だけがたよりです

寢屋川市 籠島恵子

春夏秋冬 墨絵の中のモノトーン

落日を追いかけている月見草

虫の声蟬はとつくに消えている

円周を広げた事は内緒です

残暑つづく九月がボタン掛けちがう

寢屋川市 富山 ルイ子

人との和大切にして古稀近し

アンティークについては行けぬ世の移り

インパクト与えて後は知らぬ顔

年金の行方あの人この人に

盛装はことわりますとホームから

寢屋川市 酒井 勇太朗

目標設定 僕は喜寿まで妻米寿

毎日を活気に満ちた面かぶる

スポーツに励み酒量もぐんと増し

兄弟会母に代って叔母招く

別れ際惜別の情かすめ去り

枚方市 森 本 節 子

盆さなか初咲きの木槿ま白なり

帷子を着ていた兄の夏姿

地下で買う泉州水茄子さつま揚げ

コトコトととろ火で冬瓜透き通る

この夏の日記余白なく埋もりぬ

枚方市 海老池 洋

枯れ色のカマキリ僕も頑張るぞ

学級崩壊なんかなかった紙芝居

それにしても軽いと思う玉手箱

うそ泣きへすんでのことになる財布

仰向けの蟬 南無南無と掌を合わす

枚方市 前 たもつ

産んでくれただけで母さんありがとう

夢見たと電話をくれる親友がいる

カルチャーで級長さんをしています

茄子の自負 冷蔵庫を嫌いぬく

太古にもすでに苦役の庭の跡

枚方市 鈴木 政子

一人減り二人減りして差し向かい

おばあちゃんいそいそ看護教室へ

警官も教師も生徒に戻りましよ

共疲れ月とすっぱん同居して

虎キチの放つ風船急降下

枚方市 寺 川 弘 一

女房に押されて一歩ずつ進む

嫌になる理由はひとつあればよい

筆箱を放逐された肥後守

ガムを噛むアメリカ野球大嫌い

うちの子が先頭ビデオ撮りやすい

東大阪市 指宿 千枝子

長雨も日照りも困る地球です
小さな庭通りすがりはほめて行き
呼び鈴に少し間を置き返事する
母九十忘れず朝の紅を引き
水族館泳がなければ生きられず

東大阪市 谷口 義

神様と約束をしたお賽銭
価値観が違って良かったと思う
正式に登録されている小皺
不適切な言葉の多い日であった
私にしっかりとせよと言うのかい

大東市 児玉 蛙

離婚という切札を持っている
毒気少しスパイスにして盛り上がる
童顔をごまかす医者 of 無精ヒゲ
泥酔をする程小遣いもろてない
気紛れにのった話にしばられる

岸和田市 芳地 狸村

だんじりの囃子に街が走り出す
はっぴきた孫がまつりの立役者
ドラえもん電報たのしい誕生日
ピラニアのベットがおこす泣き笑い
約束の重さは肩が知っている

岸和田市 岩佐 ダン吉

見送りの三振だけはしていない
莫山のさすがというかただの丸
平和とは演技で核をちらつかす
君が代を僕に歌えと言ってくる
本当の別れ母さんだったなあ

岸和田市 高須賀 金太

欲を出したらあかん人間おしまいや
神経質なばく癌告知せんといて
土下座して謝るように花しおれ
満月よプライバシーを暴くなよ
美人ではないが図抜けて背が高い

岸和田市 原 さよ子

祖母と行く歌舞伎に祖母の薄化粧
大根のうま味がでてるおでん鍋
どの子にも特別はない母の愛
同じ千支思えばこの娘も苦労性
入院が危篤になつてくる噂

岸和田市 藪野 けい子

コーヒーで日本の経済語り合い
自慢の爪にマニキュアの色選ぶ
二歳児とビデオを借りについていく
寡婦が四年目になって犬を飼う
余生にはカラフルな色着たくなり

岸和田市 原 苑子

かすり傷三日包帯とられない
大袈裟なふりに哀愁バントマイム
父さんの腰痛で知る仕事量
中心は脇目もふらず回る独楽
自分流生きて大根役者です

岸和田市 井伊 東吉

親長い子供短い夏休み
富士登山ツアー参加の妻元氣
群れ飛んでパターの邪魔する赤とんぼ
年金の記事はゆっくり読み返す
真剣なペナントレースやつと見せ

岸和田市 田 中文時

二日酔いやつと解放され退社
妻よりも物分りよい長女居る
栄転にしては佗しいひとり起居
夫唱から婦唱に変わる無為徒食
齧られる昔ゲートル巻いた脚

松原市 小 池 しげお

再会の姉にこれだけ言うつもり
軽い方ばかり持って行く他人
企画室 相談役が邪魔になり
参るたび電話が鳴っているお寺
手のひらで涙を掃いたもらい泣き

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

鍵かけて行こう花野は遠いはず
全身の力の抜けたマリオネット
グッドバイこのひとは大切に
待っていた返事最後に悪しからず
うすれゆく母の彩なりなすの花

藤井寺市 高 田 美代子

身の丈もキミに合わせる靴を履く
「ホッ」としたところで歌う秋の詩
上り框で育ちが知れたお客さま
ビタミンのどれが効いたか夏が過ぎ
何度でも死ねるピエロで生き上手

藤井寺市 福 元 みのる

風船がいよいよやしてる甲子園
不況では老人力も打つ手なし
繕いのうまさは娘母譲り
賛成の返信文字も踊ってる
ノーと言う返事を都知事溜めて居る

藤井寺市 楠 昭 子

得意など無いがコツコツ生きてます
老い二人掃除機そばに餅を食べ
もう一人の私が本音言いたがる
新学期ママも冷蔵庫もひと休み
同じとこに転び自分で腹を立て

羽曳野市 榎本吐来

駅前にはずらり外科 歯科 肛門科

グラス一杯今日の男を支えてる

空しさをあしたを生きる糧とする

僕の今日庭の青葉を背に負うて

合格を祈る四十の司法書士

羽曳野市 吉川寿美

割り切れぬ思いと食べる冷奴

病夫との絆を思ふ秋夫婦

わたしの駅に忘れて行った男傘

声たてて笑ってみてもひとりの灯

歳月の汚れを知っている帽子

羽曳野市 福田満州

とりあえず無事にテポドン一周忌

遺骨無き戦死者の墓花絶えず

ああ計報二十六歳工学士

脳みその手入れと思う飯支度

わたくしの腹にホアグラあるそうな

羽曳野市 徳山みつこ

灼熱の陽にたじろがぬピラミッド(エジプト 5句)

ピラミッドたちまち蟻になる私

愛想いいポリス駱駝でバトロール

朝もやにクレオパトラが手招きす

スフィンクス核廃絶の謎かける

羽曳野市 三好専平

背番号ぐらい自分で選びたい

百三歳の遊亀の梅に励まされ

五位驚が品良く歩む芥川

拍手より握手が欲しい身障者

ストレスの溜まる日本にたればんだ

羽曳野市 酒井一壺

肩のこるわけを知ってるのはお金

肩書きの付いた名刺を父に出す

大空のリストラなのか流れ星

満天の星とわたしの露天風呂

左遷地でしみじみと見る一つ星

八尾市 吉村一風

男坂まだまだ楽にさせぬ子ら

ゆずり合い見てると風も丸くなり

蝶は亡母だよきつと亡母だよひがん花

背のびも卑下もきつとまともな顔でない

夏の疲れ見せてならじと二次会へ

八尾市 村上剛治

父さんを盾に大波こわくない

追い風に乗ったら羽が生えたよう

代り映えない顔ぶれ路地住い

この辺でとどめておこう明日がある

お隣がちよっと気になる庭の草

念仏は私を映す鏡です

ときどきは波風も立て嫁姑

眠いのも忙しいのも楽しんで

知ってることを知らんと言うてみたくなる

背伸びしてみたが向こうに高い壁

富田林市 片岡 智恵子

時どきはさざ波の立つ我が家です

錯覚かも知れぬ輝く明日がくる

ろくろ師へ瞬間神が手に宿る

勇退という語が消えた不況風

目が酔っているのに酔ってないという

河内長野市 加島 由一

玉の輿蹴った美人に敷かれてる

約束の駅で読んではる倭万智

バスツアー妻を名前で呼んでみる

電話での声は娘のときのまま

仕事用じゃない携帯を持っている

和泉市 西岡 洛酔

肩書の無い三度目の職を積み

酒の席昔話が咲く同期

快食快眠快便天高し

突然の訃報に我が身振り返り

老骨へ空気がうまい朝をほめ

人間の諍いのツケ象の足

大阪を五輪音頭で炙り出す

公的の支援へどつと集り出す

やれるかな携帯文字でカンニング

こども議会おとなが吊るし上げられる

大阪府 米澤 俣子

脳からの伝達近頃遅れ気味

人生に突然のこと常時来る

化粧品売場もう呼んでもくれず

児も犬も甘い顔すりやつけあがる

どん底を見てから湧いてくるフアイト

奈良市 天正 千梢

奥飛驒に今も民話は生きている

田沢湖の水の青さに目をとられ

無一文結局さばさばしています

ものがなしいまでのしずけさ余呉の湖

歩く電話ひっかけ橋のにぎにぎし

奈良市 米田 恭昌

祝い酒断酒の鎖解き放つ

昆の絵の河童は僕の青春譜

ホームレスも故郷の台風気にかかる

飲む打つを止めてすっかり老けはった

藤の木古墳昔の人もお洒落好き

八尾市 村上 ミツ子

和泉市 岡井 やすお

生駒市 麻生 アート

よく観れば無口な蟬も居るのなり

過去帳へリザーヴしたい一ページ

遠花火ザ・ピーナツの声がする

杖ついて街の匂いを嗅ぎに出る

よっこらさとたてば間違ひ電話なり

生駒市 北山 悟郎

片足が虚しく消えた終戦日

迷うことなく執念が眼を据える

小粒だが手こずる力持っている

妻と娘が気儘な僕の桶となる

伴走の妻と人生かけ抜ける

大和郡山市 坊農 柳弘

お洒落してアバンチュールな星月夜

絵葉書に君の想いのしだれ萩

もみじ揚げ箕面の猿とご相伴

ドナーカード僕の右脳でよかつたら

こぼれ萩芯に残した花の業

大和高田市 岸本 豊平次

近江路の片側は湖水旅の窓

話し好きの隣で旅を草臥れた

過疎村に根をおろす気の赤い屋根

日の丸の他にどんなのがあると言う

仕合わせは靖国の神に友がない

香芝市 大内 朝子

わたくしの寿命を追ってくる月日

ぼっぱやの一路に亡父をふと偲ぶ

こころない世辞はオホホと聞き流す

ときめきのキャッチボールへ恋実る

深呼吸もう迷うまい秋の天

和歌山市 堀端 三男

屈託無い顔でゆっくり林檎剥く

四面楚歌しばらく達磨さめこもつ

叱られた数だけ恩を受けている

身辺整理 貸借無しで逝きたいな

マスコミよ少うし驕り過ぎないか

和歌山市 牛尾 緑良

マイナスもプラスも僕に鞭を打つ

老人と認めた父の酒の量

戦列を離れてからの常備薬

言い訳が長くて疑われてしまふ

親切な地図で近道ばかりある

和歌山市 垂井 千寿子

脇役のその脇役にも支えられ

淋しがりやの犬を飼うてる淋しがり

老いの瞳に希望を送る花の種

十指皆分弁えて仲が良い

一番風呂幸せな汗溶けてゆく

和歌山市 桜井千秀

人生の穴ボコ幾つ埋めたやら
ドアマット真っ直ぐにする何処のでも
名を知らぬ人は綽名をつけておく
超エリートにまんまと孫を攫われる
したたかなわたしを見てるわたしの目

和歌山市 福井桂香

約束の小指ふるふる散る花野
コスモスの吐息はきつと風になる
秋の金魚太陽の実が熟れて
分けましょう袋の中の解毒剤
素手素足わたしの武器はペンひとつ

和歌山市 山田高夫

小細工は嫌い真つ向勝負する
何もかも不問に付した風の海
不器用が女ごころをそそのかす
逆風に向かう男の傷だらけ
薬にも毒にならず平の椅子

和歌山市 青枝鉄治

矢印の通り歩かぬ天の邪鬼
ほっとした顔もまじった通夜の席
政治家は不在政治屋わんさ居る
四コマへ世相を詰めているマンガ
お互いが三流だからウマが合い

和歌山市 池永正範

登るより降りが楽と思ひ勝ち
格子戸は人間を皆暗くする
景色より添乗員の旗の色
山の端の月が侘しい日本人
甘さより辛さが好きで年を取る

和歌山市 古久保和子

直角にサイレン曲げてビルの街
老眼鏡試しに読んだ経済紙
満願へポックリ寺というコント
胃カメラに写し出された妻の顔
象の足ほども大地を踏むならば

和歌山市 山口三千子

秋風が立つて声調とりもどす
嫁した娘の電話標準語で話す
終着への身過ぎ不安をつのらせる
宇宙から帰還天国帰らない
私のオアシス庭に四季の花

和歌山市 玉置当代

蟬しぐれ二度と許せぬ原爆忌
伸び上がるたびに足下揺れている
笑いましょこれより底のない不況
大声で笑うと涙涸れてくる
大声で孫子が笑う通夜の席

和歌山市 田中みね
今に見ろ雑魚に闘志の芽が伸びる

奥様に弱みあるのか甘過ぎる
器まで平らげそうな食べ盛り
それしきで怒るな器小さいぞ
脇役にとんと馴染めぬ自尊心

和歌山市 川上大輪

忘れずに今日も鳴ってる警報機
風向きが変わる女が泣いてから
山門をいたわるように千社札
牛小屋に住みついている耕運機
紅葉が近い羅漢が笑ってる

和歌山市 川上富湖

消火器も入れる私の玩具箱
延々と続く情けの薄い堀
遠近の眼鏡を掛けて逃がさない
足枷は内緒だけれど切つてある
徒党組む事を覚えたカイワレ菜

和歌山市 木村初子

前向きに生きる八十路の舞扇
ひとときの極楽新茶桜餅
そうめんを静かにすする盃蘭盆会
風鈴が風の言葉を運んでる
百の闇ぬけて五月の空の青

和歌山市 岩本美智子
忍びよる秋つくつくほうしはソロが好き

網膜の光点減している眼
激痛は腸で荒縄なう如く
発熱が続く残暑が染みこんで
夫より先には逝けぬ理由がある

和歌山市 榎原公子

唾たっぷりつけて親書でございます
長生きをしてねと便り来たけれど
まっくろで秋を丸ごと食べる児よ
食欲よ堪忍袋はSサイズ
共感の笑いなんですお許しを

和歌山市 楠見章子

フリーサイズの服から秋の脅迫状
枝豆にはビールひとりよりふたり
お子様ランチの皿からひこうきが飛び立つ
寝ている間にゴルフに行っていた夫
ダイヤモンド目と目が合った誕生日

海南市 谷口義男

一年の早き身に沁む老いの坂
先達のつもりであかり点ける老い
よく聞けば幸せ過ぎて出てる愚痴
コッコツと貯めて築いた此のお城
まだ若い若いと思ひ暮らす日々

和歌山県 中後清史

異分子を混せて回転加速する
パイアグラ手に入れたいが処方箋
大股で歩き凜々しき誇示をする
巢づくりに見る一寸の虫の知恵
切り詰めるところは食費だけとなる

愛知県 早川盛夫

こんなこと人には言えぬ塗り薬
申し訳ないから何か一つ買う
疑えば出されるお茶も恐ろしい
よく遊ぶ金があろうと無かろうと
正席を避けて座った緋毛氈

静岡県 安本晃授

一粒の種を平和な庭に播く
ひと呼吸おいて真相聞いてみる
遅い歩幅老い込む隙みせず
躓いた石は無言で蹴り返す
カタカナ語モチーフにして艶歌の夜

富士宮市 渥美弧秀

“愛の讃歌”ピアノへハミング厨から
病み上がり視野いっぱいに茜富士
分校の児等の瞳吾を迎え入れ
居酒屋の年金同士気炎あげ
一抜け二抜け終着駅へ二人連れ

静岡県 園田 蓼 沓

黙祷に鎮まる天幕終戦忌
赤とんぼ人に近づき過ぎないか
秘境にも近代橋が光りだす
今日法話明日コンサート変な寺
干し梅の香を連れてくる曲り角

富山市 舟渡杏花

半開きのまんまで傘の恋終る
限りなく雪崩が続く電話口
夜もすがら固めた嘘に朝がくる
ダイエットに踊らされてる暇と金
身だしなみ程度に鬼女も紅を引く

富山市 島 ひかる

虫の音へ部屋の明りを消したまま
豊作を仏と祝う神無月
はじめての嫁の便りに嬉し泣き
新婚の慌てふためく薬箱
肩の荷を降り新たな荷を担ぐ

富山県 酒井 輝

運にして置けば恨まず恨まれず
このひとと二人いますと猫を見せ
大正の痛い握手は久し振り
下積みの折り目が消えぬまま老いる
良妻が歳までついて来てしま

富山県 増田 紗弓

キュービッドの羽根が迷走してドラマ
釉薬 疑うことを忘れさせ

呆けても部下を叱っている語調

農耕の血をかきたてて大だいこ
さよならの語尾を胡弓が消すおわら

東京都 後藤 早智

猫飼える家を探して移り棲む

普段着の顔で老舗は軒並べ

一葉の井戸が悲しい路地の奥

天国の亡母と見ている夜景の美

友情の証のように梨届く

町田市 竹内 紫鏑

肺は癒え講義の声は徹らない

八〇―二〇のゴール歯科医と握手する

Eメール野暮な学位を消して刷り

老技師は歩数 血圧測り生き

深夜放送 静養の友詩を投じ

横浜市 菱田 満秋

夏なのに暑い不平を言っている

大空を仰ぎ見させる秋の風

暑いから弁当を買う夜の膳

病院に患者が減った不況風

脱腸も自分になると笑えない

横浜市 清水 潮華

ぶつかった壁に他力の風を待つ
携帯を持たされ狂うスケジュール

追伸の重味大事に受け止める

健康にかかせぬ朝の糖衣錠

手に取って軽さで選ぶ折たたみ

横浜市 菊地 政勝

お勤めの不惜身命から解かれ

退職金ローンに充ててふりだしへ

早起きの新たなる日に誓い立て

今更に保険かけると言いはじめ

顔見ずに話が進むEメール

大宮市 八田 敏

豊年の歌聞こえそう黄金波

後五日 休めぬ孫の夏休み

世話介護 男の背なが丸くなる

お迎えは帰すと言った父も逝き

軽い魚籠のどつまりそう婿の鮎

八王子市 播本 充子

冬瓜を枕に消えてゆく邪心

揚げ玉を買うのに少し要る勇氣

動く物下さい孫へ土産です

入り婿の候補に家中が熱い

仏壇に戦地の石は風化せず

仙台市 川村映輝

巧言令色疎外されても気がつかず
女の子が欲しく五番目が長女
わが家からわさびが抜けて老い二人
病む妻を母とも思い介添いす
予定表寿命の先まで書いてあり

黒石市 相馬一花

念入りに残り少ない髪を梳く
一気飲みここは地獄の一丁目
朝顔を少し飲ませる酔い醒まし
仏壇を閉じて担保の印を押す
武装してきたが御土産頂戴す

弘前市 斉藤 効

サフィニアの咲いてる街へ出てみよう
少年の帽子大樹に掛けており
赤ちゃんが乗っておりまシルバーマーク
にんげんが好きでたまらぬ赤とんぼ
津軽秋りんごの色に皆染まる

弘前市 浅田隆樹

ケータイを耳にあて皆ひとりぼっち
秋の雲ねぶた武者絵の真似をする
残業の書類写経をする如く
酷暑なお厳しい冬が気遣われ
秋風に耳そばたてて菊人形

振り返る道は少しの坂である

ちちははの教えを噛んでいる奥歯

戦列を離れて肩が丸くなる

一人居の雪が僕にノックする

冷酒がぼつぼつ効いて日が暮れる

弘前市 一戸ツネ

食前の合掌やめた木偶の愚痴

差し当り米を研いでる指達者

楽しさも落ちていますよ降り坂

降り坂あれもこれもが初対面

盆踊りははもおります数珠の輪に

弘前市 福士慕情

地球儀の北半球にある埃

蟋蟀の声が日増しに細くなる

スポットライト浴びて影が消える

水溜り思い出しては揺れている

ネクタイの長さ決まらぬ今朝の鬱

弘前市 今 愁女

ギャルの誇りダンブ運転資格とる

王者の切符はしくて挫折くり返す

地下足袋と軍手が似合う庭師なり

携電で頭下げてるおとこ蜂

同じ名刺来宅度に出されても

弘前市 岡 本 花 匠
千代女来て句ごころ聞いたうれしい日

新聞に孫の快挙で沸く家族
真夏日に熱湯玉露飲むふたり

思いやり母寝たきりにした悔悟
真実を歩むほかない白い道

弘前市 櫻 庭 順 風

人生の一齣を喜怒哀楽で彫る

豊かな表情 柔らかい体型

石柱に彫るに彫る百十二体

生命溢れ柱倒れん肉体美

オーロラを浴びるむさぼる程あびる

弘前市 高 橋 岳 水

間を置いて見れば己の非に気付く

歳月を合わせ鏡が喋り出す

自惚れを一杯つめた化粧箱

神仏を崇めていまだ満たされず

同色に収斂されて夫婦たり

弘前市 蒔 苗 果 林

人の愚痴聞いてわが愚を背に隠す

陽に雨を雨に蒼空望む意地

わからなくなる人生に増える未練

口からはださずしんみりひとりごと

ながらえて僕がだんだん僕になる

弘前市 小 枝 ふさゑ
箱根路に富士が素直に出迎える

お二人でどうぞとシャッター押す茶髪
朝食がうまいまだまだ生きられる

理屈抜き嘘つく人は嫌いです

やせた土雑草だけはよく伸びる

十和田市 小笠原 敏 人

草むしりそのうち女房帰るから

五年後が見えぬが庭木剪っている

お祭りだ息子と飲む夜明けまで

雨上がり夜店で金魚跳ねている

楽しみの祭りが雨だ烏賊を買う

青森県 西 谷 大 吾

蟬の穴を覗けば過去はがらんどろ

分水界この世の水の苦いこと

仮の世に生き永らえて鉦たたく

次世紀へ架ける梯子が短過ぎ

さわさわとすすきがゆれてそつと秋

砂川市 大 橋 政 良

曲りくねって来た人生へ拍手する

ネジ少しゆるめ道草でもしよう

リストラのエレベーターに立たされる

爪はじき弾き出された人違い

どこへ巻きつこうか揺れる豆のつる

包丁も研がぬお方の料理評

熊本県 岩切康子

時々に叱りブレーキかけてくれ

アンケート意見したのに札の品

ストライク続き拍手が声援に

北九州市 梅田宣司

筋書にない忠告を噛みしめる

父倒れ子等の気持ちに通じ合う

ダルマの目入れたその後を見守ろう

凶星だないびつになってゆく笑い

香川県 山地マツエ

歳月を一気に戻している旧姓

どの影も美人に見える窓ガラス

茄子の花程に実らぬ恋心

損得をはじけば重いボランテイヤ

香川県 神保坊太郎

照る日曇る日生命引きずる九十坂

保育器に天下取りそな貌がおり

平成の其処ここにある親不知

夢のカケラを繋ぎ合わせている夫婦

鳥取市 福田登美

追憶を辿ればふる里青いまま

眠れぬ夜白じらほどく鳥の声

涙腺がさらりと乾く他人ごと

美しく飾って生きたいわが余生

片すみで上り下りもない平和

君が代を歌う日の丸買い替える

招かれてまだまだ行けぬ向う岸

何処からかしのボタンポポそつと咲き

倉吉市 最上和枝

海底の森で豪遊する人魚

スパイスの少し足りないお人好し

夏風邪も計算に入れ涼をとる

投函をした後気付く誤字一つ

倉吉市 山本玲子

胃カメラがほんになんにもない腹だ

怒るばかりで幸せが逃げていく

故郷へ引き戻される曼珠沙華

やがて秋造花も色があせていく

鳥取県 西原艶子

躰いて転んで我を振り返る

鈍感な男へ贈る赤いばら

芳香剤花園にする老いの部屋

姑ひとりたったひとり荷が重い

鳥取県 太田幸枝

子を守る母性本能忘れたか

良心が眼鏡の玉を曇らせる

まごついて自分の車探せない

不覚にも自分の掘った穴に落ち

鳥取県

権代康女

実るほどだんだん深い味を出す

美しい姿湖畔に映す富士

なつかしくやすらぎくれる故郷の駅

みこし出てりりし男の熱気みる

鳥取県

黒田くに子

老いたとて思慕の一つをふところへ

嫁決まる茶立ちの母のいい笑顔

愛の証今はなさぬくすり指

雑魚寝して北も南もない枕

鳥取県

國森武子

おだやかな朝晩これが幸福か

珍客にまごつく母がかっこいい

大学に入り茶髪の孫も来て

母老いぬ子や孫よりも早く寝て

松江市

佐野木みえ

高原に来て夕焼と赤とんぼ

朝市で手押車にあふれさせ

「かこの鳥」あの人に逢った頃の唄

庭の百合切ってあげます仏様

松江市

浦辺静江

二言目いつも押さえるがまん性

相性はどうかあれもはや五十の賀

見栄張って見ても年にはかなわぬい

幼なじみと出合い話に花が咲く

鳥根県

森茂美

通り雨しばし鎮める蟬しぐれ

ひとり食うメロン侘しくもの哀し

駅前のケーキ屋さんで買う土産

富本銭持って旅ゆく夢を見る

岡山県

江口有一朗

それぞれにみんなドラマの主人公

思い出したように真昼間歯を磨き

忘れ物また取りに行くサイクリング

気を付けての言葉に重み老いたかな

岡山県

福原悦子

父無口たった一言だが光る

しきたりを半分担いで生きている

独り者楽天家とは痩せ我慢

ついにつた煽てに裏があろうとは

広島市

森田文

燃える目に追われた頃の空は澄み

訪ね来て老舗も消えた街と知る

十代の船員もいて鯛漁船

希望通り運んだらしいいい笑顔

柳井市

弘津柳慶

麻雀はもう忘れしました八十歳

席題へおんなじ思いの句が抜けて

油断したすきをねらった騙し打ち

円高で空港のOLの笑い声

神戸市

池田善守

大阪市 寺井東雲

一日一笑今日も元気にボランティア

孫からのファックス届く敬老日

還暦と傘寿で応募親子ペア

仏壇に妻の健やか願う日々

西宮市

緒方美津子

孫と風呂無駄な力を入れている

大根を洗った川にメダカいた

縁談の返事おくれて柿青し

新涼に休み休みの揚羽蝶

西宮市

刈田泰司

自慢話を聞かされに行く縄のれん

親の恩無数の星を仰ぐとき

母娘して愚痴を楽しむ里帰り

良寛の字と人柄にみる非凡

尼崎市

的場十四郎

八起き目を信じ切ってる母の背な

すんなりと浴衣にかえて逢いに行く

久びさの墓参手桶が重すぎる

追伸に謎めくことば気にかかる

大阪市

河井庸佑

聞き上手徹し他人から得る知識

先走り抜き差しならぬ苦に嵌まる

見切り発車検討不足残る悔い

感情の対立譲歩する度量

遠くとも愛の電話はかかさない

ウイנקが前の車は多すぎる

こっそりと安産の札神棚に

長丁場はや走り出す幼稚園

大阪市

奥田良子

京時雨二度と会えない人と酌む

秋深し夫婦ぜんざい約束す

秋の山在来線の窓たのし

秋静かレモン紅茶がほしくなり

堺市

柿花紀美女

蟬しぐれ嫁と一緒に盆支度

母機嫌カチューシャの歌風呂場より

戦争を知らない甘い平和論

隙間風思いつきの器錆びはじめ

豊中市

岸田知香子

買い替えた流し寿命と根比べ

飛びすぎた孫舵とりが出来ぬまま

五十年安息日なし舵をとる

喜寿前にやり残せない事多く

吹田市

野下之男

トロツコに童心までも連れて乗り

土砂降りで歓迎される山の神

嫁はんのプラン静かに押し通し

磨いても玉にならずに幕下ろし

(立山にて)

枚方市 二宮山久

夏ばてを知らぬビールのうまさかな
年重ね言葉少ない夫婦酒

幸せの話がほしい孫はまだ
出張の地酒がうまい一人酒

東大阪市 森下愛論

薬石効ある内はよう飲みまっせ

みみっちい話酒飲みに向きまへん

以下余白そろそろ影が薄くなる

赤いバラためらいもせず何故か買う

寝屋川市 坂上高栄

残暑来て熱い昼風呂冷奴

胎動に命の不思議語り合う

托鉢に自分に回向する心

新世紀どうあれ国旗国歌法

交野市 山川日出子

遍路泊め教えてくれた灸のつば

振興券サイクリングに祖父と孫

神戸っ子月の兎に花火上げ

増えているコンビニ前の地べた族

藤井寺市 中島志洋

世話役が先ず音をあげたハイキング

よく走る子がいて楽し運動会

ライバルに同情される腓甲斐なさ

老人会世話をやく人やかす人

八尾市 宮崎シマ子

十分に飲んだアリガトまた頼む
崩れたらアカン私が支えてる

ひたむきに煤練る奈良の墨作り

山のこだまに母の答えを聞きにゆく

八尾市 長谷川春蘭

日日好日父母の年越え八十路夏

駅頭の雨燕らの何時去りし

藍浴衣バツサリ裁ちて母の服

たつぷりと愛を下さいお母さん

泉佐野市 山本蛙城

二党首選各小異だな三候補

秋遍路中のひとりの呼気はげし

震度3裸で寝てたなど言えず

笑いまひよどうせ短い命です

岸和田市 井齋一齋

露天風呂相合傘で濡れてます

リストラで肩身が狭い秋祭り

介護保険世話にならずに逝くつもり

犯人が俺に似ているモンタージュ

岸和田市 長谷川呂万

暴走族ひとり一人は素直な子

倒れそう今見ておこうピサの塔

介護せぬ姉が遺産へ膝進め

台風へ五重の塔は耐え抜いて

貝塚市 池田 寿美子

秋の夜やひとり静かにバツハ聴く

月下美人自己満足の一夜見る

昵懇を重ねる距離を考える

ケーキより和菓子が好きとダイエツト

河内長野市 植村 喜代

我慢すなぞと今どき今更に

いつ親が別れることか現代っ子

嬉しい悲鳴孫くっついて離れない

二泊三日孫とたつぷり有難う

大阪府 榎山 隆盛

十三夜お酒の燭を熱くする

骨と骨ごつつんのち燃える音

バーゲンへ走るちからは湧いてくる

円陣を組んで九回裏に入る

和歌山市 山根 めぐみ

言葉から流れはじめてゆく運命

川苔の化身だ鮎の身がきれい

流れに身をまかせもしもを考えぬ

返せない恩がひしめく胸の音

海南市 三宅 保州

天国では治ってほしい痴呆症

窮屈な檻が守ってくれている

悪いようにせぬと頭をなでられる

知らん顔してほしい誕生日

横浜市 小野 句多留

エプロンをする料理が動き出す

趣味をもち喜怒哀楽に活を入れ

どうもまた話す相手を間違えて

善人もそれなりにもつ損と得

弘前市 中山 雅城

十一月の北斗七星光り増す

十一月のお岩木山は白を増す

十一月猿もそろそろ反省す

十一の指を持ってたようなのは

八戸市 島田 昭治

若いころ特攻を神と信じてた

わがままが過ぎて子供に背を向かれ

腎臓を取られ何故だか損した気

病みあがりあるけあるけと子が気合い

十和田市 阿部 進

でかい夢抱いて飛んでる竹とんぼ

肩書きがとれて心が丸くなり

貧なれど恥じることなく生きる日々

誠の道一途に歩む古希の父

水 煙 抄 (前月分追加)

出雲市 榎ミツエ

空っぽの頭で説教聞いている

ど忘れでなべこげつかす七十坂

想い出のかくれんぼの松残ってる

夏の夕鯛が二匹の茜雲

佳句感想

橘 高 薫 風

矛盾・齟齬の順当化

人の世には真つ当な常識だけでは律し得ないものが多く、そういう対象を詠む句ほどに興味深く味があつて、川柳にはうつつけの材料になり、批判、ユーモアの種に繋がる。

自分すら救えぬ人の立候補 麻生 路郎
代議士にしる地方自治の議員にしる、国益や市民のためになる人物でないと、それはマインナスになる。党利党略、私利私欲の候補者を叱るこの句は、強烈な批判とともに世の矛盾を衝いて鋭い。

老司祭黒にも無垢の衣あり 薫風

日本では古来から白を無垢とした。神官や花嫁の衣裳は白無垢を基調とする。ところが神父の衣は黒だ。神父も聖職だから黒無垢と言える。これは一つの矛盾や齟齬の順当化で、川柳眼が効を得たのだと思う。
今回は、そのような句を選んだ。

蛸焼屋公的資金に恵まれず 久保 正剣
たこ焼き屋が破綻の金融筋やゼネコンのよ

うに公的資金を恵まれることはない。

この二つのかけ離れた句語を並べることでさわやかなまでのユーモアを具現する。大手偏重の施策の批判をやんわりとしているのだ。生まれつき良心虚弱体質だ 新家 完司

普通、身体虚弱と用いるのを、心、それも良心としたことで、やったなとほくそ笑むものに繋がった。他人への批判が自分への反省か、両方に取れるのが多少の難ではあるが。

夏ごもり自動制御の風の中 藤田 泰子
今年の酷暑は尋常ではなかったたので、確かに「夏ごもり」の毎日だった。それ自体に自動制御のおもむきありで、クーラーの機能と一緒にやと感付かせるウィットが味付になった。私の予定を聞いてどうなさる

古川喜美子
他人の私にくどくど予定を聞くのは、一生面倒を見て下さるおつもりか。それでなければ、さしでがましくうとましい。そういう気分が結語の言葉の力で、複雑に強烈に表現出来た。男心の曖昧矛盾に逆ネジを喰わせる。

東京タワーのてっぺんで見る我が手相

澤田 千春

東京タワーにのぼり東京湾を見はるかす。晴れていれば富士山も見える。直下には豆粒のプリンスホテルのブルーが色とりどりにある。ところが、句には手相とあるのみ。この予想外の転換、自動占い機であろうが一句としてまことにおかしい。

赤ちゃんが乗っておりますシルバーマーク

斉藤 蒔

自動車のシルバーマークや乗り物のシルバースhirtは老齢化のシンボルだが、赤ちゃんも同乗している。

老人を一度童子と言うのだから、似た者同士、同格にして頬笑ましいのである。

乱打戦野球ではないゴルフです

板山まみ子

野球で11対8などという結果は、逆転また逆転の経過で、きつと面白いはずなのだが、乱打戦といってもゴルフとなると笑っちゃう。いつまで経ってもハンディは減らない。

二者の齟齬がうまくユーモアに繋がったのである。

嬉しくて笑い淋しくても笑う

平田 実男

異質の笑いだが、この句も何故か捨て難い。

自選集

黒川紫香

亡妻に似た女とほたえる夢を見た
どしゃぶりの交番犬を預けられ
目算はないが出かける靴磨く
行きは吠え帰り尻尾をふる小犬
妻楊子くわえせっかち帰りかけ

波多野五楽庵

暖房が恋しい北の玩具箱
屈辱の胸のふるえが止まらない
花いちもんめ留守番電話だけが鳴り
ハーモニカ父の影絵の夢ばかり
尊厳死我が終着駅の糧にする

金井文秋

生命線の太さまだまだ生きるらし
もう何も米寿に欲しい物はない
介護など要らぬ米寿はありがたし
無器用だから託卵の知恵を持つ
大器晩成もう見込みなし喜寿過ぎて

遠山可住

指が飛んだくらいで男泣くやない
生き残る男みじめになるばかり
男五十丸くなるのは早すぎる
敬老も木っ葉みじんの紙おむつ
体調が思わしくなし犬のこと

西田柳宏子

台風に途切れ勝ちなり引導鐘
異常気象 残暑も地震も台風も
台湾地震 日本の救援遅いこと
お彼岸も知らず地べたりあんのギャル
公園の夜不気味なりテント群

恒松町紅

見ぬふりもしていい仲になっておく
車窓から故郷に近い赤瓦
ナウイねと若さに負けぬシャツの柄
宮仕えした日の傷がある袍
もやもやを溶かして湖上夕映える

藤村 女

お茶入れて母娘に秋の夜が長い
物忘れだんだん命軽くなる
風は無情で他人の噂置いて去に
美しい言葉に迷う秋の風
お先祖に健康感謝の灯を点す

野田素身郎

わが町の名前たかめた甲子園
蟻よ急げ今吹く風は秋の風
予科練も老いたるものよ孫自慢
古希の血がそんなに美味いのかやぶ蚊
あれ以来どこやかしが痛む古希

辻 白溪子

暇があるのに電話にもかからない
老人の噂病院建つらしい
誰にでも陰しく吠える犬を飼う
美人だが愛想が悪いので困る
お喋りをつなぐ会話に味がある

月原宵明

夜もすがら奏でこおろぎ命絶つ
老兵に日の丸君が代異議はない
馬鹿食いを見せるあさげのコマーシャル
赤線が国語辞典のカタカナ語
太鼓より太鼓を叩く人が好き

宮口笛生

食べられぬ汚ない川で鯉を釣り
今年こそ自慢の出来る菊の鉢
咲き出した菊へ楽しい菊の世話
七十五歳気合いを入れて農繁期
百姓に定年の無い農繁期

小西雄々

もつれ糸解いて柱は騒がない
ゲート読むぐらいのゆとり作らねば
試着室蝶に近いと自負を持つ
残り火へゆとりの鼓動聞かそうか
老人力せち辛い世に小出しする

阿萬萬的

スタミナとは惰性で生きている
知ったかぶり恥の上塗りしてしま
自分でも厭な日もある忘れ癖
同心円もときどき妻の輪がずれる
進歩する科学が苛めている地球

小林由多香

早世のまだやわらかい骨拾う
高いけど効くというから飲んでみる
茗人忌きびしい暑さ峠越す
石橋をたたけば渡るなどひびく
やりくりをしても給料まだ足りぬ

藤井明朗

名案もなく学校の不登校

再教育にはんの美德口にせず

一年目涙がにじむ敬老会

総裁選すめば政界ゆれ動く

大雨の予報勇気のいる避難

正本水客

むつかしい話にだんだんなってくる

何気なく言った言葉をおぼえられ

旅好きの人だと思ふ話しぶり

転んだらあかんといつもやかましい

媚を売る指さきをじつと見つめられ

野村太茂津

ぞろぞろと看護婦連れて指触れて(院長回診)

抜糸したうれしい痕を大事がり

退院の祈り折鶴群れて翔ぶ

レントゲンフィルムをギブス重く聞く

天井白く壁白く真つ白になる頭(病室)

松川杜的

何時の日か妻には一歩抜かれてる

鬼灯の赤と絵皿で何時も揉め

夕立とはいいな僕の心まで洗ってくれ

朝顔の種くれた先輩もう居ない

三十七年鉄道員で過し友が無い

高杉鬼遊

金のこと忘れ恋にも遠くなり

不機嫌がだまって潰す冷奴

変わりばえせず美容院から帰り

目の裏で蛍光灯が点いている

夕飯のおかずで困り何にする

板尾岳人

どしゃ降りの中山道は川の中(中山道 5句)

どしゃ降りの馬籠 妻籠は山の中

馬籠村に出合える馬籠秋の中

馬籠から妻籠へ歩く夫婦かな

雲の峰墨絵の中の露天風呂

八木千代

想い出の湖が真下に見える場所

ひと波が立って湖水も秋の中

俯瞰して湖の優しさ美しさ

しばらくは眠ろう波も風いだから

並んで湖を眺めてくれる影がある

河内天笑

老人助成の診察券を手

冗談をとばすにも要るタイミング

シヤアシヤアと女ことばの喉仏

勝算吾にありという低姿勢

芝居せんかったらばれんかったのに

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(106)

橘 高 薫 風

十二月に路郎先生の作品を抄出しようと思
うので、今回は昭和十一年の川柳塔欄への掲
載句を紹介する。当時の風俗に興味あり。

元日のネオンサインへちと捌け

西田 艸楽
春至る日の清閑は人も来ず
山本 雨迷

グラビアでスキーの姿見たばかり

麻生 霞乃

除夜の鐘旅で聞く身でなかりけり
うつくしいさかなが二匹そんな恋

同

山本 丹路
お、寒むと寒さ袂に抱く女
春元 紀太
葬式で会いばういことおまへんか

須崎 豆秋
須崎 豆秋
奥野 禿山
気の毒な姿に変わる焼リンゴ
宮仕え恋までゆすりつつがなし

吉田 水車
市場没食子
岩崎 柳路
剛情は既に白髪が物語り
尋ね人余り美人でなさそうだ
あほくひかつて一升瓶は空
お元日損した顔と思われず
姫田 夕鐘

口で割る箸へか、つた牡丹雪 平井 春光
代書屋の食いについて書く近視眼

堤防のそれから酒井雲となり 喜多 春秋
大西 八歩

残業に母の事などかんがえる 三鴨 美笑

人間の忘れていたる水の味 住田 乱耽

屑拾いやつぱり得意あるときく

橋本 緑雨

こんなにして吞んでいるうちだけが無事

増位 汀柳

学問をしてもわからぬ親心

後藤 青児

刺繍屋の男朝からたすき掛け

西村 明珠

若水や父のくすりに子のくすり

関本 雅幽

ほんとに惚れてチップをおしかえし

大鶴 喜由

とび出せば近所の顔は揃うてる

宮内 耕朗

はちまきをして浴場の用を足し

高橋かほる

最終の辞令か死亡診断書

岡田 某人

一人酌ぐことも忘れる為めの酒

朝田 新水

逢うまでを梅一輪にたそがれる

竹内機見女

財政は頼にすぐれず石の門

石曾根民郎

豆腐屋の子供豆腐を冷たがり

眞田 幸捐

秀才の一銭店を商えり

月原 宵明

岩田帯もつ春めいた春めいた

後藤 大朗

置炬燵女のひざがせまるなり

生田 翠夢

金屏風借りて来たのでないのなり

青木 史呂

だんだんと寝酒の味に老けている

中澤 濁水

使われの身の使う身を思いやり

西 いわを

先代の瀧場そっくり子の舞台

新見世間音

そこら中春が来ている告知板

植山 九天

オーバーの重さに馴れて余寒へ出

浜田久米雄

護身術初段未だにミスで有り

酒井 大棲

動かない空気の下答案紙

石崎 柳石

満開の春が誘った浮気なり

町田 承春

巻尺の百呎にも陽があたり

水谷 鮎美

近來の世相論語を読み直し

奥野 其奥

金で得た地位は金ゆえ捨てるのさ

丘 遊舟

川柳太平記 (258)

川柳の群像

加賀美 白英子

東野 大八

「お前さんの柳号四四坊はエンギが悪い。どこのパチンコ屋でも台に四の数はついていないぜ、変えろ」

といったのも古い話で、この人物との初顔合せは、昭和40年4月富士山須走で創立総会を開いた大陸川柳同窓会の集まりからであった。一見風采の上がらぬ小男で、その童顔は小熊みただった。四四坊なる柳号をよくよく聞いてみると大正10年10月22日千葉県四街道市生れで、本名嘉正。つまりここから「よし坊」の幼名風が生れたわけと知れた。

大陸同窓会も会員老化により、少数派に落ちぶれたため、19回の会合打ちりを宣したのは高野山麓の料亭であった。ここで図らずも彼は兵役で昭和14年中国東北地区の北辺で起ったノモンハン事件に一兵卒で参加していた

ことを知り、急速に仲良くなった。そのため昭和も終り頃に開かれた郡上八幡の川柳大会では、筆者が講演をやるというのでわざわざ千葉から出てきて参加、宿も二人っきりの同室で枕を並べる親しさであった。この折は、大好きな四の字を改め、白英子という利口そうな柳号になっていた。無類の花好きの彼。

「川柳をやり出したのはいつごろだ？」

「戦後からでそれまでは俳句をかじっていた。千葉県は、吉田機司博士の『手児奈』しかなかった。この会に入ってからじっくり川柳の味に浸ったのが病みつきだよ。それから千葉県川柳連盟を結成して、やがて県の芸文協会の支援で、ほんのチョッピリの援助金も貰い柳誌『犬吠』を創刊したんだ。昭和50年頃だったかな、随分苦労したぜ、仲間に松沢敏行

さんというやりて柳人も居たことだし……」

まあ、そんなわけで、川柳不毛の地といわれた千葉県に唯一の柳誌が誕生、十年ほどして西村在我にバトンを渡したものの、平成十年千葉県川柳作家連盟会長に就任したばかりの平成10年11月26日心不全のため急逝した。年77、白英正道信士が法名。彼との別れは結局、郡上八幡での宿が最後となった。

『犬吠』二月号（平成11年290号）は、加賀美白英子会長追悼号で、八頁にわたる故人の追悼記で埋める盛大なものだが、その中には地元著名柳人にふあうすと同人の二名も加えた八名の悼文で埋められている。以下それを抄録する。

「白英子さんが川柳をはじめたのは、昭和24年ごろときいている。その頃の千葉県は、房総は川柳不毛の地といわれたところで、初心者の方は苦労されたい。

白英子さんは、千葉日報の川柳欄の選者であった吉田機司氏に会長になって貰い「てこな川柳会」を作り、県下で初めて川柳句会を開くようになった。これをきっかけに千葉県内各地でもぼちぼち川柳の句会が開かれるようになった。それらが白英子さんの熱意により、千葉県川柳作家連盟が誕生し、さらに県下唯一の川柳総合誌『犬吠』が発刊された。

この川柳誌発刊の当座は、白英子さんが編集から印刷所での校正まで一人で苦勞されたらしい。こうした努力が実を結んで、同人・誌友も四百人を超える数になった。

白英子さんの功績は、まだまだ続くが地元四街道市では、市の文化向上のため、「からたち川柳会」「シルバー川柳会」など川柳を樂しむ四つの川柳吟社を育成指導された。

これらの吟社は毎月句会を催し、秋の文化祭には四社合同の文化祭協賛川柳大会を催されたりされた御努力が実を結び、平成八年度の文化功勞者として県表彰に併せ、四街道市の文化功勞者として表彰を受けられている」

(戸部竜馬悼文)

「白英子さんは、千葉県川柳連盟創立時から初代会長松沢敏行さんを盛り立て理事長として、当時の県内での参加句会だった市川の新潮社、八日市場のおもと川柳会、茂原のほうふら川柳会の三つの吟社の句会を精力的に飛び回り、各地の川柳会発掘にそれこそ懸命だった。句会がふえ川柳人もふえるにつれ連盟運営の難しさもふえ『大吠』発刊当時の苦勞にもじっと耐え努力されたことは周知の通りで、いわばこの人のこうした努力で、今の連盟があるのです」(平井吾風悼文)

「白英子さんのむかしの柳号は四四坊と言

っていたのだが、地元を離れると「よしほう」となかなか言って貰えず迷惑がっていた。間違ひはたいいてい「ししほう」で、白英子とかけたのもそういう読みまちがいが原因だったのかもしれない。

ふつう四は死との語呂合わせの事から人に嫌われるものなのだが、この人はこの四を好んでおられ、席順でも四番目に座るとか、下駄箱の番号なども四番とか、十四番を選んでとっていたものだ。

一方、白英子の方が、改号の折、花の名のよういきいていたので調べてみたら、なす科の植物で「ひよどりじょうご」を白英または白草というのだそうである。だがこの植物には毒があるとも書いてあった。だからおそらく、白い花びらというその美しさの字句の際立つ言葉としてとられたのではないか」(安藤亮介悼文)

「この人が川柳の先生？開講式で壇上に座った白英子先生を一眼見たときの偽らない私の実感でした。川柳を長年おやりになった方だから多分ユーモアたっぷり、微笑をたたえた艶福の人だろうと想像していたが、なんとそのご仁が、小柄でひょうひょうとした感じの村風子然たる印象をつけたものです。受講生にはそれがかえって親近感となり、肩の

凝らない川柳教室へとつながったものと思えます」(今井楽天悼文)

右の一文を眼にした筆者は思わず楽しい微笑をもらし、膝をうつ想いに促われた。

郡上八幡の宿を引き払って二人が肩を並べて表へ出たとき、彼は古いソフト帽の青いのを気軽に頭へのせ、フラリと歩き出した。そのさまはまるでいまごから出た実験用のモルモットの一ぴきを連れにしているような気分になり、思わずニヤリとしたことだ。

四四坊と自称し、いつもチョコナンと片隅にチン座していた頃の、大陸川柳同窓会皆勤組の一人だった彼は、口の悪い大井正夫が「やつこさんは千葉のモルモットだ」と冗談に酒の酔いに任せていった一言が思い出されたからだ。負けん気で、強い根性をとがった小さいその貌に垣間見せた、若い頃の四四坊時代が書いている今も懐かしい。

彼に「房総百景」なる唯一の句集がある。そこから以下拝借する。

まだ明けぬ行徳を出る浅瀬売り 白英子
觀光に安房の大社は置き去られ
妙の浦ここは浄土の鯛が群れ
潮風で植木を作る九十九里
菖蒲咲く潮来に絹の雨が降る

▼次号は「直原七面山」

誹風柳多留二四篇研究 11

一七
42

あしきなくしきみの中にかきつはた

清・佐藤 賛。

74 ニツ三ツぐらいハ妾塗りかくし

山田 それが仕事の妾の化粧。あはたの二つや三つ塗り込めるなどわけがない。或いは、悪だくみの二三か？

ぬりくるて妾も少しいそかしい 天五梅 1

御妾ハ衿から上に日をつふし 宝十一札 1

伊吹 年齢を二つ三つ塗りこんで、二、三歳

若く見えるのでは……。

小栗 伊吹説賛。

清 同。若づくりでしよう。

佐藤 同。

75 生きて居念仏構を取りたがり

山田 勝句刷では「生きて居て」でハッキリするが、本句は「生きて居る」。一寸分り難いが、「生きて居る（ままに）」と解したい。

念仏講は「①念仏を行なう講。念仏を信ずる人達が当番の家に集まって念仏を行うこと。

後に、その講員が毎月掛金をして、それを講員中の死亡者に贈る弔慰料や、会食の費用に

山田 昭夫・伊吹和男
大野 秀二・小栗清吾
橋本 秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

71 こも僧と乞食にゆだんせぬ男

山田 虚無僧は普化宗の僧であるが、仇討ちの武士は虚無僧姿や乞食に身をやつして敵を搜索するのが常。だから敵持ちはそれらに絶えず気を配らなければならない。

尺八チハめんどくさひとこじきなり

安九智 1

かたきもちこもさうに世をせばめられ

天五智 9

居る所を見たのが竹のふき納

四 28

伊吹 賛。全く枕を高くして寝ることが出来ないのである。

清・佐藤 賛。

72 とぶの坊ほどハ花屋も生けるなり

三文の中にあはれな杜若

一九
15
傍五
25

山田 折角上げたのに、あの娘つたら、事もあろうに仏壇の供花にして。チーン！トホホという場面。

御持仏へころして立るかきつはた

当てるなどする頼母子講に変わった」(『日本国語大辞典』)

生活が苦しく、念仏講の金が欲しい。しかし、講の金は死ななければ下りない。

「死すべきか、死せざるべきか、それが問題だ」。

とるもつしとらぬもそんな念仏講 六二二九

念仏講死ナねは根からそののやつ 三二

死にそつても無いて念仏講を退き 二四二七乙

清・佐藤 賛。

76 歩くたひ忒忒両ツ、下駄かへり

山田 伊達綱宗侯の伽羅の下駄。大変高価なものであったので、歩く度に一二両分位は下駄が磨り減つたであらう、との穿ち。

むた足に召たハ伽羅の御下駄也 六二二

六十目ツ、毎はんの御そんな 一七三二

清・佐藤 賛。

77 神／＼の御かへり済んで幕が明き

山田 顔見世興行は十一月一日、つまり神無月で出雲に出張していた神々が帰ってから幕が開く、といったまでの句。

『川柳江戸歌舞伎』には「十一月一日、顔

見世狂言初日、芝居道にては本日を以て一年中の元日と定む、未明に式三番を踏むこれを翁渡と云ふ、七ツ時より脇狂言始まる」とある。

神／＼がつくとはしめるさんばそつ

安六松 4

霜月に成ルかならぬにさんばそつ

安元松 1

神ハ帰らせ給ひけり三番叟

二五二四

清・佐藤 賛。

78 大そうな物ハ女郎の他出なり

山田 他出は「②よそへ出かけること。外出」(『日本国語大辞典』)のことで、遊女の廓外への外出とも考えられるが、「大層な物」というから花魁道中であらう。

ぎょうさんな物傾城の他出なり

傍五三三

中の町／＼きにつまをつかむ所

五四〇

清 廓外への外出と思ふ。遊客同伴、遣り手に連れられてなどの外出が考えられるが、それ相当の準備が必要だったであらう。

佐藤 礎稿賛。

79 をいらだと離別ぞとかへる四ツ手鞆

山田 色々な場面が考えられそうだが、ここは平凡に、遊所へ乗りつけた四手駕籠の駕籠昇の言葉と取る。

「こんな所に来たひには、俺たちだったら離縁もんだぜ」と相棒に言っている図。

佐藤 この句は、亭主が吉原から自宅へ駕籠で朝帰りの場面。女房が駕籠賃を払うのに仏頂面でやつと払ったものの、その態度が余りにも悪いので、「ありやどうだい。俺ならすぐ離縁する」と駕籠昇同志が、帰りにしゃべり合っている状況としたい。

「去る」のは常に男の方である。

80 次第に御淋くもない男見え

山田 亭主が亡くなった当座は、「お淋しいことだ」と挨拶されるが、次第に「お淋しくない」男、つまりみそか男が来るようになる。ひよつとすると、亭主の存命中からの続きか？

その当座後家たて通しそつに見へ

安四信 7

次第にお淋しくもない事が出来 新一二二
どうしたか後家ハ後生をばたら止メ

末四三二

秀句鑑賞

同人吟 木本朱夏

— 10月号から —

空蟬やわが身の穴を思うなり

桑原道夫

からから転がる蟬の抜け殻に、わが身のう
ちの空洞に気付いてしまった虚無感。

秋の夜をじんじん鳴いている蟬の木。残り

少ない時間、鳴いて鳴いて鳴ききって、鳴く
ほどに蟬の一生は充実し、完成するのであろ
うか。蟬の一生と人間の一生。重くて軽くて、
そして儚い。

両の手で戴く重い紙ひとつ

海老池 洋

賞状なのか栄転の辞令なのか、たかが紙切
れとはいえ重い紙切れ。ふつと読み手を立ち
止まらせ、想像させるものがある。

紙一枚でなく、「紙ひとつ」にこの句の謎
がありそう。

紙は紙でも両の手で受けねばならないほど
ずしりと重い紙幣の束だったりして……。

はめられた鋳型通りの演技する

桜井千秀

作者は和歌山は三幸川柳教室の名物校長。
はめられた鋳型通りに演技しながら、人の和
を大切に三幸の生徒を引き立て、指導する肝
つ玉かあさんでもある。

緑あつて北海道は北見市の「北見川柳社」

の依頼で、橋高薫風論「橋高薫風の内周」を書
かせて頂いた。(川柳オホーツク8月号掲載)

薫風主幹は「句はその人のこころである。十
七音字はその人の呼吸である」という路郎イ
ズムに殉じながら「川柳は五七五のリズム感
と穿ちを基本とする」と述べられ、また路郎
の「川柳は人間陶冶の詩である」を「錦の御
旗」として、路郎を再生し路郎の遺産を次代
に引き継ぐという使命感に燃えておられる。

俺に似よ俺に似るなと子进行

子煩惱がつたんがたんしてくらし
ある時は子をだんばしでくひとめる

お父さんはネ覚束なくも生きている

俺の子といふのがあつておそろしく

路郎の句集「旅人」より路郎の素顔を覗いて
みた。平明ななかに子进行一人の父親像が
くつきり浮かぶ。

五七五わずか十七音字に「いまここに居る
私」をどう表現するか。平明な言葉の思いを
どう磨くか、私なりに人間陶冶の詩を模索し

ている。

現代川柳を標榜するグループのなかには宝
石箱をぶちまけたようにきらびやかな言葉で
飾った作品が多い。思いよりも言葉が浮きた
ち、これみよがしの技巧が鼻をつく。それら
才気走った作品に憧れ、こころ惑った時代も
あるが、所詮私には似合わない借着であった。

「川柳することによって体内の悪汁を排出
することに成功している」また「川柳するこ
とは人生をいかに生きるかを知るため」と
いう麻生路郎の言葉を今後の私の指針として
ここに重く受け止めたい。

さて和歌山は梅の産地である。南の温暖な
日を浴びて、元氣印の美味しい梅干が生まれ
る。そのまま食べてよし、梅酒よし。梅ジュ
ース、梅ゼリー、梅ジャム、忘れてならない
梅エキス。煮魚の臭い消しに梅を一粒。梅干
をアレンジしてのフランス料理のソース。さ
まざまな表情を見せてくれる、すこし塩っぱ
い梅のように奥深く、味わいのある秀句の数
々を觀賞したい。

この花をへくそかずらと呼ばないで
かわいそう螢の字から火を取つて

栗林 光夫

へくそかずら別名ヤイトバナ。漢字で書く
と行間から異臭を感じるくらい物凄いいことにな
る。お手許の辞書で確認あれ。外面白色、
内面紫色のおとなしい夏の小花は、なんの恨
みを買つて、こんな酷い名前をつけられたの
であらうか。名付け親の顔が見たくなる。

「若いという字は苦いという字に似てる」
という歌が流行ったことがある。毒という字
は妻という字に似ているようにも見える。植
物の名前にしても、漢字（国字）の成り立ち
にしても、昔むかしの日本人の感性は驚くほ
ど豊かなものがある。

豆腐一丁薬味に気合い入れられる

湯豆腐をせかせかせかと食う男

志田 千代

拙吟に（豆腐ほどの存在感もない男）があ
るが、どちらかと言えば豆腐は脇役の立場を
心得て淡々としている。

気合いの入った薬味を添えられて、初めて
豆腐はやんわりと自己主張するのであらう。

それにしても湯豆腐をせかせかせかと食
べる男はいだけない。

日の丸君が代 運動会はリトマス紙

湯浅 馬洗

いつの間にか、日の丸も君が代も市民権を
得ていた。（世の中は三日見ぬ間の桜かな）
よそ見している間に景色が変わる。

誤解を恐れず言わせて貰えば、デザイン的
には世界中の国旗のなかで、日の丸はシン
ブルで美しいと思う。

掲出句の座五リトマス紙が、ひと味違つた
時事吟に仕立てて効果をあげている。

朝の胃にしっかりと残る焚火跡

高瀬 霜石

座五焚火跡がこの句を難解に見せているが
また焚火跡がこの句のポイントでもあらうか。
昨夜は思はず痛飲、正体をなくしたことを
しっかりと記憶していたのは胃だったと、観賞
させていただこうか。

機嫌良い時の帽子のかぶり方

藤井 正雄

知らなかった、帽子は機嫌でかぶり方が変
わるなんて。暇な時にかぶり方を研究してみ
よう。帽子には忘れられない句がある。

バードマンのような帽子も被ずじまい

小出 智子

フライパンの中で今年の夏に逢う

江口 度

入道雲や蟬時雨、いつまでも暑苦しく咲く
夾竹桃。かき氷、潮騒、ハツと目を剝くビキ
ニ。毎度お馴染みの夏が、まさかフライパン
の中に見えたわけではないが、楽しい川柳
会つ、合つ、遭つ、逢つ、遇つ。同じよう
でみんな異なる、日本語の奥深さ。

一番先に笑った女を好きになる

土橋 螢

今度螢さんに逢つたら、真つ先になつこり
してみよう。なんて作戦を立てていたら、隣
の美女も艶然とポーズ。螢さんのいるところ
笑顔、笑顔の氾濫となりそう。

どんな人が乗るか楽しみ次の駅

訪ねたい駅がいつばい時刻表

新家 完司

時刻表を開くと冬と海鳴りが、落葉松林の
木洩れ日が、津軽電鉄の風鈴電車の音が……。

ひとり旅の愉しさは時刻表を開くときから始
まっている。帰るべき家があり、自分の居場
所がある限り旅は旅といえよう。日常に引き
戻されない旅は旅とは呼ばぬ。それは放浪と
呼ばれるものであらう。

水煙砂

河内天笑選

篠山市 円増純子

大阪市 中村叡子

重い口開かせたのも愛だろう
そんなことないと思てた私の強さ
気付かせていただいたことありがとう
句にころさらして軌道あらためる
散らないで迎えてくれた沙羅の花

堺市 和田つづや

尖って丸い地球に生きている
生きてゆく事に茶髪も黒もない
生命の証が欲しいから喋る
妻と居て苦にならないという平和
ジャンプする為には一度身を下げる

横浜市 生坂サト子

斎場でつい口癖のハイチーズ
侮った動く歩道がふらつかせ
教壇のニッケネームが生き続け
添え書きに再会願う見舞状
初物を生き仏様毒味する

セクハラは少し女性を咎めねば
お刺身の鯛が安くて買いません
おしほりで先ず顔をふき首をふき
どれ丈の物を捨てたら楽になる
願わくは介護保険を利用せず

羽曳野市 川田晋

マラソンで金メダルとる飢餓の国
オフレコの放言いのち取りになる
入歯では噛めないガムが参加賞
お互いの変節語り合う議員
間違いの電話もベルは同じ音

鳥取県 西垣美知子

汗ふいて作った米だ艶がある
跳んでます白髪を染めて見栄はって
無人駅かれんな花が人を恋う
腰低く暮していけと亡母の声
胸のきず子のやさしさに癒される

川崎市 和泉 あかり

愛媛県 中居 善信

猛暑でもひねると水が出てくれる
稲妻に雷鳴も連れ派手な雨

蜘蛛の巣が頭を下げて通らせる

振り向けば笑ってるから笑いだす

すぐそこに冬が来ている山の彩

京都市 高島 啓子

京住まい断わり方が上手くなり

送ります言うた写真がぶれている

予約までして行くほどの店でなし

孫とした約束だから破れない

たくわんを無性にほしい時がある

堺市 村上 玄也
(靖雄改め)

盃揚げ長い口上聞かされる

多機能がやたら操作を誤らせ

高層のビルの谷間の歩道橋

飽食の世に栄養の足りない子

冗談もセクハラ恐れ口鈍る

横浜市 芦田 鈴美

ひまわりに囁かれている悩み事

良い嫁のふりもうやめた倦怠期

整頓を口実にして探し物

ここ一番パワー抑えて技で勝つ

半熟の知識 世間を騒がせる

自分史に身の毛のよだつ事がある

あやふやな生き方があるパチンコ屋

女々しいと思う未練を引きずって

その時は笑って別れたいものだ

潮時が読めず火傷を繰り返す

出雲市 城 多喜

ひ孫には何と呼ぼうフフフフ

一人芝居まだまだ幕が降ろせない

友達にいい顔だけを見てもらう

よく喋る淋し淋しと言う人が

見なれたら茶髪なんて事は無い

兵庫県 安達 厚

いい人生でしと言って逝けそうだ

黙つとこう今は昔と違うから

天然を一鉢に生け床に置く

相性が良かったからと妻とぼけ

横風が真つ直ぐ歩く邪魔をする

島根県 福岡 博利

初参加何かを少しつかめそう

締切りに情け容赦のない時計

会うてみてその人柄を好きになり

老いたるか五合瓶から二合瓶

プロポーズ入歯きちつと入れてから

横浜市 保田 絹子

辛党のくせに目がない莓ジャム
朝寝坊低血圧のせいにする
通夜帰り少し気弱になる夫
割り込みの白髪 茶髪も後ずさり
焦らずに手抜きでいこう二千年

横浜市 川島 良子

壇家さまは神さまですね仏さま
タイ百本お洒落な兄の形見分け
万札を持っていないと落着かぬ
そばを打つ腕を磨けば凝る器
大切に大切にされ呆けてくる

横浜市 秋元 和可

夕涼み携帯電話連れて出る
水着きたギャル賑やかに露天風呂
ログハウスお隣さんもバーベキュー
日曜日夫がのぞく冷蔵庫
自分では省エネはない燃えつくす

横浜市 長島 亜希子

おてんばが頭もたげる岩登り
用足しを剣岳には見つめられ
先頭の「着いたぞ」に足軽くなり
雲海を突き破る峰下に見る
あがっても話が続く雨宿り

横浜市 北沢 街湖

雨になるようだと母の膝が言い
八分目 体重計に諭される
正直に描くと似顔絵うとまれる
義理でする祝儀袋に愚痴聞かせ
食べて寝て終に指輪が入らない

横浜市 山梨 雅子

赴任地に名所があると誘われる
丸ごとの西瓜が買える子沢山
大人より大きな靴で孫が来る
同じねとドラマに笑う嫁姑
薬局に奥さんが居る開業医

横浜市 巖田 かず枝

旧式な方が私に合っている
箸が触れ肩が触れ合う我が家です
回り道して帰りたい月明り
妻は留守カレーの匂い満ちている
閑静と不便は比例するらしい

横浜市 近藤 道子

転ぶ日もあると気づいた膝小僧
体調を崩して知ったカラ元気
ふたしかな記憶の中で舞う螢
携帯に支配されてる二十四時
思考ゼロ単細胞になっている

札幌市 三浦 強一

二次会の酒がなだめた肚の虫
再会の恋も時効のクラス会
八の字の眉でにらみの利かぬ顔
身構える心に周囲敵に見え
定年の足水虫はまだ元氣

浜松市 岡本 まち

病む兄を氣遣いながら姉は逝き
娑婆の世は星の数程謎がある
もくもくと只もくもくと麦を踏む
幸福のレッテル貼って同窓会
知ってても知らない顔に救われる

八王子市 井上 京一郎

百選の水は両手でそつと汲み
鬚切った途端 閑取よく喋り
ジープの穴に貧しい膝小僧
釣り人と初発に座る朝帰り
犬の舌少し短くなつて秋

静岡市 中西 雅

体型にあわぬ洋服嫁に合
亡き夫の横に法名朱書の墓
廃業か看板だけが語りかけ
年一回あやかりたいな織姫に
紫の朝顔を見る一つの忌

大阪市 熊代 美智子

こだわりを捨てれば少し楽になる
墓地の蟻ごめんよ此処は母の部屋
老夫婦妻が手をひく散歩道
寺の屋根ハトが並んで会議中
のら猫が一人ぐらしを慰める

大阪市 筒島 文枝

紫陽花に夢見た昔思い出し
腹立てた事もすぎればあほらしい
月冴えてはしゃぐ虫たち夜もすがら
蟬しぐれはかなき命つきるまで
神経痛いたさこらえて旅終る

大阪市 榎本 日の出

涼風と天然水が決めてです
何時までも子供の顔で妻のひざ
井戸端がなくて隣と長電話
こだわりのホテルの裏の無農薬
生きがいの子から趣味へとかえました

大阪市 亀井 円女

もう八十手抜き技なら負けはせぬ
ロックもジャズもダビングしてるお婆ちゃん
人間だから極楽ゆきは無理だらう
いい子も居ます茶髪茶髪と言う勿れ
うまいトス上げてでも打てぬお父さん

大阪市 奥村 五月

消しゴムは川柳産んでやせて行く

忘れぐせ自分の歳も忘れたい

フルコース旨いところを下げて行く

税務署に吐いたセリフが後を引く

還暦もお医者に行けば若い人

大阪市 三浦 千津子

古里の一本杉と立ち話

お前しかいない台詞の恐いこと

無為無策 心の底にある叫び

腹の虫治めて帰る千鳥足

老人に用なきピラをキタ ミナミ

堺市 梶本 哲平

朝顔もついは小さき一輪に

無花果の皮ごと食うは憚られ

網笠のうしろ茶髪の娘も踊り

雨たたる三とせ続きの風の盆

実ざくろや妻に話していい過去

堺市 矢倉 五月

誘惑に負けた後悔胃腸薬

点滴を見つめて亡母の粥恋し

ハッピーな夢を見たので宝くじ

好きだった頃もあったと見る寝顔

瘦身をイメージしながら万歩計

堺市 見本 ちや子

さりげなく私を見てるひとつ星

声を聞く只それだけが嬉しくて

小さな手でバイバイされるのが辛い

ちよっと見える位置に目隠してやろう

思い出がどんどん遠くなる窓辺

八尾市 中島 春江

あばら家もうぐいすばりの廊下です

赤い糸もつれて神も苦勞する

言いたいなラストダンスは私と

いやな客顔で笑って箒立て

カタカナ語わからず耳を素通りし

八尾市 山本 宏

満足な仕事ができたうまいお茶

赴任地の冬あたためる長電話

エステして財布の方が先にやせ

神様とあえずに帰る競輪場

夏休み年金かじり孫帰る

八尾市 井尻 民子

うら淋し虹の街でも歩こうか

ガラス玉亡母の形見のペンダント

カレンダーぎっしり妻の予定表

野心捨て土に安らぎもとめよう

野暮ったいあの人とても温かい

羽曳野市 西村りつえ

前景気さんざん沸かせバテた虎
こんこんと母の泉はあたたかし
売り言葉ついストレスが買いました
淑やかな仮面をはいだ札の束
長生きに脳細胞がたりません

羽曳野市 安芸田 泰子

かぶと虫山へ帰して夏終る
前身は語りたくない揚羽蝶
亡夫に会い夢の続きがほしくなる
一人居の寡黙へ雨が降り止まず
ワープロへ一本指の挑戦中

羽曳野市 森田 四三郎

墓地セール押し売りにくる敬老日
リストラの愚痴も聞いている縄のれん
職安にお百度参りききめなく
老い二人西瓜一個を持て余し
ガンクロ茶髪 平成お化け闊歩する

河内長野市 大西 文次

新婚の朝はあなたと未だ呼べず
犬掻きの泳ぎと余生馬が合い
アメリカの旅にお供の正露丸
孫の名はイチローと言う野球狂
停年で目覚しまでも罷免され

河内長野市 水谷 正子

ひとときの安らぎ茶筌捌く音
一行のボエムが似合う曼珠沙華
友が病む所詮人生一人旅
来年は艶よく咲こう月見草
優勝のバーゲン油断せずに待つ

河内長野市 木太久 正一

御巢鷹に十四年目の暑い夏
古アロハ妻とワイキキ遠い夢
居間で見る彼の有名な阿波踊り
使いすてカメラで孫の自然体
掘削機第二名神ゴーサイン

富田林市 中井 アキ

数珠繰ってしばし亡夫の腕の中
光りものつけて女は勝負する
豪快に妻がしている憂さばらし
子定にはなかった恋の途中下車
帰省子に厨の音も活気づく

富田林市 大橋 鐘造

童心に還る絵本を読んでいる
人並に預金を移すビッグバン
マイペースゆっくりだとは限らない
後ろから味方の弾が飛んでくる
物忘れ頭二つが欲しくなる

大阪狭山市 矢野 梓

心だけ近くにいと娘は遠く
里帰り友につぎつぎ電話する
足して二で割りたいような姉妹
好奇心くすぐる旅で若返る
価値観の差で迷惑な世話となり

大阪府 澤田 和重

あなどったパートを二度の職にする
温もりのある毒舌で好かれてる
美男にしてくれる鏡があれば買っ
咄嗟に出る嘘に自分が恐くなる
いい一日でした明日へネジを巻く

高槻市 乙倉 武史

敬老日保育園から招かれる
予定表今日も元気でクリアする
裏技を披露存在感を見せ
一寸した油断すかさず風邪の神
花好きの亡妻が遺した花に水

東大阪市 田中 美弥子

大古の夢 砂にうもれた絹の道(敦煌・西安を旅して)
鳴沙山 月の砂漠を歌いつつ
こわごわにラクダに揺られ鳴沙山
敦煌で亡父を偲んで夜光杯
夫には感謝しながら旅の空

枚方市 二宮 由紀子

にこにことコツコツ丸く生きる母
その笑顔 魔法のごとく幸を呼ぶ
茶目っ気な瞳は今も少女です
大声で笑う妻いて僕達者
健康をただただ願う年となり

鳥取市 福永 ひかり

二割でも馬鹿にならない薬代
救急車走っていても他人ごと
ありがとうを言う回数が減っている
停年のゴールが見えてから長い
ドナーカードを書く決心がまだつかず

鳥取市 山本 益子

ガラス張りの水族館は夢くれる
人生の終着駅に待つ閻魔
老境のひと味優るアドバイス
吟味した夫婦茶碗はまだ欠けぬ
ああ無常 終着駅の墓地を買っ

鳥取市 有沢 せつ子

びったりと歳あてられた若作り
愛すこし覚めたか癖が疎ましい
輝きを時どきもらう試着室
貧乏で人の涙をすぐ貰う
通販のカatalogで目が肥えてくる

鳥取市 録 沢 風 花

見栄えより味わいのある方に向く
ペンネーム余生の流れ変えてみる
浄土へと旅立ってから光りだす
おだやかな水の流れに油断する
カラフルなテントに砂丘眠れない

鳥取市 山 口 水 楊

タクシーに歩く道筋教えられ(上京して 5 句)
若者を真似て路肩の一休み
飽食に刻の狂った腹時計

カタカナ語だけのメニューとにらめっこ
江戸っ子の粋はそばと保存会

鳥取市 中 村 金 祥

景気策いつも手遅れだっちゅうの
野党案いつの間にやら与党案
学園祭カレーが食えぬ火も焚けぬ
着々と進む地球の死に仕度
記念日が毎日あつて忙しい

鳥取市 近 藤 秋 星

四国路を訪えば懐かし麦の秋
介護保険何がなんだか分からない
敬老の日とて変らず野良へ行き
命ある限り奏でよ秋の虫
西瓜割り見事割ったは女の子

鳥取県 藤 山 弘 子

近すぎてなかなか行けぬ観光地
バーベキュー煙の中に笑い声
暑い時あついお茶飲み自然体
オートロック向う三軒顔知らぬ
手作りの燻製並べ客を待つ

鳥取県 山 内 芳 江

悲しみを越えて筋金入りとなる
二の足を踏んで幸せ又逃す
やわらかく責める皮肉に気が付かぬ
泥沼に落ちて情けが身にしみる
玄関の我流のお花良く喋る

香川県 原 賢

ビリでいい転ばぬように辿り着く
柳誌から生きるパワーを掌に入れる
爪を研ぎ明日の修羅をじっと待つ
最後まで言うてしもうた孤独感
友が逝きまた友が逝く桐一葉

香川県 瀧 井 勝

丸い人どっちに転ぶか判らない
我が事は二の次にして母は老い
仲人口笑い話で済んでいる
穴はみな丸いものだと思つた
物証に石ころ一ツ置いてあり

松山市 山之内 八重美

トップの座外人勢の名古屋場所
はのぼのと温もり残るくに訛
いけず言う客に売り娘の口上手
振り返る余裕などないトップ行く
おしやれ気がなければ惚けてしまいそう

愛媛県 安野 案山子

考える人のポーズで夜が明ける
なめくじの夢はやっぱりマイホーム
こんがりと焼けた茶髪の同じ顔
両親の期待が重い僕の羽根
気がつけば介護保険の中に居る

高知県 百田 幸

底辺の生活に慣れた戦中派
苦も楽も皺にたたんだ優しい目
惜しまれて逝く幸せを考える
毒舌に包んだ情け感じてる
ほろ酔いでお尻が軽くなる上戸

北九州市 岡田 幸生

ケイタイを持たせて夫解き放つ
がめついと言われた人の義援金
ヤッホーの筈に山も若返る
絵心があればと眺む里の秋
返らない金だが心満ちてくる

宇部市 中田 忠夫

こらお前カラスが僕をバカにする
ハスキーな声で意外に持ててます
焦らすだけ焦らされ男試される
ライバルの含み笑いに負けたかな
老いらくの恋もまんざら悪くない

出雲市 加藤 スズコ

風の日に亡母が供えたお赤飯
御無沙汰を詫びて行きます梨便り
夏野菜やっぱり旬の舌鼓
姑の真似どこかが違う匙加減
悲しみを越えて感謝の盆飾り

出雲市 佐藤 治代

母の忌を待ってたように小菊咲く
仕合せをつかんだ人の恵比須顔
贅沢な話がゴミの山にあり
もやもやを抜けると飯もうまくなる
よく見るとホクロが八つ顔にある

出雲市 川島 和歌子

輪の中に鼓動伝わる楽しい日
どの顔も個性にあふれ生きている
かごめの輪いつしか抜けてはばたく子
花火師の苦勞に咲いた空の華
寝ころべばすいこまれそう高い空

松江市 山根邦代

眩しさが柔らかなり秋の風

いつまでも使い捨てではあるまいに

食卓を囲む暇ない現代っ子

ふるさとで開放感にひたつてます

田舎にはいなかの話あつてお茶

島根県 武島 ちよえ

皿割れて今日一日の長いこと

腹いっぱい食べると秋が咬す

ぼやいてはいるが倅せそうな顔

衣ずれの音も静かに秋の風

赤トンボ亡母の化身か離れない

和歌山市 土屋 起世子

子沢山小走りぐせの母の下駄

これからも脇役でよしかすみ草

一番に犬がおかえり言いに来る

好奇心煽る見出しの週刊誌

火傷せぬ距離でお酒を奢られる

和歌山市 上地 忍

正論を通した人の彼岸花

朝刊の一面温い風よ吹け

月見ると月の砂漠が口に出る

にが瓜の蔓の強さに負けて水

一輪のコスモス秋を連れてくる

和歌山市 吉村 さち子

うっかりを売物にして受けている

輪の中を崩さぬように言葉選る

日を追っていつか悲しみ食べつくす

根掘り葉掘り聞かれて何もしてくれず

バス停に決断つかぬまま並ぶ

和歌山市 武本 碧

メロデーの甘さへ溶けていく五感

好きなことする時だけはよく動く

新世紀どう生きようかメカオンチ

手を抜いた分だけ強い風当たり

コンマ以下気にせぬ主義の楽道家

和歌山市 上地 登美代

かぶと虫二匹で家が建てられる

ウィルスといたちごっこ世紀末

受け皿があるから破産すぐ出来る

非常口確かめておく旅の宿

六十路来て五十肩との診断書

尼崎市 尾宮 弘治

茶髪せぬ孫の弱気が気にかかる

同居して笑顔で生きる婿の位置

ぐっすりと寝てます内緒聞いてます

ネクタイとパジャマが出合うゴミ置き場

茶柱の話はしない啜うから

尼崎市 清水 久美子

世渡りのヒントをくれたやしろべえ
物好きで棘あるものに手を伸ばす
だんじりの上で男を売るやんちゃ
ライバル視してる身の程知らずでも
マンションに出張してる秋の虫

尼崎市 田辺 鹿太

触れ合えば猫も杓子も温かい
女房の助けが欲しい八合目
くす玉が割れると森が消えてゆく
好物は酒にタバコという米寿
道楽が昂じて花も木も枯らす

尼崎市 内田 美也子

スケジュール積んで崩して夏が逝く
すすき野へ秋を運んでゆく夕日
ひとり身にあれよあれよと時流れ
出会いより別れが多い齢となり
思い出と棲んでこの地が出られない

川西市 西内 朋月

残月を見上げてドアをそっと開け
探してたダイヤの指輪嫁が嵌め
旧友とジョニーウォーカー空にする
たまに來た息子の話金のこと
円高が追い風になる輸入元

篠山市 仲井 素水

九十二死ぬのが惜しく大手術
死ぬもんか未だ死ぬもんか死ぬもんか
嵌入が時代を語る伊万里焼
退院に付いて帰ったなまけぐせ
四ヶ月入院ボケがこうじ文字乱れ

宝塚市 飯西 ミサヲ

はよう寝て夜中に覚めて旅遅刻
老人もやたら忙し世紀末
転勤に連れては行けぬ猫で揉め
どうせなら別嬪さんのレジに着く
健康食どれがどれだけ効いたやら

京都市 高村 吉之助

お盆には御先祖様も里帰り
野仏のしたしみやすい影法師
若い頃の大峰修行は何だった
こもりの僧のざん悔聞かされてる仏
み仏に詫げる言葉が出てこない

京都市 三宅 満子

詩集から四ツ葉青春よみがえる
良妻の反乱突如やってくる
師の句集生きぎますべて浮き彫りに
ダイオキシンのしつぺがえしかも
ガンの心配よそにしっかりやくサンマ

似顔絵師二割美人に描いてくれ
横浜市 田 中 笑 子

割引の額につられてたまる品
ストレスをソイヤで飛ばす夏祭り
婆さんの胸を張らせる糠の味

横浜市 平 達 也

休ませたい今日も病院通い妻

これ以上頑張れません天仰ぐ
スケジュール日の出拜んでからこなす
なごましてくれる葉書絵また届く

横浜市 福 田 由 美 子

こだわりを百円グッズ捨てさせる

厚底の靴で若さを主張する

お昼寝の時間 身体が覚えてる
塾へやり送り迎えの仕事増え

横浜市 鈴 江 純 子

巣立ち後も事故のニュースが気にかかり
絵手紙でふるさとの四季運ばれる

老人会束ねて母の恙無く
検査漬け日毎病人めいてくる

横浜市 布 山 嘉 信

姥捨ての悲劇を語る千枚田

奥入瀬の水音縫って郭公鳴く

子が巣立ち記念の柿の実がたわわ

外遊に経費が惜しい特別機

夕焼けに明日を保証されたよう
横浜市 山 下 省 子

生涯を試行錯誤で終りそう
悪いけど休みの夫少し邪魔
折角の命だ消えるまで燃やす

東京都 井 上 つよし

ひたすらに故郷の夏を草むしり
栗や稗 休耕田によく実り

天然の涼風美味し大欠伸
名案が浮いては消える酔い心地

東京都 吉 田 土 風

同期生みんな眩しい女ばかり

メンバーに入れた幸を噛みしめる
いい女目盛りを少し甘くする

難題を軽くこなして憎い奴

静岡県 大 村 正 雄

新米を炊いて待つてる秋祭り

来賓の代理居並ぶ敬老会

スーパ一のすすき飾って月見酒
前例がないのではんこ押されない

浜松市 田 中 知 行

水のみば秋のちかづく音聞こゆ

絵をかいて絵をかいて絵の中にいる
借家して今年の夏は暑かった

停電のまっ暗がりの暑いこと

千葉県 大川 晩 翠

立て札に生年月日苗木植え
ひとりずまい監視カメラが見届ける
ポケットに少し気取って花を挿し
つばくらめみんないっしょに口を開け

野田市 那賀島 雅 子

ブランコで涙ぐむ眼を干している
自慢する何も持たない笑い皺
さりげなく老母はうすきコンバクト
八十の坂に歩幅もせまくなる

新潟県 高野 不二

三日の旅三日の薬持つて出る
掛け捨ての介護保険のつもりでい
今日も又都会がこわい記事ばかり
女のけんかに検事巻きこんで

秋田県 湊 修 水

天災に手抜きビルの輪をかける
不況下に一〇〇〇万の虫さわざ
萩咲いて温泉町は秋の彩
気合い入れ残りの旅を歩かねば

今治市 中村 好 恵

野辺おくり済ませ見上げる鰯雲
涙せぬ母を強いと他人の目
帰省客の枕が足りぬ夏休み
名月を窓に招いて茶を点てる

今治市 塩 路 よしみ

高嶺の花遠くから見ただけでよい
白を白と言える勇気が欲しい日も
弱音吐くつもりはないが痛む脛
踊らねば仲間外れにされそうで

愛媛県 黒田 茂 代

バカ照りとバカ降り地球狂ったな
たとえ笑い皺でも皺は好きでない
足踏んだわけが夫にわからない
針金のギブスで耐える細い茎

高知県 近 森 功

結び目を確かめてみる夫婦旅
父さんもレンジのチンに変える秋
まだ燃える三十一文字で綴る文
百からが余生と決めて鋏を振る

鳴門市 八木 芳 水

演習を狭い日本でやりたがり
原発に巻かれぬ町の心意気
一年中お盆が欲しい大通り
どうみても性善説はミステーク

香川県 松村 輝 夫

油断した谷間の恐怖見るニュース
この歳で甘えてみたい人に逢う
介護保険掛けて審査で撥ねられる
台風は恵みの雨と共に来る

福岡県 岩崎和女

開かないサクラもあろう絵馬の数
ストレスを投げたい場所が見当らず

新世帯百田店に間に合わせ

土産物つれが買うからまた増やし

宇部市 高山清子

肩書が泣いております紙おむつ

友人の昇進へついあらさがし

サヨナラも言わずに逝った老いの恋
火を付けたまま去って行く憎い人

益田市 岡田たけを

飯抜きでCT撮りにバスに乗る

体重計二キロ増やした秋の空

いつ死んでもいいと言いつつスーツ買い

行動が可笑しい後をつけてみる

出雲市 岡あきら

残高がゼロでも平気さすが妻

フルムーン留守は鬼瓦に頼む

丹精の答をくれた茄子 胡瓜

鈴虫も月の窓辺に寄せてやる

島根県 松本聖子

介護保険世話にならぬぞ強く生き

先に逝き私のすること笑っている

過ぎる夏さよなら言ってトンボ行く

夫逝き風鈴今年は遠慮がち

島根県 多々納テル子

度忘れの話で今日が動き出す
年金へ今が青春などという

月と聞く虫のコーラスしみじみと
青空を襲うように建つビル街

鳥取県 平井栄翁

リストラの深手を癒やす妻の虹
帆立貝去って貝がら節残す

砂丘から海を跨いだ虹を見る

分相応ガラスが似合う私の首

鳥取県 澤裕子

ふるさとに兎を追った山がない

身の程を悟り小さい夢を見る

底抜けに明るい妻で救われる

適当に呆けて明るく今日も生き

鳥取県 加藤公子

食糧難過ごした老母と芋を食う

練習に練習を積みビリを取る

車中にて外出用の顔にする

裏山が削り採られていく恐怖

鳥取県 西冲彰雄

本音しか言わぬ石好き裏切らぬ

石好きと出合い河原で握りめし

箱書きが出来て石にも氏素性

石展の自慢話は憎めない

鳥取県 鳥羽 玲子

秋日和山へ空気を吸いに行く
愛情のかけ過ぎばらが育たない
体型を隠すあれこれおしやれする
賑やかな夕餉の中にいる感謝

鳥取県 鳥羽 直市

せん定は眺めて切つて夢つなぐ
控え目な音で暮して同居する
日本中ごみ対策で日が暮れる
ボケ防ぐ趣味の予算を多くする

鳥取県 松本 つね子

真実を喋らぬ前に酔払い
過ぎた日はふり向かないがふと思う
人生の黄昏さみし昼の月
人情の深さ心を軽くする

鳥取県 田村 邦昭

賽銭の箱の中味を読んでみる
いい人をやめて心が軽くなる
大砂丘上に立つ身の小を知る
反省は人間という証です

米子市 猪森 スミエ

此の家は揺れぬ漬物石がある
せかせかと蟻は地下道工事中
飴玉が仲を取り持つバスの旅
鬼太郎の像カラコロと町起こし

倉敷市 撰 喜子

自分史を祝ってくれる妻は喜寿
敬老の日も変りなく孫の世話
四季の彩心なごます田舎道
介護する私も古稀が近くなる

岡山県 国米 きくゑ

秋桜の道ヒロインの気で歩く
余生まだ二人で歩く幸思ふ
百歳の笑顔に活を入れられる
ハンカチで風おこしてる蒸し暑さ

三重県 佐々木 森哉

友の死を悼むか月が欠けてくる
セピア色の渚に恋の足跡が
ぶつつけ本番生きる暮らしに嘘はない
火の酒を呷り懺悔を繰り返す

三重県 尾崎 勤

落ちのない話に幕が下りてこず
短めに切らぬ床屋の腹積もり
沖縄へ80円で行くお礼
人数分なくて遠慮の盛り合わせ

滋賀県 中 宗明

いたずらのどつきりカメラ腹を立て
督促状背伸びの付けが舞って来る
やっとかさ余生を満たす伴侶でき
寅さんも銅像にされ照れている

奈良市 上村 季世恵

さんま焼く匂いにつられ回り道
おしやれして出かける孫は受験生
母の目が光る娘の長電話
立話散歩の犬に嫌われる

綾部市 藤田 芳郎

それなりの覚悟してする溝掃除
雨の日に読んだくらいで追いつけず
ポケットの拳なだめる独り酒
困っているらしい吠え声まで褒める

和歌山県 村中 悦男

王子社に古人と対話する
熊野古道女人の足袋の白さかな
那智の滝小さな私宙に浮く
順番に鈴ならす人列をなす

和歌山県 坂東 和代

自己流の手話で通じる老い二人
ひとり暮し三日程ならして見たい
釣りあげられ驚いたまま凍っている
助手席にいてストレスを溜めている

和歌山県 杉山 精子

茄子トマト野菜室には四季がない
茶柱に一喜一憂する朝げ
もう五十まだ五十なり力瘤
すすき野の風に誘われ行く古道

和歌山県 和田 美寿子

忘れたり忘れられたり老いの日々
新聞はテレビ欄みてはいおわり
誰よりも忙しそうで何もせず
自販機の釣銭何度も探る欲

和歌山県 木村 親路

暴力も登校拒否もない校歌
三本の矢は折れないが曲げやすい
年金と命小出しにして使う
長生きの介護疲れた古稀の嫁

尼崎市 森安 夢之助

ちっちゃい庭に地響きがする蟻の列
頑固者も時代の風に逆らえず
階段と反りが合わない僕の足
人形の仲間が増えた誕生日

尼崎市 河津 正治

花火師のノレンに賭ける心意気
三回忌形見の浴衣良く馴染む
菅笠に雅の浴衣風の盆
如才ない仕草で受ける人気者

伊丹市 延寿庵 野鶴

生かされて数えきれない恩を受け
ドナーカードへ今か今かと待つ命
寄付金で席順決まる地鎮祭
天日干し鰯のひらきが旨くなり

伊丹市 櫻谷郁子

米寿への残る余白へパワー溜め

日は西に誤算もなく今日を謝す

西日さす部屋静けさに溶けていく

風誘う野火の煙のしたたかさ

姫路市 服部一典

外国で土産担いだ農協さん

男厨房を出られず妻は不治

不治の妻古希に重たく圧しかかり

大正の男は頭おさえられぬ

篠山市 谷田多美子

猫退院慢性腎臓加療中

鍵一つもって夕陽の道帰る

夫病んでへそくりの箱色が褪せ

ただの箱になって用済み冷蔵庫

兵庫県 山本泰子

好物は毒を承知で手がのびる

たのしもう隣の二人夫婦かな

アイラブミーまげはしません自己主張

作らぬが料理番組見えています

八尾市 平川幸枝

百合匂う天国行きを疑わず

亡き夫の愚痴は封印してしまふ

摺り鉢を押さえてくれた手が恋し

菊の花きらいになった棺の中

八尾市 與田明

丁寧に診られて薬また増える

腹立てる気力も失せたタイガース

水面下くぐった金はさびている

せっかちと無口な人がいて疲れ

八尾市 田中トシエ

一円をかるく踏む人拾う人

友人もライバルになる受験生

どの色も似合う若さがうらやまし

親子して敬老祝う長寿村

羽曳野市 永田章司

哲学と理念不在の永田町

連休の混雑はずす停年後

立ち姿女性に勝る女形

来るかしら同窓会にあの人が

羽曳野市 川口信子

飛鳥路の史蹟巡りへ踏むベグル

美しく老いたし友のアドバイス

肥つてもやせてもだめと無理なこと

不眠症明日の予定が気にかかる

東大阪市 北村賢子

賑わいが消えただ寄せ返す波の音

つらい夜は亡母の笑顔に見える月

あの月のどの辺にある足跡よ

ふりむいてもくれぬお人が憎らしい

高槻市 左右田 秦 雄

ほんとうは帰って欲しいごゆつくり

群青の海に心を洗われる

風鈴の音にまどろむバスタオル

うろうろしても犬を連れてるから平気

吹田市 後 藤 志津香

寝不足の頭痛に弱い蟬しぐれ

糠床を撫でてなすびの秋の味

農薬を避けたきゅうりを買ってくる

大声も遺伝と思う兄の声

寝屋川市 井 上 すみれ

亡祖母に似て独り言がふえて来て

お魚を上手に食べる孫に負け

秋が来る岡山神楽なつかしい

要らぬこと聴くなと耳が遠くなり

岸和田市 亀 井 皎 月

万歩計散歩しようと声がする

どちら先 妻と遺影を撮りに行く

周囲から振りまわされている日本

通帳の残見て妻の唸る声

岸和田市 不 破 仁 緑

半々と言われてからの神頼み

栗の実が祭太鼓に揺れている

良い話先ずは煙草に火を付ける

肉が良い肉が悪いと言うテレビ

泉佐野市 備 後 三代子

もひとりのわたし私をけしかける

ひと言を胸に畳んで笑み会釈

口止めをされ指切りも念が入り

初心者の特ニススコートのかしまし

和泉市 横 山 捷 也

還暦の祝一枚夢を買う

決め球を嫁が上手に打ちかえす

幸せな暮らし手紙の字がおどる

台風の前路に父が一人住む

富田林市 山 原 昭 水

煙草やめて褒められ酒で叱られる

美術展裸婦の写真に酔っている

ハーマニカ吹いてる亡父の夢をみた

白地に赤く日の丸きれいな文化の日

河内長野市 杉 谷 カズエ

ストレスをしゃべって癒す人とい

聞き上手忘れ上手で続く仲

妻の手に伝しい物よ敷八等

満月だ一緒に見たい人を呼ぶ

藤井寺市 太 田 扶美代

試食したハムはきっちり買ってくる

どうでもいい事考えていて日が暮れる

ありったけ歌い悲しみ遠ざける

酒という友に時々感謝する

大阪市 中澤伽羅

祝日も節目とならぬ日を過ごす

油断していつも怪我する家のなか

ジベタリアン人目気にしちゃできません

私だけ長生きしても困ります

大阪市 一本勇太

戯画一枚うたかたの掌に抱いて秋

幸せの裏側を見ず飯茶碗

晩学の視力のなかの一行詩

幸不幸単細胞はすぐ拍手

大阪市 榎本舞夢

笑われているのも知らず笑ってる

人がいる限りロマンが続きます

プレゼントされたグラスで飲むワイン

残ったらもう約束皆売れた

大阪市 小泉ひさ乃

虫の声はつぼつ秋の支度する

辛いこといっぱいあるのにお腹減る

誘われて来たバーゲンで敵になる

門限が十二時孫はまだ不服

大阪市 中井正秀

人相の優しい人に道を聞く

お供えを先に戴く罰当り

宵越しの金をセッセと残しとく

贅沢な遊んでるのに病気になる

大阪市 伊藤博仁

どつと来てさつと引き揚ぐ盃蘭盆会

喜寿祝いほんまかいなと優待証

蟬骸あちこちにあり秋を知る

浮きの先これみよがしに魚の群れ

大阪市 平井露芳

年寄りの元気を貰うのど自慢

病院でバイキン貰う身の不運

燃えるゴミに入れられ蟬が成仏し

しよっぱいと今頃コンクリ暴れ出し

大阪市 大川道子

寝坊して手順狂った朝の乱

くり返す歴史に古着棄てられず

手鍋さげついて来たのに先に逝き

CMのシチューに秋を感じてる

堺市 斎藤さくら

秋空に誘われましたグルメ旅

コオロギの大合唱が夜更けまで

好きだけど家風に合わぬ松茸よ

保険より貴方頼りと送り出す

堺市 荻野正雄

夢で会う亡父はいつも笑ってる

まず目に来歯に来腰に来ついに足

梅酒の効き目で登る古希の坂

運動会校区の議員よくはしゃぐ

今治市 渡邊 伊津志

思いやる心通じていた笑顔
波と砂出合いと別れ繰り返す
騙されて赦して深い母の海

今治市 野村 清美

朝の雨予定狂わす万歩計
栗弾け笑うトリオの実る秋
瞑想の自由に浸る仕舞い風呂

香川県 清川 玲子

窓際も慣れればさほど悪くない
助手席に母新米を積んでくれ
ベテランの主婦特売をのがさない

高知県 桑名 孝雄

月見酒まずは一献冷やでいく
老いらくの恋など夢をみて達者
あこがれた女だが孫の護衛つき

愛媛県 宮本 末子

出し捨ての介護保険は謎ばかり
割箸も一度で捨てるには惜しい
欲ばった膳に恥入るバイキング

日立市 加藤 権悟

静岡市 増田 扶美

蜷に帰山の僧の忙し足
豪雨禍に吞まれ悲しい山の里
振り向いた顔はやっぱり男です

横浜市 豊田 羊子

景気よい呼び込みについ無駄を買い
格好つけた箱に納まる備長炭
駅前で夏の球児をみるテレビ

横浜市 金森 徳三

熱低もドームの中は球が飛び
出られない男が一人露天風呂
不思議だな各紙そろって休刊日

横浜市 荒井 広和

妻の掌の中で離職の風が舞い
平等に育て個性はままならず
澁みなく何時も澄んでる母の河

横浜市 伊藤 ふみ

渋滞の前目障りな大型車
仲間へのみやげ色変え同じもの
月代りまたスタートの棒グラフ

鳥取市 山口 千代子

前戦の疵を労る縄のれん
縄のれんここにも地域振興券
名月を浮かべ一句を詠む上戸

有難う言葉一つで和をつくる
逝ってから夫の重さが身にしみる
妻にだけ愚痴や我儘言ってみる

鳥取市 福島 庸二

議論して何故か白黒つけたがる
有難い給与生活後わずか
信頼が途切れた時の傷深い

鳥取市 谷岡 清子

爺のしわ働き抜いた勲章や
休耕田鳥とトンボの遊園地
灸のけむりゆらり痛みを持っていく

鳥取市 夏目 健一

片方を開けただけでは風は死ぬ
天井のねずみ可愛くなってくる
泣きどころ隠して生きるむずかしさ

鳥取市 岡田 信恵

背が曲る少し淋しい年輪だ
リハーサル自信たっぷりどじ踏んだ
背を向けていいきる私馬鹿でした

鳥取市 河田 のり代

リハーサル足がふるえて人字のむ
姿見のオバタリアンはおしゃれ好き
駅弁当味の良し悪し舌が言う

鳥取県 高尾 京

原爆忌子孫の地球護りたい
遭難と奇跡の生還紙ひと重
こだわりも好く素朴にも味があり

鳥取県 竹森 富久江

気まぐれな煙にほとほと手をやいて
堪忍ぶくろ繕えぬほど破り
風邪の神のどに宿って唄えない

鳥取県 橋谷 静江

口先へ出そうな愚痴を呑み込んだ
今となりや引き返せない位置にいる
つくづく姉の姿が母に似る

倉吉市 大下 智子

楽園と書いていますうさぎ小屋
親ばかりで金がたまると子に落とす
少子化で落書きする子もういない

倉吉市 牧野 芳光

結論を出さなくてよい立ち話
息切れがしない程度のおつきあい
働いて働いて古里に帰る

米子市 森脇 麗

節くれのわたしを守るおっとの手
帰省子を囲み夕餉の箸おどる
庭のバラ「切らないでネ」といのち乞う

米子市 足立 由美子

信頼の握手ができる友といえる
老母の手帳 法事はかりで忙しい
夏バテの脳へビタミンやっている

意のままにならぬ天気と娘の縁談^{縁談} 倉敷市 森本文子

同年苦勞話が似過ぎです
自然です老化も進む背も曲る

倉敷市 家守政子

百歳を生きてめでたい敬老日

さわやかな嫁の笑顔にありがとう

脳味噌を掘り起して居る夜長かな

岡山市 清水金太郎

甘味出すにも少うしの塩が要り

便利よく散らかして居る部屋がよい

神前で隣も同じ願ひ事

島根県 菅田かつ子

レストラン隣の席もスパゲッティー

やさしさは表に出さぬ面構え

住む所壊され熊もさ迷えり

松江市 小川注湖

もや晴れて湖上に主のしじみ舟

老妻がテレビ見ていて怒ってる

日の丸が見回している卒業式

松江市 銭山昌枝

投げられた石にサインをして返す

躓いた石との縁がまだ切れぬ

盆休暇海月に刺され夏終る

新築の大病院の灯の螢

にわか雨蟬なきくずれ秋の風

気配りをしながらお茶の笑い声

出雲市 榊ミツエ
宇部市 藤本一規

年金は削る負担は増やします

ウォーキングみんな昔はしてたこと

絶望の淵を越えたる人の自負

京都市 勝山美千代

独り言猫が尻尾で返事する

年かしらスリ足多くけつまずく

秋彼岸悟りの世界未だ遠く

京都市 前上英一

病癒えプラス志向の靴を履く

寄り道の出来ぬレールを妻が敷く

定年の駅に仮面を脱ぎ捨てる

和歌山市 福重美子

献体も出来ぬ体で歳重ね

黄金虫悪さするけど殺せない

恐怖心忘れる頃に来る地震

和歌山県 中村君枝

日の出見るツアーが誘う新世紀

深入りはよそう誰でも脛に傷

夫婦でも意見の相違寄附の額

樫原市 西 本 保 夫

改築をかき回してる善意ミス
人生を甘く苦勞がまだ足りぬ
女の事がすつきり行けば苦勞せず

川西市 田 中 喜 俊

生き方を替えて友達多くなり
立話万歩計にも休息を
ひっそりと雨後のいちじく味にする

尼崎市 軸 丸 勝 巳

敬老の日に集まった元氣組
新世紀もうオタオタとせず生きる
駅弁の楽しみ三分停まる駅

兵庫県 黒 崎 美 紗 子

雷神のクシヤミ下界をあわてさす
うれしさで景品重さ苦にならず
転勤で住んだ地今宵テレビ出る

兵庫県 徳 平 毬 子

石仏が息子の顔に見えうれし
娘の電話酷暑忘れてフアイト湧く
旅メニニューまねて作って宿気分

兵庫県 西 山 八 重 子

袖垣に一寸かくれて見る鏡
背伸びして人並という風に逢う
諦めの釘一本が打てぬまま

大阪市 立 蔵 信 子

秋色に染まって出ます美術展
後悔がいつも歴史の隅にある
戦いの歴史のうえに平和論

大阪市 尾 崎 黄 紅

はたちから戦死の妻で生きてきた
じいちゃんに似たとうれしいことを言う
叙勲者に訊こう清廉潔白か

吹田市 大 谷 篤 子

満天の星を眺めてひとり酒
孫らしいバタバタバタと靴の音
青空をなお青くする窓を拭く

吹田市 須 磨 活 恵

ご馳走はぜんぶ毒だと医者が言う
自己嫌悪負けずらいで欲ばりで
猫じゃらしラムネの瓶に挿して秋

高槻市 西 谷 治 三 郎

文部省日本語苦手の子に英語
自自公のだんご兄弟金串か
まずくてもうまそうな顔コマースヤル

高槻市 生 田 義 一

少子化で子供の居ない地蔵盆
酒くらい飲みなさいよと妻も飲み
年金の暮らしの中に旅もある

高槻市 江原秀夫

口先が尖ったぼつぼつ手を引こか
一年中呪文のようにまあいいや
氣遣いに疲れ達磨の仲間入り

豊中市 みきわきみ

ほどほどにやってた罰のリストラだ

野球にもあるぞ俺にも隠し球

この頃は蹴る石のない下校の子

枚方市 大昇隆広

もの足りぬ今日の寢床へ偉人伝

肩の力抜いて眉間のしわを消す

俺お前村のいで湯は倍温い

八尾市 驚見章

真夏雲夕べになるもおとろえず

雷雨止み陽はサンサンと森照らす

盆に入りなすすべもなく病んでおり

門真市 矢阪英雄

準備中の札立てかけて蕎麦を打つ

灰色は迷彩色か護衛艦

頼朝の墓前でガイド物忘れ

寝屋川市 岡本 勲

地図にない道だが行くしかない余生

恋ごろろ六十路すぎても欲しいもの

肩書きがとれて素直になった父

東大阪市 今岡貞人

メモ書きでよいから日記続けたい

熟年のスタート亀の心意氣

山一つ越えると風も風いでくる

藤井寺市 岸本寿代

虫の声小さな秋がやって来た

月あかりおいでおいでとすすきの穂

土瓶蒸し秋の味覚を先取りす

羽曳野市 山本たけし

秋を酌み光源氏となる夕べ

誇るものないが傘寿の笑みがある

ホームレス見れば家出の兄思ふ

岸和田市 木村正剛

人生の秋すり足で忍び寄る

陽が落ちる天動説で支障ない

裏山が庭と思えば安いもの

泉佐野市 大工静子

よばよばと生きねばならぬ杖ついて

四度目の年号股にまだ元氣

丸まげに洋髪今は断髪で

泉佐野市 稲葉 洋

糸口が見えて空腹感が湧く

知ってても言わずにおくれ昼の月

中長期の予定はやめる古稀以降

横浜市 三村 八重子

ふらふらの完走に湧くゴール前
再会に言葉は要らず手を握り

唐津市 岩崎 實

垣根越す揚羽の雄姿庭の秋
さまよえる魂かと思う音がする

香川県 向山 治延

二人なら助け合いつつ坂も越す
一言で座が白けたりナゴンだり

田辺市 大峠 可動

絞首刑ばかり雉鍋 鴨鍋 地鶏鍋
おおまかに言えば倅せなあ妻よ

兵庫県 広瀬 房江

さわやかな朝が始まる水の音
孝行のつもり墓前へコップ酒

松江市 松浦 登志子

好きな曲続き眠れぬ深夜便
足は足 手は手でこする夜長かな

島根県 毛利 幸

振替でいつのまにやら預金減り
へりの音ラクダ驚き群を解く (モンゴル旅行吟)

安来市 原 煩惱児

義理固い男が筆で手紙書く
新米が出来たと友の有難し

米子市 小塩 智加恵

古い二人話し合う声太くなる
顔合わす度に一病ふえている

鳥取市 宮脇 道子

夫婦して給料もなく夏祭り
父の郷 砂丘は広く海光る

鳥取県 西尾 敬之介

照る陽にもめげず睥睨鬼瓦
蟬の声日毎に力萎えてゆく

松原市 和氣 慶一

寅さんに似た影に逢う秋祭り
曾長の娘のようにピアス付け

高槻市 執行 稲子

ときめきの冗句上手に騙される
メリットはゼロだが酌もう祝いの酒

八尾市 高橋 明子

長男も次男も京都独り者
日本兵哀れ夢なき戦なり

交野市 森本 益弘

君が代が晴々として流れてる
時々はたわしで洗う夫婦箸

岸和田市 村垣 鹿太郎

孫帰り肩の荷おりた冷蔵庫
大正っ子我慢我慢で育てられ

(梅ミツエ氏前月分の句は52ページに掲載してあります)

水煙抄

秀句鑑賞

— 10月号から

森山盛桜

人間の森で燃えてる生きてる

塩路 よしみ

美しく優しい表情をみせる森。奥深く覗いて視れば、根性も怨念も遠慮なく燃やしている人間達である。か細い生命体ながら上手く知恵をしばって生きている長らえている。

結び目も螺子もゆるめて風通し

須磨 活恵

結縁も絆もがんじがらめ、箍もネジも時には緩めてみたい日がある。虫干し甲羅干し・息詰まるころに風を通さんかな…。ホッと安らいだ日を数えてみたくなった…。

のと仏びくりと動き以下余白

藤田 芳郎

ア・イ・ウ・エ・オつと反応を示した後、のど仏は何も喋らない以下の余白。悲報とか憤怒のせいなら時の流れに任せだが、息を呑むほどの感嘆の絵が今やつと眼前に据わる。

双方が男を下げた口喧嘩

川田 晋

やってしまいましたか。むかし男を上げる喧嘩は流行りましたが、今は肉食系の多い男からです。それはそれは短気なんです…。やさしさについて気を許すところろ汁

西村 りつえ

醜男にも似て顔つきはよくない。しかし、やさしくしてもらえばホロリと参ってしまいます。揺り下ろされて表とろう…男は脆い。

平凡に暮しています冷奴

太田 扶美代

そうなんですよ…決して贅沢に暮している訳ではありません。なのに今度は介護保険の徴収…。老老介護の生活も大変なのだが…と冷奴を崩しながらの八つ当り。平凡です…。本領を発揮している趣味の会

中井 アキ

勇気を出して、生きている証を立てられる場所みつめました。好きこそ物の上手なれとか、お喋り・お節介・横着ぶり…私に出来ること自薦でやっています。そして多趣味に。

置き薬 効能書は広角度

三村 八重子

何なりと仰せくださいとばかりに置き薬。突然の事への応急対処。お陰様なんです。

指折つて数えなければ気がすまぬ

鳥羽 直市

川柳初歩教室で、私も習いました…。字余り足らず、そして誤字脱字にも注意。

老いの身に難所となった丸木橋

湊 修水

昔、とんとん拍子に駆け抜けた丸木橋だ。

口惜しいが老齢者の足に不安感は生まれた。

無花果の匂いの中に亡母と居る

内田 美也子

生まれたとき既に無花果の樹は存在した。母に聞いた「アダム&イブ」のこと。あれから何十年も経ったが…甘い香りに母を思う。ふる里に迷路が出来て帰れない

伊藤 ふみ

そうかも知れません。公共事業のばらまき政治による道路造りの影響…人間関係まで迷路と言えますが、年一度は帰ってほしい。

遣伝子のひとつがとて遊び好き

足立 由美子

かたぶつ者ばかりの遣伝子でなかったこと楽しいなあ…。とても効いた遊びが愉快。

頂上を極めた自負のふくらはぎ

安芸田 泰子

「苦勞さんと言つてやろ、うじやないか」。丸みを保った筋肉は痛みもみせず立派です。

沙湖抄

八木千代選

振り子よ振り子お前は戻る位置がある

二階のタンス二段目は喪服一式

スリッパがみんな他人で同じ色

秋蝶を迷い込ませたあばら骨

残暑お見舞い百済仏から来るならば

瞑想を始めた釘が抜きにくい

木の椅子に座ると落ちて来る時間

いちにちのまんなか辺で藻に潜む

クロンで増やすもう一つの幸福

間仕切りをしてそれぞれの秋と居る

可能性はまだ階段の上にある

天地人 私のために秋となり

観覧車見てはならないものが見え

こめかみ反乱 何かが隠れてる

沈みそうな薬を今更見はなせぬ

石ころにさえなれぬ私の軽い骨

生き下手の溝の深さと般若経

強い意志 コスモス細い首ながら

夕暮れに放した小鳥気になって

疲れたら飛び込む森のふところ

海南市 三宅 保州

和歌山市 桜井 千秀

寝屋川市 江口 度

和歌山市 古久保和子

同

和歌山市 川上 富湖

西宮市 牧渕富喜子

寝屋川市 森 茜

米子市 鷺見 正子

あきる野市 佐藤 季穎

富田林市 池 森子

鳥取県 土橋 螢

藤井寺市 高田美代子

米子市 政岡日枝子

西宮市 門谷たず子

鳥取県 新家 完司

弘前市 一戸 ツネ

西宮市 奥田みつ子

米子市 青戸 田鶴

吹田市 山本希久子

蟬はもう鳴くことはない 土の上
さらばえて三日月ほどの願いごと

深山の木々は無口な仏さま

党主には大仏さんがどうですか

茹で玉子まだ半熟という本音

神を畏れて蟹は身に合う穴を掘る

骨壺を振ると親父が目覚ます

もやもやとするから蓋を開けておく

主役の座譲って鳥の声を聴く

あと幾日 今朝をいっぱい吸い込もう

正直なお湯で沸騰してこぼれ

子定どおり愛もスープも冷めてくる

手をふいて今日の厨をみとどける

身の上話した神様とねんごろに

噴火してやろう厄年なればこそ

ダム湖干す行方不明がまだ一人

有頂天 少し忘れていたものが

共食いを仕兼ねないほど混んできた

帰る人ばかりではない終電車

終着駅ここから次の旅に出る

詐欺のよう芥子の花には毒なんて

許されているのか今日を無事終える

手作りの恋が一直線でくる

絹針の穴は通れぬ木綿糸

油断すると崩れそうな私の顔

透明な袋にだって隙がある

和歌山市 野々 圭子

枚方市 海老池 洋

和歌山市 山根めぐみ

松原市 小池しげお

砂川市 大橋 政良

綾部市 藤田 芳郎

和歌山市 川上 大輪

島根県 松本 文子

和歌山市 木本 朱夏

米子市 木村富美子

出雲市 竹治ちかし

富田林市 藤田 泰子

米子市 白根 ふみ

藤井寺市 太田扶美代

大阪市 一本 勇太

横浜市 菱田 満秋

岡山県 小林 妻子

愛知県 早川 盛夫

大阪府 澤田 和重

池田市 栗田 久子

守口市 結城 君子

和歌山市 牛尾 緑良

川崎市 和泉あかり

横浜市 清水 潮華

八尾市 高橋 夕花

横浜市 保田 絹子

君といふ私は笑うことが好き
カレンダー十一月ほんまかいなこぼれ萩

一日を綺麗に引き算する夕陽

日曜ぐらい それぞれのティータイム

人形が心みせたら恐いだろ

やわらかい豆腐へ箸を突きさせぬ

目立ちたくないので流行服を着る

跳びあがれないから脚立どっこいしょ

終着駅 胸に波打つ響きあり

逝った子に住所不定の便り書く

人間を怨んで咲くか曼珠沙華

蜘蛛の巣のところでここに置く言葉

これで良かったのかと思うおもてなし

通じ合う物を求める旅続く

一つ散る一つの種を育てて

花屋にも影をおとした小さい秋

私を搾ると何が残るだろう

枝分かれした遺伝子が私らし

競り勝った椅子に光が届かない

人間を一人残して書き終わる

背伸びして裏切りを知る立葵

私と影との戦 今日もまた

カーテンを開けると今日が待っている

トコトンまで人に仕えて粗大ゴミ

月光にさらして自分取り戻す

逝く夏をたのしむ向日葵の種と

大宮市 新井 朋子

八尾市 高杉 千歩

弘前市 茜苗 果林

米子市 光井 玲子

富田林市 中井 アキ

大坂市 神夏磯典子

大坂市 本間満津子

鳥取県 土橋はるお

鳥取県 長浜 澄子

尼崎市 茂理 高代

米子市 谷口 次男

鳥取県 伊藤 寿美

島根県 福士 慕情

弘前市 山本 玉恵

岡山県 山下 省子

横浜市 太田とし子

寝屋川市 玉置 重人

松原市 生嶋ますみ

八尾市 米田 幸子

倉吉市 榎本 路児

大坂市 佐治千加子

大坂市 渡部さと美

西宮市 西口いわゑ

枚方市 森本 節子

和泉市 中川 楓

和歌山市 楠見 章子

地を這ってそのうち木にも登るだろう

ハートのエースを非常袋に忘れない

楽にしてあげたいけれど罪になる

千満がある大海のころにも

恋うららレモンの味を知ってから

喜寿の坂ノルマはみんな止めにする

古希過ぎてまだまだ伸びる爪と髭

一分の黙祷だけで済むざんげ

純粹な子の目に王様は裸

削除キー押せばあしたが軽くなる

一流の腕が陰干しされている

欄外に賞味期限がある不信

活きの良い魚 頬杖などつかぬ

耕せば土も返事をしてくれる

かろうじて残った寺に手を合わせ

人情の消去法から洩れている

ちえの輪は錆びて問題先送り

夕茜 きょうのいのちをありがとう

辞書にない言葉手も足も出ない

トンネルの出口 故郷の月が見え

逃げなさい それはマルチに違いない

花悠々 古い名前でおぼえておく

轟いて雷さまの御成りなり

寝たきりの夢歩いてる走ってる

ありがたや杖に待たれたこの散歩

仏壇へ一輪 初の秋海棠

米子市 中井 ゆき

羽曳野市 徳山みつこ

宇都市 平田 実男

和歌山市 山田 高夫

弘前市 斉藤 蒔

豊中市 田中 正坊

吹田市 石原 靖巳

泉佐野市 稲葉 洋

札幌市 三浦 強一

大和高田市 鍛原 千里

和歌山市 吉村さち子

横浜市 金森 徳三

和歌山市 武本 碧

枚方市 前 たもつ

東京都 後藤 早智

鳥取市 徳田ひろこ

堺市 桜沢 千世

香芝市 大内 朝子

鳥取市 美田 旋風

米子市 林 瑞枝

横浜市 川島 良子

鳥取県 さえきやえ

尼崎市 春城 年代

茨木市 藤井 正雄

鳥取県 乾 喜代志

米子市 野坂 なみ

群がっていない 天才かも知れぬ
食欲の秋を見放してあげよう
姉妹はいい心に壁がない
父の背を丸くしたのは三姉妹
ラップして温い言葉は冷蔵庫
母と子の符牒のような電話口
フラれた理由を知りたがっている母
生きて七坂 作り笑いを身につけて
ボソボソと求人欄が渴いてる
躰けば他人を見る目もおおらかに
聞き合い夫婦脱皮を繰り返す
堪えて来た川の深さは明かされぬ
やっぱり封は糊を使っている律儀
人形になれぬ血の気が騒ぎ出す
酸っぱさがくどくて皆無口なり
氣に入らぬ場所は回らぬ独楽の意地
プリンセスマサコが売れる花市場
権利義務なんと冷たい言葉だろ
ケンパーの線が引けないアスファルト
お隣の犬を気軽にかわいがる
まつり囃子もしんみりと聞く友の減り
アメリカへ由緒正しい尻尾振る
新聞屋脇目も振らず菊も見ず
この年も催促される彼岸花
無花果に夫婦それぞれ亡母想い
いじわるさ少々あつて几帳面

堺市	志田	千代
和歌山市	榎原	公子
米子市	足立由美子	
和歌山市	福本	英子
出雲市	園山多賀子	
寝屋川市	堀江	光子
八王子市	播本	充子
羽曳野市	吉川	寿美
和歌山市	福井	桂香
鳥取市	福田	登美
八尾市	村上ミツ子	
倉吉市	淡路ゆり子	
八尾市	宮崎シマ子	
倉吉市	野口	節子
鳥取市	上田	宣子
米子市	石垣	花子
唐津市	山門	幸夫
唐津市	井上	勝視
美面市	唐住	実
鳥取県	岩崎みさ江	
八尾市	吉村	一風
美面市	岩津ようじ	
鳥取市	武田	帆雀
鳥取県	乾	隆風
大宮市	八田	敏
鳥取市	坂田和歌子	

蝶が舞う帰化植物の花ざかり
人生の黄ばみ漂白したくなる
来世の契りを妻に聞きもらし
順調な胎児を見せに嫁がくる
産声を聞くとばんざいしたくなる
檜山へ行くカーナビが売ってない
不器用な男が握るフライパン
白黒をつけると友が逃げていく
今宵またひとりの宴が待っている
綿菓子子の骨までしゃぶるチャンチャンコ
野仏へ片手拝みのバスツアー
元氣よく咲いてコスモス妻の顔
妬まれるほどの妻ではない果報
ロボットはまだいりません 夫が居る
行間で耐えてるあなたへのかしこ
遠くから亡父の呼ぶこえ霧のなか
わたくしが歩くと笑う影法師
三宅保州さんの振り子はまだ揺れているようです。わたくしの振り子も、あつちかなこつちかなと動いています。最近ほんの少しだけ振り幅が小さくゆつたりとしたのは川柳さんのお陰でしょうか行く先が、つまり戻る位置こそ落ち着く場所と知ったからだと思います。**桜井千秀**さんのタンスの二段目には喪服一式がきつちりと、詰めてあるのですね。断崖に立つて正面切った書かれた十七音には、いささかの逃避もあります。張り裂けるような調べに圧倒されて息を吞みました。**江口度**さんのスリッパにご注目ください。潔癖症の方は消毒なさるのでしょうか。当然とばかりに他人も履く、色も同じスリッパに自身を任せる。これってミステリアスですすよね。

三田市	北野	哲男
横浜市	近藤	道子
高槻市	乙倉	武史
尼崎市	田辺	鹿太
鳥取市	録沢	風花
八尾市	山本	宏
和歌山市	玉置	当代
鳥取市	岸本	孝子
米子市	門脇	晶子
黒石市	相馬	一花
唐津市	仁部	四郎
倉敷市	田辺	炎六
高知県	桑名	孝雄
寝屋川市	平松かすみ	
今治市	野村	京子
米子市	森脇	麗
鳥取県	田村きみ子	

泥の功德

蒔 苗 果 林

近ごろお隣のお父さんが、時々バケツに泥をこねくっている。

りんご園から、スコップで土を掘り取り、草の根やその他の異物をとりのぞき、正真正銘の土に適當の水をそそぎ、最初はゴム長靴で踏みこみ、大きなしこりをほぐす。そのあと薄いゴム手袋をつけた両手でいいねいにこねくる。あたかも職人が麦粉でパンを作るように、ふつくらとした泥にする。最後に手袋をとり素手で泥の出来ぐあいを確かめる。自分自身納得出来る泥に仕上がっておれば合格ということにする。

このような泥作りは、近年、りんご栽培農家の誰かが、必らず責任を負うように実施されている。その責任者（？）は別の作業、たとえば、実すぐり、着色手入れなどの折も、その泥のバケツを自分の眼のとどく範囲内に

置き、今実施作業を中止してもすぐに、その泥を持ち寄ることが出来るようにしている。

さて、近年りんご農家の一番大きな悩みは外国産りんごの輸入だが、それにも勝るほどの栽培上の苦勞はフラン病の対策である。

フラン病は昭和五十年代に來た果樹の病気で、枝フランと胴フランに区別されるが、どちらもありんごの樹に一番発生しやすく、転移も早く、あまりにも難病なので、りんごの樹の癌（がん）になぞらえられている。

菌は冬の最中でも活動するそうで、胴フランは枝や徒長枝の切口から、枝フランは枝の先枯れや果実をもぎとった、つると枝の離れめなどから侵入するのだそうで、付着まもなく樹皮を褐色に腐らして異様なにおいを出す。発病後一ヶ月ばかりすると、乾燥きみになり表面に黒色の細粒点を散生する。これが柄子殻の頂部で、降雨などでぬれると、内部から橙黄色糸状の胞子角（柄胞子のかたまり）を噴出すること。

それが、枝フランはたちどころに枝をくるとまきこむと、その先の枝全体が、葉もろとも枯枝になり、胴フランは太い幹でも二、三年でまわりをひとまわりすると、大樹すっかり枯木になる。

そこで、フラン病防除対策としては、早期発見につとめ、枝フランは切りとって焼き捨てる。胴フランは外科手術をする。手術は患部を全部削り取り特殊な殺菌剤をぬる。しかし、菌の転移する率が多い。そして、なによりも有効な治療は、りんご生産者間で考案した「泥巻き方法」である。

さきほどのバケツの泥を患部より少し広くなりつける。ビニールで包帯し、どんなに強い風雨にも落ちないように、ひもで数ヶ所を巻き、ゆわえつける。

そして、その翌春、ビニールの包帯をとりかけて見ると、なんと、さすがの悪質病も絶滅し、樹皮が新しいカルチを形成している。現代の進んだ科学でも、その説明は出来ない。そうだが、泥の功德はまことに不可思議というべきだろう。大自然の能力もまたはかり知れないものがある。

りんご農家は土にフラン病菌を食べる善玉の菌が居るおかげさまだと信じている。

津軽のりんご園には、大相撲の若の里のように、白いテーピングをしたりんごの木がたくさんある。それは泥が自然の神秘な能力を人間にアッピールしているように思われてならない。

苗香のむ

宮西弥生選

これからを拾う西国への切符

辞書を引く流されまいとして流れ

まな板の薄さよ生きすぎたかと思う

シャネルの口紅老人の日のプレゼント

鶏頭の赤に仏も若返る

火を持てばスプリングラー作動する

まるくまるく生きて自分がなくなつた

冷たいが保証人にはならぬ主義

流れ星失恋の果てかもしれない

口答えしてくれる子がいてくれる

ジリジリと焦げてしまった夏の地図

宇宙からみれば地球は罪の星

秋の天男心が落ちてくる

女傘だんだん小さく折りたたむ

無芸ではないよ笑顔が素晴らしい

リストラのパバの役するおままごと

お野菜にほんとにあなた岐阜生まれ

時間的ゆとりがあつて淋しい日

炎天の木陰は神のたまものだ

寝屋川市 森 茜

岡山県 矢内寿恵子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 福本 英子

鳥取県 土橋 睦子

和歌山市 川上 富湖

大阪市 神夏磯典子

米子市 石垣 花子

出雲市 園山多賀子

堺市 志田 千代

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 福井 桂香

大和高田市 鍛原 千里

吹田市 山本希久子

藤井寺市 太田扶美代

鳥取市 坂田和歌子

寝屋川市 平松かすみ

鳥取県 西原 艶子

西宮市 西口いわゑ

ちよつと背を押して下さい踏み出せる

友を褒める言葉ばかりが耳につく

古希の坂曳きずるものが多すぎる

ガーデニングへ年金の花咲きました

花は命毎朝つばみなでてやる

おしくらまんじゅう真ん中にいる時の人

奥さまによろしく妻にも読む権利

あなたというだけでやさしくなれそう

ドアに鍵すると素直になる心

枯れてない証に赤い実が覗く

墨壺へ柏手を打ち宮大工

新しい風と出合った夏の街

傘の中二人は別のことと思ひ

桜貝いつまでつづく潮騒か

二世帯にして中心がずれてくる

雷鳴の中でストレス散華する

眉を描きおんなが癒す傷のあと

少し笑つて見ようからし効き過ぎた

指五本みなそれぞれの役を持ち

ぐもの巣を顔で払う庭掃除

真直ぐの目に会う空気澄んでいる

仏壇の奥からとんできた叱言

氣遣つたつもりが傷に触れている

脱いだ服今日の私を知りつくす

大輪が咲くと見込んで種を蒔く

芦屋市 黒田 能子

西宮市 奥田みつ子

羽曳野市 吉川 寿美

八尾市 村上ミツ子

鳥取県 さえきやえ

尼崎市 長浜 澄子

八尾市 高杉 千歩

西宮市 門谷たず子

大阪市 稲本 凡子

横浜市 保田 絹子

寝屋川市 岸野あやめ

東京都 後藤 早智

横浜市 近藤 道子

富田林市 藤田 泰子

堺市 矢倉 五月

大阪市 板東 倫子

米子市 林 瑞枝

鳥取県 田村きみ子

鳥取県 岩崎みさ江

倉敷市 井上 富子

西宮市 牧渕富喜子

和歌山市 木本 朱夏

鳥取市 福田 登美

八尾市 生嶋ますみ

和歌山市 玉置 当代

妻の座の心の迷いわかるまい
 アウトドアグズ隣が差をつける
 それは過信死ぬときは一緒だなんて
 三世代ガラス細工に似たくらし
 水たまり跳んで気がつく月の顔
 分数と幾何を離れてから気楽
 世界カクテル酔うて日本忘れまい
 かけひきへおとことおんな熱うなる
 ぎりぎりの選択だった曲り角
 良妻で過ごし素顔を見失う
 夫婦一体なんて所詮は絵そらごと
 得心がゆかぬか雨も雷も
 今頃くと首謀の列に入れられる
 定年のない台所手抜きなど
 ふけたとは言えず深みが出たと言う
 平和というゆとり慣れたおとし穴
 余生とやまだ欲ばりがつづいてる
 おしゃべりの井戸の浅さの哀しさよ
 褒めことば丸めた嘘も少しある
 橋橋といつの日きつと海裂ける
 怒らして母の元気を確かめる
 やりくりが上手になった軽い籠
 そして秋いろんな絆引きずって
 もやもやを海に沈めて夏がゆく
 一筆箋だから気軽にどなたにも

八尾市	井尻	民子
和歌山市	楠見	章子
今治市	野村	京子
島取市	岸本	孝子
米子市	澤田	千春
八尾市	宮崎シマ子	
大阪市	本間満津子	
香芝市	大内	朝子
富田林市	中井	アキ
横浜市	鈴江	純子
島取市	石谷美恵子	
和歌山市	春城	年代
米子市	桜井	千秀
池田市	栗田	久子
鳥取市	録沢	風花
八尾市	高橋	夕花
熊本市	永田	俊子
富田林市	前田	登子
和歌山市	上地	忍
寝屋川市	坂上	高栄
横浜市	田中	笑子
松江市	佐野木みえ	
松江市	銭山	昌枝
愛媛県	黒田	茂代

秋霖や人恋うことの深くなり
 筆跡に燃えるものあり青春譜
 皮肉たつぷり四コマ漫画豪快に
 老人性鬱と何でも片づける
 子のメール彼女の事は書いてない
 締切りのない絵手紙が駆けてくる
 価値観の重さ軽さよ飯茶碗
 幸せと思つて生きる今日の日を
 消しゴムで消せない空気持ちかえる
 四季の花咲いて命と平行に
 残り物だとは気付かせない器
 着飾ればドライフラワーほど寂し

寝屋川市	籠島	恵子
倉吉市	野口	節子
大阪市	津守	柳伸
米子市	鷺見	正子
横浜市	川島	良子
八王子市	播本	充子
岡山県	福原	悦子
尼崎市	内田美也子	
貝塚市	池田寿美子	
和歌山市	吉村さち子	
横浜市	巖田かず枝	
和歌山市	古久保和子	

茜さんの句―万感胸に迫る句。「これから拾う」という奥には作者のすべてを通過したという安堵感だろうか。そして折り返し点を更に前向きに生きる姿が映る人間はやがて仏に還る。完全ではないが、少しでもあやうい人生だったといえる誇りを味わいたい。寿恵子さんの句―知・情・意を兼ね備えた人間ではあるが、悲しいかな、一人では生きられない。だから明日への夢は大きい。「辞書」は分身そのもの「流されまいとして流れ」は右肩上りの生活より自然体で親しみのある句に思う。

日枝子さんの句―普通まな板を眺めても空気のような存在にしか映らないが作者は違う。生活そのものが川柳であるのである。「まな板の薄さ」を人生におきかえたところが妙味である。英子さんの句―微笑ましい句。日本は世界一長寿国。老人ではない先輩たちばかりです。「シヤネルのプレゼント」の発想もピッタリ。老人感覚のレベルも高くなったものです。

野

宮本かりん選



今ちようど花野にいるのかも知れぬ
 逆境に育って来いど野に放つ
 寝転べば空がまあるくなる野原
 野つ原へ出ると仮面が邪魔になる
 仇野の風は極楽探してる
 北の果て原野に鶴の舞う平和
 何時も行く店に野良着で付けが利き
 野に秋を奏ではじめた萩すすき
 減反の枯れ野を癒す秋桜
 妥協など許さぬ風が吹く荒野
 むらさきの野菊にポケットを許す
 風向きも上手に読んでいる野ばら
 野の花に誘われて行く万歩計
 うんうんと老婆の野暮用きいてる
 夕焼けが一緒に走る草野球
 野心一つ抱いて男は野を駆ける
 風の靴履いて少年野を駆け
 生きている実感野原走り抜け
 負けず嫌いの野性ときどき損をする
 梵鐘を荒野で聞いた孤独感
 野母のすっぱさ夢はまだ続く
 野火走ることも老父歟をふる

季節感薄い野菜の愚痴を聞く
 いくさもつ果てた野に立つ影法師
 最果ての野末に眠る兵の骨
 野次馬が解説してる事故現場
 野次馬が走る私も走ってた
 野ざらしにされて風化を待つ噂
 身の程をわきまえて咲く野のスマイレ
 野に降りた男の顔がまるくなる
 頂点に立てば視野から友が消え
 視野少しずらしてあなたとの御縁
 野心も捨てた男の無精ひげ
 棒グラフ伸びて野心をふくらます
 胡瓜のトゲなすびのトゲの野性かな
 喰い過ぎた野仏も居る村祭り
 逝く秋の枯野へ風の挽歌さく
 佳

俊路 たず子 富子 倫子 太輪 靖雄 岳水 清史 強一 緑良 鉄治 重人 高夫 正剣 寿美 日枝子 久仁於 夕花 孝雄 雅城 扶美代 天 軸 吉田あずき

出 会 い

高田美代子選



一期一会のえにしに開く秋のバラ
 禁断の木の実に触れた火の出会い
 夕立の傘がとり持つ初対面
 縄のれん互いに酔っていた出会い
 いい出会い互いの鈴が鳴っている
 ハナハトの出会いが今も続いている
 偶然の出会いはいきつと神の使者
 出会いたいひととは来てないクラス会
 偶然に出会った事にして旅に
 羽ばたいた矢先に出会うつむき風
 こんには赤ちゃん孫を待つばかり
 出合いから大阪弁で意気が合い
 久し振りの昔話の繰返し
 笹舟がようやく出会う母の海
 ふい出会いそれから続く名コンビ
 ようと来て萩の満開に出会い
 酒もよし私を叱る人に会え
 妻だけが出会った場所を覚えてる
 感情に溺れてみたい日の出会い
 海へ出る流れがあなたとの出会い
 吉野山の民話と出会う柿すだれ
 今朝の出合いに咲いている彼岸花

たず子 みね 岳水 庸佑 登美 仁緑 権悟 志洋 妻高 高智 早夫 克治 美子 洞庵 シマ子 一風 セツ子 章久 螢

初対面筋に響くこの出会い

ひょんなところで出会い一生道連れに

草もみじはんなり出合ふ散歩道

ときめいて十色の風と出合ふ旅

いい出会いだったと思う事にする

服少し光らせ老いの出会いなり

あこがれの才女と出合ふ日の火照り

ドナーカード一期一会を期待する

人逝つてからの出会いが重くなる

数知れぬ出会いよ地球せまくなる

一生を決める出会いとなつた駅

松園の女を酔わす絵に出合ふ

すばらしい出会いと思う花ことは

出合ひから続く悟りも煩惱も

二学期の席替えからの年賀状

佳

盃に体温のある人と逢ふ

独身のときに出会いたかつた人

初対面笑顔ばかりを見せておく

それから長いバズルとなる出会い

いい出会いでしたと灰にされてから

人

も一人の自分と出合ふまで歩く

地

出会いから別れへ四コマのマンガ

天

花の名を尋ねた日からお友達

軸

風船を一つ飛ばして待つ出会い

願う

池田善守選



子の幸を願ひ老母は過疎に住み

願ひごと護摩木にお経燃えさかり

欲をすて小さな願ひ古希だから

神さまも困る願ひを絵馬に書く

千羽鶴千の願ひがぶら下がる

ガンとボケ寝たきりにだけならぬよう

お願ひを言う間もなく流れ星

家内には知られて困る願ひ事

石畳念願届けと百度石

満願に飛翔させたい千羽鶴

千の掌の仏も願ひ手に余り

もう一度亡母さんの肩叩きたい

歳重ね親の願ひが見えてくる

願つても神はお初穂ばかり見る

多過ぎて絵馬はみ出した願ひごと

七夕へこの世の願ひみな吊るす

核反対平和を願ひ鐘を撞く

虫のいい願ひに神も苦笑い

晩酌を妻が願ひを添えて注ぐ

満願の森から届く神の声

願つてもない拝謁の報に沸く

ご破算で願ひましては新世紀

願わぬに七難八苦与えられ

子の幸を願つて暮らす母の数珠

どちらかが介護を願ふ二人きり

もみじ手のおちようたいにはかなわぬ

施設の子願ひは一つお母さん

妻の歩に合わせ健康願ひ喜寿

菊の花一ひらずつに願ひこめ

幕引きの無事を願つてゐる黒子

お願ひします千人針の頃想ふ

古希いまだ十指に余る願ひごと

願かける母の背中のまるいこと

羽繕ひ親の願ひは遠くから

来世も一緒に願ふ夫婦旅

お地蔵さんへ母を頼んで里を出る

樞打つ石は成仏だけ願ひ

佳

塩加減妻の願ひがにじみ出る

地に伏してお願ひしてる花の種

短冊の重さに笹がしなつて

絵馬堂で渦を巻いてる願ひごと

子等の名に親の願ひが満ち溢れ

人

願ひ事減つて人間丸くなる

地

極楽へ出した願書に沙汰がない

天

幸せを願ふ干し物膝に載せ

軸

子の思い親の願ひと噛み合わず

洋

俊子

さち子

たもつ

正剣

柳弘

タミ

たず子

吉之助

寿美

宏

緑良

美也子

洞庵

勝視

あずき

洋

満秋

鉄治

周信

大輪

孝雄

渡邊伊津志

初歩教室

題 一 声

吐 田 公 一
はん だ きん いち

この間初歩教室の方からお電話があり「私は主婦として世間狭く生きてきたので、自分の生活体験からしか作句できない。創作なんてとても無理なんです」という内容でした。

平成十一年八月号でも述べましたが、実感句「自分の体験（生活）を通して作句されるのが最もいいのであって、これこそその句を読まれた相手の琴線に触れることは確かです。創作句は所詮創りものであって、時の経過と共に薄らぐのが常のよう。ただ実感句の中にも技術的な面での創作ということは時に必要なことです。多くの川柳を読まれることによって次第に学ばれることと思います。いいご質問をいただいて感謝いたします。

添削句

○声出してごめんさいとやっと言う 省 子
単純に表現しすぎ。少しひねってみると

▽ごめんねの一言出ない意地っ張り

○かけ声で身体の重さ支えてる 美寿子
重さ支えてるの表現が説明的。少しユーモラスに

▽ドッコイシヨ立ち居に声のいる体

○雨上り物売りの声よく響く ふ み

表現の順序を入れ替えてみると

▽物売りの声よく通る雨上り

○あらあなたトーンを下げる妻の声 山 雅 子

甘えてる姿だと分るが、ドラマ的には

▽午前様ヘトーンを上げる妻の声

○補聴器が大声で話す内緒ごと 一 典

同じ内容を

▽補聴器の内緒話が大きすぎ

○待ちわびた産声元氣三代目 四 三 郎

待ちわびたが冗長。むしろ元気を強調するように詠めばいいのでは

▽産声は元氣いっぱい三代目

○無理するな一服せよと亡夫の声 政 子

中七の表現に推敲を重ねて欲しかった。

▽無理せずに休いとえと亡夫の声

○朗らかな声する子等へ思う老い タ ツ エ

下五を削除して一点に絞り込むと

▽朗らかな声が聞こえる孫の部屋

○天の声今暫くと言うばかり 宗 明

下五がなおざり。具体性に乏しい。

▽改革へ今暫くと天の声

○秋の夜にヒソヒソ声で何話す 篤 子

見付けはいいが、下五で台なしになっている。

▽ヒソヒソと秋の夜長を噂など 宏 子

○亡き父の声聞えた子に説教 宏 子

聞えたが蛇足。亡父の声で代役がわかる。

▽甲斐性ない子を叱咤する亡父の声

○難聴のせいでと愚痴る声のがし 美 恵 子

句意は分るが詠み込みすぎ。あつさりとは

▽難聴が大事な声を聞き逃し 山 平

○消費者の声が聞える美味い店

▽口コミで立て込んで美味い店 山 平

○時々電話で声の核家族 煩 悩 児

無理に声を入れようとして句が壊された。

電話で声がわかる。

▽ときどきは電話だよりの核家族 サ ト 子

○使命感集めた意見お上まで

お上は今では死語に近い。川柳であるから

▽民衆の声を政府に届けたい

○赤ちゃんが泣く嘆びに判る母 輝 夫

順序を入れ替えると意味がよく分る。

▽泣き声で赤児の叫び判る母

○大声は地です悪人ではないよ 美 弥 子

説明句といえる。特に下九音字がー。

▽善人で地声大きい父である

○精一杯応援をして声囁らす 敬之介

上五が冗長。応援の内容を具体的に。

▽草野球孫の応援声も囁れ

○声聞けば眠った煩惱目をさます 民子

眠った……目を覚ますに無駄がある。

▽あの声を聞けば煩惱目をさます

○無事帰国聞いて涙の電話口 つよし

創作になるかも知れないが、帰国よりもこ

こは強調する言葉を一。

▽無事解放聞いて涙の電話口

○大声に知らん顔する古女房 円女

古女房の表現も古い。できれば現代用語を

▽大声も聞こえぬふりの老いた妻

○姉の声母にそっくり暖かい 志津香

○姉の声やさしい口調が親譲り 志津香

姉の声で二句。一句は着想を代えて欲しい。

▽口調まで亡母に似てきた姉の声

○声量がやはりカラオケ歌わせる 邦昭

やはりは不要な言葉。

▽声量がありカラオケに熱をあげ

○いつまでもわだつみの声忘れない 純

忘れない老妻を詠み込むといひのでは

▽わだつみの声耳底に残る老妻

○声援の後押しされてゴールイン

てにをはの添削

▽声援に後押しされてゴールイン

○ここだけの話に声が小さくなり 春江

表現力に欠けている。

▽ここだけの話に耳が寄ってくる

○自己新へ母の声援背中を押し 方子

特に下五は大切で、下六は語呂が悪いので

避ける。背を押すとすれば下五に

▽声援の母へ自己新ブレイセント

○立つ座るよつこいしよの一声と 洋子

表現が中途半端 美寿子さんの句と類似。

▽立つ座る一声なしに出来ぬ腰

○カラオケで艶を出し合う恋の唄 美也子

見付けは実がいい。表現もいい。惜しむら

くはカラオケにある。

▽デュエットで艶を出し合う恋の唄

○自信ない発言せめて声高に 肋骨

逆の観点に立つと（単純に）

▽オドオドと自信なさそな小さい声

○大声で呼ぶな私は側にいる 美智子

この場合、命令口調は避けて

▽側にいる私へ声が大きすぎ

○応援の声むなしくてビリを行く よしこ

発想を変えてみると

▽ビリの子へ声援が湧く運動会

佳句

声だけはかけて手伝わない夫

選挙すみ声なき声は忘れられ

カラオケの一人音痴のかい声 勲

声の似た親子と知らずラブコール

（左の三句は類想句が多かった）

地声大きく内緒話が洩れて行く

見送りの声詰まらせた母の顔

同点に声援が湧く甲子園

天の声赤絨毯が消してゆく

笑い声こぼれ夕餉の灯が点る

頼もしい親離れする変声期

鼻唄の出ている今と無理をいい

奥からの鶴の一声効いてくる

子の声が真直ぐ届く盆の風

電話口大きな声の内緒ごと

注意する声聞き入れぬ事故悲し

辛さを濾過したような丸い声

声かかるうちが花よと無理をする

呻き声聞えてますか地球病む

声かけて欲しいハワイで焼いた肌

泣き声が聞える電話には弱い

（電話の声多かったが）

電話から声が若いとおだてられ

（ユーモア性がある）

畑仕事声がかかってひと休み

（軽みの句）

私の句

核保有神の怒りの声がする

梓

羊子

民子

和可

嘉信

泰雄

芳江

彰雄

國八重子

知華子

五月

てる子

彩子

一步

美子

勤

幸枝

智加恵

よし子

第5回 川柳塔まつり

役員会・同人総会

恒例の第5回川柳塔まつりは10月9日・10日の二日間にわたって、大阪市天王寺区のホテル・アウィーナ大阪で開催された。

はじめに第2回役員会、続いて平成11年度同人総会が9日午後1時から開かれたが、役員会には常任理事・相談役・参与・理事ら34名が出席、橘高薫風主幹からあいさつの後、全員が自己紹介を兼ねて意見を述べ合った。

同人総会は58名が参加して午後3時から開会、河内天笑理事長を議長に選出して議事に入ったが、橘高薫風主幹はあいさつの中で、10日に鳥取県川柳大会があり、主幹が選者に予定されていたため、記念句会の前日に同人総会を開くことになった、と川柳塔まつりが二日間にわたったいきさつを述べ、出席した新同人の紹介が行われた。

議事では、はじめに前たもつ企画事業部長が平成10年度の事業経過報告を行ったのに続いて、西出楓楽同人部長から同人・誌友の拡大状況を報告、岩佐ダン吉会計部長が決算報

告、榎本吐来会計監査が監査報告を行った。

次いで質疑応答をはさんで大内朝子企画事業部副部長が平成11年度の活動方針、神夏磯典子同人部副部長が拡大計画、宮崎シマ子会計部副部長が予算案、中原比呂志総務部副部長が規約の一部改正、板尾岳人副理事長が新役員の選出について提案した。

活動方針（活動計画）としては、東大阪カルチャー教室が10月28日から発足すること、第5号を迎えた「こんにち川柳塔です」を全国の役員・同人の参加で充実発展させること、仲間づくり委員会を拡充し、新年度の目標は同人60人・誌友120人とする。また、常任理事の研修会を開き、「同人名簿」の補充版を作成すること、編集部では広く柳論を募集し、内容の充実を努め、新年から背表紙に紀元表記を加えること、本社句会の句会費を11月から1000円に改定し、初参加者に記念品を贈呈するなどが提案された。

規約の一部改正は、常任理事会の機能を強化するため、相談役・参与の参加を要請するもので、「4 役員」に新たに(5)の項目を付け加え、「相談役、参与は、必要に応じて常

任理事会に出席し、意見を述べる事ができる。ただし、議決に加わることはできない」とするものである。

これらの報告・提案をめぐる質疑・意見発表では、田中正坊氏が二賞選考方法を再検討し、改善すること、山本三郎氏が同人推薦の基準と手続きについて、吉村一風・石原靖巳両氏からは会計の処理について発言し、河内天笑理事長はじめ各担当常任理事から答弁の後、全議案を満場の拍手で採択し、奥田みつ子編集部長が閉会をあいさつを行った。

■事業経過報告

事業

10年10月7日 第4回川柳塔まつり（同人総会・各賞表彰式・記念句会・懇親会）をホテル・アウィーナ大阪で開催

同 11月14日 川柳塔碑合祀法要（高野山大霊園、合祀者8名）

11年1月 二賞（路郎賞・川柳塔賞）選考方法改定

同 2月22日 木村あきと叙勲記念句会を開催（白鳥町公民館）

同 3月20日 川柳塔創刊75周年記念川柳大会を開催（アウィーナ大阪）

同 4月6日 むらくも創立50周年記念大会（サンチエリバーホール）

同 6月6日 『川柳からつ』200号記念

同 7月 句会(唐津シテイホテル) 一路賞・各地柳壇賞の選考委員交替

同 9月5日 麻生路郎師句碑建立50年記念 第51回西日本川柳大会を開催(久米南町中央公民館)

受賞・表彰

川柳塔6賞(平成10年10月号に発表)

富山ルイ子 本社句会月間賞永久保持

政岡日枝子 N H K 学園全国川柳大会秀吟賞

林 荒介 同

藤田 泰子 第5回全日本川柳誌上大会 N H K 会長賞

川上 大輪 第4回オール川柳賞準賞

木村あきら 選挙管理事務功労により勲五等瑞宝章受賞

櫻庭 順風 教育功労により勲四等瑞宝章

句集等刊行(13)

奥田みつ子川柳句集『白い梅』

森井 菁居川柳句集『愛すれば』

八木 千代川柳句集『椿守』

月原 宵明川柳句集『しまなみ』

麻生路郎・橘高薫風川柳句集『師弟』

川上大輪・川上富湖川柳句集『二重奏』

黒川紫香川柳句集『地球の塵』

田中正坊川柳句集『ペンシル』

恒松 町紅句画集『愛たしか』

法岸寺竜太(野村太茂津)随筆集『点滴』

橘高薫風編『なにわ川柳―この一句』復刻版

橘高薫風監修

『川柳カタカナ語辞典』

田中正坊 編

三宅 保州『川柳入門Q&A』

合同川柳句集『もくせいⅢ』もくせい川柳会

句作者(8名)

柳楽 鶴丸 平成10年11月12日 70歳

内芝登志代 平成11年2月8日 84歳

上田 柳影 同 2月20日 88歳

森川まさお 同 2月27日 81歳

吉岡 民平 同 3月2日 81歳

水田 美房 同 5月7日 70歳

矢野 佳雲 同 5月31日 82歳

本田恵一朗 同 7月6日 92歳

■新 同人(26名)

徳田ひろこ(鳥取市) 奥谷彩子(鳥取県) 徳

山みつこ(羽曳野市) 楠昭子(藤井寺市) 鈴

木政子(枚方市) 森村美花(交野市) 山本柳

昌(奈良市) 山本蛙城(泉佐野市) 中後清史



主幹するあいさつ

(和歌山県) 樋口輝夫・宗水笑・井上勝祝(唐津市) 井伊東吉(岸和田市) 長谷川淳(西宮市) 神庭詩郎・門脇晶子(米子市) 安達はじめ(大阪市) 唐住実(箕面市) 北野哲男(三田市) 岸田知香子(豊中市) 小野句多留(横浜市) 北村賢子(東大阪市) 太田扶美代(藤井寺市) 田辺鹿太(尼崎市) 山下省子(横浜市) 西村りつえ(羽曳野市)

■新 役員

常任理事 三宅保州
理事 石原靖巳・鶴田遠野・小林周信・江口 度・吉川寿美

〈同人総会出席者〉岩佐ダン吉・西出楓楽・前たもつ・西口いわる・宮西弥生・河内天笑

神夏磯典子・河内月子・大内朝子・鶴田遠野

山本義子・奥田みつ子・板尾岳人・稲葉冬葉

宮崎シマ子・桜井千秀・長浜澄子・芳地狸村

内海幸生・西田柳宏子・橘高薫風・海老池洋

高須賀金太・菱田満秋・高杉鬼遊・板東倫子

田中正坊・中原比呂志・天正千梢・榎本吐来

山本希久子・山本三郎・藤村あ女・玉置重人

藤井明朗・春城武庫坊・吉村一風・坊農柳弘

塩満敏・篠原いつふみ・福田満州・北山隆盛

北畑金治・石原靖巳・長谷川淳・般若哲男

三宅保州・井伊東吉・山本蛙城・岡本久峰

唐住実・川島諷云児・河井庸佑・石森利昭

時広一路・森井菁居・中後清史・小池しげお

(58名・順不同)

各賞表彰・記念句会

川柳塔まつり二日目の十日も快晴の一日であつた。十時開場のホテルアウィーナへは、遠来の人も含め、早くから参加の人で、たちまち満席となる。出席者は二百四十名。

午後一時から、高須賀金太氏の司会により表彰式・記念句会の幕明けとなる。

始めに橘高薫風主幹の開会の挨拶がある。要旨は、麻生路郎師存命の頃、毎年七月に師の誕生日を祝して川雑まつりを催していたの思い出し、主幹になった年から、川柳塔発足の十月を期して川柳塔まつりを開催することとし、五回目を迎えた。

これからは地方の時代と言われているが、川柳塔も、大いに地方の活性化に期待している。何分自分の体調に限界があり、あと二年の任期は全うする所存であるが、一層の地方の御支援をお願いして、体制を強化し、次代へ引き継ぎたいと思う。今日は一日まつりを存分にお楽しみいただきたいと結ぶ。

祝電の披露に続き、平成十一年度各賞表彰式へと移る。板尾岳人副理事長の司会で各地柳壇賞・一路賞・茴香の花賞・澎湖賞に続き川柳塔賞と同準賞・路郎賞と同準賞の受賞者十名に薫風主幹から賞状と楯が授与され、各関係団体から花束が贈られた。

・次いで新同人26名の紹介がある。西出楓楽

同人部長より記念品が手渡された。

まつりのメインイベントである記念句会は二時より開催され、予定通りの進行となり、山本希久子の閉会の辞により締めくくられる。月間賞は奈良市の米田恭昌氏に輝く。

(記名) 月子・いわゑ・澄子

(清記) 楓楽・希久子

兼題「つかむ」

川上大輪選

八十歳つかんだ恋だ手放せぬ
一輪車コツをつかんで帰らない
掴んだらつかみ返してくれた手だ
掴んでもつかんでも逃げてゆく銭
裏の裏歩いてよいとこだけつかむ
つかみとり余分な欲がこぼれている
吊り皮をつかみ戦に耐えている
スクープを掴んだベンが止まらない
人前でスカ掴んだと言うておく
今日という日をつっかりと掴みたい
天辺を掴むつもりで塾通い
にぎり飯つかんで策を練りなおす
つかまえてみたならそれ程でないお人
愛してるあなたをつかむ五寸釘
大空をつっかりつかむ深呼吸
つかんだら放さん母の形見分け
つかんだら負けず特価品
キュービッドの矢が掴めずにまだ独り
男一匹どじょうがつかめない
魚拓まだあの快感が手に残る

路児 保子 多喜 金太 弥生 文一 壺 保州 つづや 季穎 てる ますみ まこと 月子 セツ子 澄子 典子 雅文



主幹と受賞者のみなさん

ボランティア軍手で満足感掴む
輪をちよつと抜けると答つかめそう
チャンスだがつかむ力が出来てない
ミヨチャンにわざとつかまる鬼(っ)
お日さまをつかんでからの孤独癖
よくもまあ私掴んでくれた人
つかむものつかみ逃げ道考える
お人好し無ければつかんでいた出世
リハビリに耐えてつかんだフルムーン
絵に画いた餅で固さがつかめない
つかみ易いところに妻の手があつた

一 路 楓 文 秋 治 克 半 民 重 人 哲 孝 武 庫 坊

無になつてつかんだ愛という器

リンゴ一つ掴むと重さわかる手だ

マジックハンドで掴む夫の首根つ子(和)

手の届く高さではいいものつかむ

幸せの端をつかんで生き延びる

きつかけをつかむ切符は二枚ある

ここ迄は努力であとはつかむ運

きつかけをつかむ小石を投げてみる

いい役を掴んだ死んでなるものか

つかんでいる物を時々確かめる

側にあるものをつかんだ豆の蔓

手の平でつかめるだけの幸でよい

何つかんだかライバルのうす笑い

大物の急所をつかむのは女

カスばかりつかみ花道からはずれ

肩書をつかんだ女子を産まず

原爆の雲をつかんでいるドーム

皮下脂肪つかんで恨む秋の味

嫁はんや思てつかんだ男の手

つかまえた獲物にエサをやりすぎる

かまきりの足が男を放さない

佳

天高くつかむと怖い皮下脂肪

間違えて貧乏神の手を掴む

秋風をつかむと旅がしなくなる

UFOキャッチャーでつかんだ男飼っている

てのひらに星をつかんだ跡がある

人

一握の砂をつかんだ似非詩人

優子

啓子

和子

紀美女

夕花

勇太

晋吾

たず子

良子

恵子

美代子

ダン吉

寿美子

波留吉

笛生

日の出

茂美

いつみ

哲平

千里

五楽庵

賢子

小雪

治代

富湖

朱夏

恭昌

虹掴むまでは片眼を開けて寝る

地

天

太陽をつかんだ僕のクレヨン画

軸

ばかばかしい話でつかむ客の耳

兼題「時計」

森居青居選

時々は狂う時計に助けられ

定年の時計あやしくなるリズム

人恋し目覚し時計かけておく

思い出に耽つて亡父のロレックス

鳩時計取り残された子供部屋

幸せの靴音を待つ花時計

いのち賭けるレーサー時計信じ切る

遅刻した言い訳時計振つてみる

美しい薔薇と心中した時計

あれからは目覚ましをかけておく兎

残業のノルマに耐える腹時計

愛不変時計も変りなく動く

時計には負けない母の朝がある

正確な時計で脈を看てくれる

秒針が刻む別れがそこにある

限りあるいのちを思う砂時計

時計より確かな妻と居る疲れ

ペアウオッチ時差がうまれた七年目

神の時計にゆだねのびのびと暮す

難問へ時計の針が早すぎる

乾電池抜いて時計を黙らせる

霜石

みつ子

博泉

仁清

千梢

庸佑

潤子

吐来

寿子

章子

森子

直子

千秀

一路

メ女

章峰

いわゑ

正坊

晋吾

隆盛

亜成

一壺

富湖

無人駅時計忘れたことを悔い

それからのことは知らない花時計

時計より早く起きたら叱られる

叩いたら動く時計が捨てられず

時計台雪降る街が静かすぎ

駅裏の時計があくび繰り返す

充実の一日 時計も見ずに寝る

時計戻して初恋の詩をよむ

ティールタイム時計を持たぬ主婦ばかり

待つことをおしえてもらふ時計です

鈍行へ駅の時計が温かい

鳩時計壊れかえらぬ子がひとり

お医者さんが時計を見る終りだな

逢っている間は止まっている時計

間の抜けた目覚しが鳴る日曜日

リストラの父の時計が狂い出す

アンティーク時計乱歩の世界だな

千円の時計が僕の腕にある

花時計弱い男が多すぎる

夢を追う旅で時計は持たず行く

目覚し時計という約束をして眠る

音のせぬ時計に積もる不信任

花時計来ぬかも知れぬ人待つ

紫で飾つてほしい花時計

狂わない時計が俺に指図する

天才が持つ秒針のない時計

忌の明けた妻の時計がまだ動き

巧妙なアリバイ崩す時刻表

古時計時とき死んだふりをする

まさと

義

鹿太

はじめ

ツネ

五楽庵

求芽

金太

シマ子

信子

(和)子

朱夏

大輪

としを

春蘭

民子

茂美

重人

武庫坊

みつこ

良子

一枝

茂雄

楓云児

睦子

幸生

澄子

治代

天高し正確に鳴る腹時計

ペアウオッチひとりになりたがつている

佳

十二時を回る言い訳考える

時どきは逆さに回りたい時計

夢工房青い時計に針がない

正確な時計を持って遅刻する

決闘が終り時計が動き出す

人

腹時計一本杉と昼にする

地

ネクタイと時計外して風になる

天

五百羅漢へ時計止つたままの秋

軸

ロレックスはめると起きる不整脈

兼題「人柄」

小寺花峯選

輪の中に入つても入れるお人柄

人柄に甘え背いてばかりいる

人柄の正味なかなか分からない

人柄がほんのり匂う一行詩

人柄の境界線に四合瓶

返信の切手を添えて来た便り

ピラニアを飼う温厚な顔をして

人柄の良さポケットの石撫でる

顔とカネに惚れ人柄に目をつむる

墓場まで人柄惜しむ長い列

おだやかな人柄過去を語らせず

かりん
あかり

満江

希久子

哲子

満秋

しげお

慕情

剛治

萬的

萬的

萬的

萬的

萬的

萬的

萬的

千寿子

泰子

正坊

りつえ

重三

直子

季穎

英子

二三

弥生

茜

人柄を見込んで金を借りにゆく

やんわりと打つべき釘は打つ上司

ハンドルを握るとこわい顔になる

ぼつぽ屋の人柄に似た父の背より

人柄が良いと言われて病むレモン

人柄を涙と共に読む弔辞

懐の深い夫の波静か

らせん階段人柄少しずつ見える

人柄は申し分ない貧乏たれ

コスモスの線の細さに騙される

口下手な人で保険がよく取れる

距離おいてからでは遅い和解説

人柄が敏感になる恥ひとつ

お人柄までも出雲の神にされ

人柄に幅が出て来た回り椅子

若者を見直すドナーカード持ち

シャネルからスマイルに変わるお人柄

人柄が重い荷物をまた背負い

人柄を貧乏神に見込まれる

その人がくると空気がまるくなる

底辺に流れ人柄丸くなる

ポケットのものをくささるお人柄

思わざる人柄がでる酒の席

人柄に見切り発車の娘を許す

座るべき人が座っている安堵

人柄が匂う和服の色模様

人柄の仮面褪せると塗り替える

変り身の早い人柄とは知らず

竹割った気性で塩を送られる

シマ子

義子

ますみ

朝人

岳人

順風

寿美

希久子

天笑

澄子

靖巳

冬葉

雅文

一路

五楽庵

保州

ツネ

満江

慕情

多喜

章峰

克治

民子

重人

利武

茂雄

霜石

お人柄誉めているのに犬が吠え

窓際の椅子で真面目にやってます

よろけるが道をたがえぬお人です

お人柄鏡のような文もらう

大写しされて人柄崩れ出す

人柄にみんながホツとして笑う

風雪に耐えて人柄やわらかい

人柄は推し計れない片ピアス

毒舌もジョークで通るお人柄

白黒をはっきりさせたいお人柄

国訛り抜けぬ男を信じよう

人柄は坂の途中で入れ替える

実直な人柄見抜く初対面

人柄は犯人らしくない犯人

結局は周りの人が支えてる

リストラに人柄変えたはしご酒

村中に花を咲かせている無口

八十点という人柄に従いてゆく

人柄をそっくり変えて玉の輿

温厚な人柄敵をつくらない

佳

わたくしという人柄をさがす旅

保母の目に良い子わるい子普通の子

童顔で海の匂いのする男

白たびの白に成り切るお人柄

人柄を透かすと過去が見え隠れ

人

人柄については触れぬ紳士録

まさと

美代子

鬼遊

とし子

アキ

信子

公子

美津子

房子

紀美女

富湖

扶美代

庸佑

正美

博泉

春

あかり

桂香

計光

晋吾

晋吾

緑良

仁清

みつ子

治代

楓楽

洋

地

人柄の良さを食べ尽したピエロ

森子

天

人柄も煮込まれている母の味

風云児

軸

人柄がたかが二合で変えはじめ

兼題「おかしい」 原 章峰選

おかしいと思った時は負けていた
脳みそにたくさん微が生えてきた
おかしいなお巡りさんがつかまつた
何かある妻が電話を持ち歩く
おかしい目で見ないで私まだ奮
おかしくて哀しい母の物忘れ
妻の留守少しおかしい朝の音
鼻ピアスおかしい奴に牛が会い
おかしい時おかしい顔を上げて
おかしいもの見たくてぞろぞろつてゆく
風が吹く度におかしくなる噂
何もかもおかしい生きていることも
電源を入れず故障と叩いてる
人間の賞味期限がわからない
おかしいな事なくても家計簿は赤字
借金はなくとも家計簿は赤字
他人から見ればおかしい夫婦です
知らぬ間におかしい癖がついている
何かある妻が朝から低気圧
冗談をまじめに聞いて走り出す
コンクリ落下おかしいだけですまされぬ

一 壺 満州 茂美 波留吉 夕花 蛙城 多喜 鐘造 正雄 半銭 満秋 剛治 武庫坊 度

古希すぎて頭おかしくなってきた
いろいろの顔がおかしい化粧室
インターネットへおかしい薬まきれ込み
おかしいな忘れ上手な風が吹く
親よりも大きな雛を抱えこみ
おかしいなお酒の量が減りだした
三人が寄るとおかしくなるはなし
置きぐすりおかしい話聞いている
エブロン端でおいしさふいている
ワントンポ遅れておじいちゃん笑う
あの人がすり寄ってくる何かある
ボロボロに裂いたおかしいニューモッド
ドクターもナースも急にやさしなる
札束を見ると人間おかしくなる
引き出しに私の知らない鍵がある
年金の暮らしおかしくなる小声
なわとびの縄であつたらおかしいか
大阪弁おもしろい武器を持てます
おかしいのに笑わぬ奴が前列に
おかしいな突くと甘い汁が出る
おかしいなあ妻の化粧が濃くなった
人間のどこかおかしい世紀末
キヨスクでおかしな本を買って乗る
一たすは一は二でないことに突き当たり
檻の中から見れば人間みなおかしい
本当におかしい時の高笑い
半端ではないので音痴うけている
父ちゃんの計算いつも金足らん
叩いてもたたいてもおかしい頭

季世恵 狸村 茂雄 哲和子 千里 美代子 物節子 季穎 久子 とし子 良知 公子 泰子 ますみ 緑良 富子 富湖 恭昌 昌枝 笛生 たもつ 瑠美子 天笑 月子 ダン吉

父の座でおかしい時も父で居る
鷹と鶴おかしくなってきた政治

ちかし 正坊

二千円おかしいことを考える
世の中がおかしくなつて鼻乾く
少しずれてる正論の尻尾
世紀末 鳩もからず同じ色
一本の棒が立っているおかしさ

一歩 しば 森子 桂香 道夫

おかしくて悲しい鬼の面である

高志

和尚さん面白おかしく死ぬ話

俊二

また太る悲しいことがあつたから

霜石

大国主命は出雲弁だった

兼題「五」

高杉鬼遊選

女にも強敵五人おります
五里霧中 松茸がまだ匂わない
五里霧中 靴片方を見失う
五人目の見合いもしつかり化粧する
五分五分の話に耐える腹の虫
逆縁の子と見えてるか五山の灯
敬老日 五百羅漢の列に入る
あと五年生きて介護を頼みます
母ちゃんのとめは五寸釘のごと
お守りの五円玉には手をつけぬ
五体投地ほとけの慈悲にすがりつく

義子 順風 和子 吐来 正子 哲男 英子 仁清 博泉 五楽庵

五山送り火 祈りは深くなるばかり

哲子

もうそこへ追いかけてきた新世紀
かりん

ライバルと追いつ追われつ称え合う

久美子

追い抜いてからは眠たい日が続く
わたくしを追う転んでも転んでも
追いつめて追いつめて恋風になる
追いつめて惨めになったのはわたし
追っていたのは幻でした風でした
追うものは違ふがみんな明日がある
牛追うたのどかな景色知っている
牛追いの詩閉じ込めたアスファルト
回転木馬も追いかけてはしない恋
追う恋のたのしきジェットコースター
ラッセンの海で海豚とロマン追う
追う事に興味忘れた猫の爪
敵がもう追えない所であかんべえ
月は日を日は月を追う会者定離
悟り切れずにまだ追っている蟹気楼
恋を追う獣の性は衰えず
追いかけてならぬ人なり曼珠沙華
逃げ水を追って帰らぬ北の風
遠い夢追ってた頃のハイヒール
厚底の靴では愛は追えませぬ
あさがおの蔓に追われる逃亡者
殉教に似て詩ごころを追っている

住

月子 治代 信子 昌枝 ミツ子 可住 喜美子 大輪 千代 久子 章子 紫香 ちかし 美代子 良子 天笑 富湖 霜石 正子 公子 朱夏 茜

人 逝く人を追うてか月も満ち欠ける 緑良
地 追いつめた沼で開いた蓮の花 とし子
天 時には虎も追いかけられる夢を見る 恭昌
軸 追うことも追われることも無いが恋
懇親宴
懇親宴は四階金剛の間へ移り、五時の予定より15分早く、92名の参加で始まった。司会
は朱夏、柳弘、いつふみさん。乾杯の音頭は
遠来の五楽庵さん。
料理はホテル自信の「錦秋の膳」。銘うつ
てある通り松茸の土瓶蒸、蟹も出て秋を満喫
させてもらった。
今回のアトラクションは、カラオケのみ。
日頃はさぞ練習に余念がないであろうと思わ
れる、プロ歌手並みのノド揃いで、ディナー
ショーの席にいる気分を味わえる。デュエツ
トにはわかコンビにもかわらず、それぞれ
息がピッタリ合っつたりさせられる。
予定の七時がアツと言う間にきて、物足り
なさを感じたことは言うまでもない。ト리는
主幹の「星影のワルツ」で出席者全員手をつ
ないで合唱。万歳三唱後、笛生副主幹の閉会
の言葉でおひらきとなった。

川柳塔まつりへの御感想(アンケートより)
。同人総会と記念句会は同日・同会場を原則
にしてほしい。
。会場及び三人掛けの座席が窮屈だった。
。日程は年初めに知らせてほしい。小句会と
かち合うことがあって困る。
。人々のふれ合いに感動しました。
。盛大な催し今後も行われることを望みます。
。より動員数を増やすため「大きな大会」と
競合しないスケジュールの設定を。
。多忙なために出席できないのが残念。
。人数も多いことですから二句連記よりも一
句にしては如何でしょう。
。駅から会場への地図と電話番号を川柳塔誌
の案内に記載してほしい。
。会場費がかかるなら安い所を探してみたら。
。参加費2000円にして収入増をはかる。
。土日曜は大勢参加できるので良い。薫風主
幹のお話も毎回楽しみにしています。
。普及のために各新聞社に案内を出しては。
。開催日を十月〇日とか第〇日曜と決めて頂
きたい。地方の大会日程が決めにくい。
。初めて参加して皆さんの自信ありげな顔に
たじたじ。雰囲気は上々、満足しています。
。会場が狭く机のある席に座れず残念。
。あたたかい雰囲気で来年が待ちどおしい。
★二賞選考改定・川柳塔社・川柳塔誌への御
意見・御要望は参考にさせていただきます。
御協力ありがとうございます。

参加者

総数二六〇名・敬称略・順不同
当日欠席の事前投句者を含む

大内朝子 板尾岳人 岡本久峰 岩佐ゲン吉
福田満州 一本勇太 森井善居 指宿千枝子
時広一路 藤井明朗 金井文秋 神夏磯典子
寺川弘一 栗田久子 町田達子 中原比呂志
高橋一枝 大橋鐘造 楠 昭子 藤井一二三
松本文子 原 章峰 森 茂美 安藤寿美子
藤村ゞ女 小寺花峯 津守柳伸 長谷川春蘭
新井朋子 米澤飯子 井尻民子 徳山みつこ
小西小雪 山本半銭 秋元てる 西村りつえ
立蔵信子 田中節子 吉川寿美 池内かおり
長浜澄子 都倉求芽 前たもつ 吉岡きみえ
三宅保州 一戸ツネ 板垣草丘 高田美代子
岡あきら 板垣夢酔 伊藤玲子 津守なぎさ
福士慕情 清水潮華 菱田満秋 園山多賀子
藤井計光 海老池洋 志田千代 堀江としを
柏原優子 中後清史 山口美穂 木村貴代子
植嶋一晃 木本朱夏 坊農柳弘 竹内満寿蔵
傍島克治 春城年昭 榎本露児 嵯峨根保子
松原寿子 石森利昭 鍛原千里 西口いわゑ
山崎君子 阿萬萬の 井伊東吉 太田扶美代
山本三郎 菱本 誠 六村晃一 竹治かしめ
寺井東雲 高杉千子 米田恭昌 安達はじめ
西出楓楽 板東倫子 山本義子 門谷たず子
亀岡哲子 石原靖巳 吉村雅文 柿花紀美女
井上俊二 高島啓子 城 多喜

銭山昌枝 櫻庭順風 青山久子 出口セツ子
佐藤治代 鶴田遠野 大川道子 春城武庫坊
玉置重人 村上剛治 清水利武 宮本かりん
芳地狸村 山海友照 中村直子 清水久美子
籠島恵子 中村孝美 谷口 義 長谷川呂万
田辺麗太 西内朋月 杉森節子 上村季多恵
阪本高士 川原章久 唐生 実 小野旬多留
梶本哲平 長谷川淳 丹後屋肇 奥田みつ子
堀端三男 川上大輪 川上富湖 宮崎シマ子
中島正博 河内月子 宮西弥生 山本希久子
宮口笛生 河内天笑 稲葉冬葉 川島颯云児
榎山隆盛 尼れいじ 小玉満江 村上ミツ子
西村 茂 御園孝子 河合茂雄 垂井千寿子
桑原道夫 山本蛙城 牛尾緑良 緒方美津子
神原 文 浅野房子 細川稚代 古川喜美子
桜井千秀 酒井一壺 後藤正一 和田つづや
楠見章子 高杉鬼遊 玉置当代 古久保和子
中井アキ 坂上高栄 榎原公子 川久保陸子
江口 度 高瀬霜石 和気慶子 岸野あやめ
水谷正子 前原正美 石堂潤子 生島ますみ
藤村亜成 佐藤季穎 川端一步 高須賀金太
濱田良知 藤井桂香 小林周信 鴨谷留美子
松永会美 藤井正雄 吉村一風 久谷まこと
福本英子 田頭良子 池 森子 小白金房子
河井庸佑 森下愛論 妻谷重三 神原まさと

高田博泉 吉川晋吉 藤田泰子 小池しげお
田中正坊 角野仁清 大谷篤子 綱木けい子
堀江光子 榎本吐来 天正千梢 瀬戸まさよ
辻川慶子 高橋夕花 山口 卓 田中由紀子
榎本舞夢 中澤昭羅 北村賢子 西田柳宏子
沢田和子 堀 良江 金崎峰子 北岡波留吉
橋高薫風 内海幸生 安永 春 太田とし子
西村梨里 北野哲男 森 茜 平松かすみ
加島由一 岡本花匠 遠山可住 牧渕富喜子
三好寿平 児玉 蛙 北山悟郎 矢内寿恵子
刈田泰司 井上照子 北倉五月 山口三千子
津守市子 伊藤 武 井上松煙 富山ルイ子
黒川紫香 結城君子 波多野五楽庵
岩本美智子 古今堂蕉子 山川日出子
小林トメ子 居谷真理子 澤村猪太郎
和泉あかり 酒井勇太郎 篠原いつふみ

祝電拝受 (敬称略・順不同)

鶴かご川柳社佐藤一粒・川柳塔きやらぼく
月原宵明・越智一水・石倉美佐子

御芳志御礼 (敬称略・順不同)

いずも川柳会 竹原川柳会 城北川柳会
美研アート 堀江正朗・芳子 波多野五楽庵
北畑金治 森井善居 吐田公一 石倉美佐子
都倉求芽 佐藤季穎 稲葉冬葉 池田寿美子
高橋夕花 木本朱夏 西出楓楽 瀬戸まさよ
山本義子 長浜澄子 神夏磯典子
西口いわゑ 山本希久子 奥田みつ子

第一回 吉本川柳没句供養川柳大会

とき 平成11年12月17日(金) 正午開場

ところ 大阪ミナミ道頓堀くいだおれ(5F)

投句締切

11月30日(当日消印有効)

投句料

1000円(全題事前投句・各題2句)

投句先下

54210075 大阪市中央区難波千日前

11-6

吉本文芸館

○参加希望者は投句に参加費6000円を添えてお申込みください。(80名締切・かくし芸出演者は優先)投句用紙 配付用紙またはそのコピー及びA5判に2

題ずつ4枚(万年筆またはボールペン)

都大路川柳社 奥山晴生

司会

挨拶

読経

浄福寺住職

西村哲夫

入選句発表(1時半-3時)

「割る」

喪主謝選 河内天笑

「地獄」

天守閣 板野美子

「倒れる」

都大路 筒井祥文

「美人」

堺番傘 中田たつお

「試す」

時の川柳 平山繁夫

「妬く」

ふあうす 泉比呂史

「裸」

番傘本社 森中恵美子

「強い」

川柳塔 橘高薫風

宴会及びかくし芸(3時-5時)

漫才・手品・物真似・舞踊その他(投句の際に申し出て下さい)

連絡先 下59318305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑(電話072217814706)

第5回「オール川柳賞」作品募集

作品 未発表川柳20句(タイトルをつける)

締切 平成11年12月15日(当日消印有効)

規定 オール川柳の応募用紙、または市販の原稿用紙に住所・氏名・電話番号・年齢・性別・所属結社・柳歴を記す。

賞 オール川柳大賞1名 表彰状・30万円

準賞4名 〃 5万円

奨励賞1名 〃 5万円

佳作30名 〃 5千円

選考委員特別賞1名 〃 5万円

選考委員 大野風柳・岩井三窓・柏原幻四郎

齋藤大雄・尾藤三柳・齊藤俊輔

他に読者が選ぶ選考委員を加える

投句料 2000円(小為替を作品と同封)

発表 「オール川柳」平成12年6月号誌上

及び「オール川柳賞記念大会2000」

応募資格 一切問いません

送り先 〒556-0003 大阪市浪速区恵美須西

2-8-11 葉文館出版内

「第5回オール川柳賞」係

第41回 豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館1Fホール
(阪急宝塚線曾根駅東100メートル)

会費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈)

挨拶 豊中川柳会会長 石川 勝

祝辞 豊中市立公民館館長 山路 茂則氏

お話し 笑福亭仁勇氏

席題 (当日発表) 西川 景子選

宿題 「鉄」 安藤寿美子選

「根」 上野多恵子選

「赤」 長江 時子選

「薔」 北沢 尚子選

「石」 玉利三重子選

「糸」 塩谷 幸子選

締切 午後1時・各題2句・披露50音順

豊中市長賞ほか各題に賞進呈

主催 豊中川柳会・豊中市立公民館

連絡先 〒560-0015

豊中市赤坂1-6-9 石川 勝

電話06-6854-1990

編輯部

人柄が良すぎて人が頼らない

靖雄

観覧車へ誘い世界は二人きり

よしろう

報われないと思う心にはらの刺

千
惠

悲喜こもごも都に果てが来るように

脳内電池切れてきたのかもの忘れ

天と地に抱かれて僕も夕焼ける

秋茄子の色には勝てぬ皿小鉢

誕生日忘れる程に長く生き

踏まれても凹まぬ缶を蹴つとばす

のつべらぼう群れる都会の交差点

百日紅残暑を語る聞いている

禁欲のいろして夏の紫陽花は

文庫本入退院をくり返す

一本の葱の値打ちに負けている

年だなと思う私の影が瘦せている

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

コスモスが一番似合う凡夫婦

コスモスの風にゆだねているいのち

コスモスの一輪を描く部屋静か

コスモスもやはりやんわり自己主張

憧れた都会で黒い空気吸う

馴染めない空気みぞおち重くなる

コーヒの香りにほつとした空気

ダリの絵も酸欠だらう缶んでる

故郷の空気に出会う赤とんぼ

迷いからさめて明日の米を研ぐ

迷ったらきつねうどんにすることに

迷った私を捨てることにする

迷う筈ないとキヤリアを過信する

円満な様子が解る窓明り

苦勞する様子母には伏せておく

一笛

比ろ志

年代

愛

武庫坊

静

昭三

芳子

ヤス子

美子

光穂

正とし

いゝゑ

曙蝶

嘉代子

風云児

みつ子

能子

周信

メ女

たず子

文

正坊

柳宏子

澄子

鹿太

様子見に來ただけ母はもう帰る

様子みに軽く小石を投げてみる

口喧嘩様子みにいくのは私

一人住む老母の様子に気がかかる

台風一過並木もホッとした様子

ただならぬ様子パトカー二台来る

新婚の様子しずかに寝てしまひ

百迄も元気で居てねと孫の声

恵まれていますと言うて愚痴こぼす

月にまだ兎餅つく科学の世

脇役に慣れ隅っこが性にあう

かくれんぼみんなが散った夕茜

雑魚なりに三分の理屈こねまわし

バスの来る方に向かつて待っている

ゆく夏の暑さが残る整理箱

川柳塔おとし

原みさを報

給料日働き蜂が帰らない

給料はなくても温い土がある

給料で働きぐあい加減する

給料日赤ちやううちに足が向く

父さんの給料先ずは神仏へ

給料日ワイフの声がねになる

葉脈の末端にまで情込める

紅葉に山のくらしも冬仕度

しなやかに風をかわしている柳

葉の色を見ながら追肥加減する

木の葉ゆれ恋しい人が会いに来る

葉の波がやがて黄金の波になる

求芽

松煙

義子

江美

比ろ志

直球

晴美

春蘭

トミエ

絹子

美智子

涼子

萬的

しげお

富喜子

舎人

野草

和子

小生

富貴子

仁子

雅通

紀子

孝子

伝住

ゆきの

義弘

黄葉が句碑にやさしい彩を添え

葉桜もいい心明日へ向け

黒星で帰るを明日へ向け

白黒はビデオが決める土俵際

日焼けした顔へ宿題まだ残り

腹黒を癌と一緒に取りました

頂点に立つて白黒ばやけ出し

黒胡麻を煎って赤飯活入れる

ごろごろとしてても腹が減ってくる

長生きの命ごろごろもてあます

ごろごろと流され石の角がとれ

ごろごろと嗽に今日を確かめる

少子化へごろごろ産める暇もない

ごろごろする核が地球儀脅かす

死体ごろごろ地球は今日も病んでいる

みさを

佳句地十選 (10月号から)

清水潮

昇太郎

あづま

希久子

かよこ

きみ子

ミツ子

正美

美代子

風花

邦昭

せつ子

登美

由多香

以和万津

彰雄

敬之介

宏章

艶子

清子

千秋

雄々

黙々

みさを

翠洋会

児玉

蛙報

涼しさをもとめて歩く百貨店

会美

同じ花置き場かえると生き生きし

蛙

お化け屋敷の迷路で借金取りに会い

恭昌

他人よりも長目に浸かる美人の湯

周信

涼しげに着こなす浴衣恋を持つ

正雄

身に覚えなくて涼しい顔してる

宣司

今年ほど新涼待ったことはない

正坊

美人ならあまり喋らぬ方がいい

靖巳

風鈴の涼しい音色暫し夢

照子

涼し気に明治の母の夏羽織

千歩

めがねごしもつだまっときと母合図

蕉子

風鈴に耳をすまして水をまき

千梢

介護保険涼しい顔の犬親子

絹子

すだれ越し老母に涼しい過疎の風

志華子

ほどほどを知らぬ電車の冷やしすぎ

叙子

眼鏡越し猫も上眼で睨んでる

舞夢

同じもの旨いうまいと食べてくれ

日の出

しわかくす役目少しサングラス

伽羅

声美人あなただのこが聞きたくて

春

夫のお金涼しい顔で使ってる

義

同い年に逢うてパワーに刺激され

さと美

美人だと言われ長生きしています

鬼遊

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

振りむけばお人違いの顔だった

江美

じいちゃんの服着た案山子威張ってる

まさ

リストラになった案山子が横になる

和歌子

長くなる影が気になる待ちぼうけ
リダーのふところ次第で部下育つ

鹿太

遊び過ぎずまんと顔に書いてある

哲嗣

汗かきも顔に出ないと損をする

モトコ

ふところの深いあなたを杖にする

亀与子

笑顔あり衝突もあり御興行く

幸子

リストラを考えている回り椅子

イサミ

書いた字がやけに気になる病み上がり

美智子

ふところの炎を見せぬカスミ草

六浦

豊作を案山子と祝う祭り笛

弘治

内と外ふたつの顔がある男

勇次郎

年輪の重さに悩むふところ手

夢之助

草の花一つ覚えて夏終る

正治

働ける欲び顔の汗を拭く

満寿蔵

三世代顔がそろってバーベキュー

澄子

顔見せて喜ぶ老母へ途中下車

十四郎

山里はいいな案山子も景になる

柳宏子

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

方言で主役になった村芝居

友子

クラス会主役の椅子が空いている

米子

今日の主役につける長い口髭

午朗

ドングリが主役になれず山降りる

きみえ

真つ赤な顔で泣く赤ちゃん主役

和歌子

主役から降りて余生の深呼吸吸

茂美

凡人であり続けるワンカップ

登志子

凡人で終の人生見えてきた

登美子

神さまでない凡人の多数決

螢

凡人で辞書とメガネを持ち歩く

博子

凡人の切る大根はやわらかい
お隣も凡人本音で付き合える

芳枝

若者に定員の壁厚くなる

知恵子

有無もなく定員裂いた彼岸花

義良

定員をこまかしてはみる渡し舟

小鹿

定員でいつもはみ出すのはわたし

きみ子

一人増え包丁の音高くなり

たけし

定員の話うち切る寒い風

房子

年甲斐もなくほめられて有頂天

みえ

ほめられてもう一杯と調子だす

静江

ほめられてにつこり笑顔とりもどす

静恵

ほめ殺し敵に油断をさせておく

すみこ

引つ込みがつかなくなったはめ言葉

秀子

よくやった一言父のはめ言葉

桂子

バスツアーやはり戻って食う茶漬け

煩惱児

句会出て味のある句に論される

注湖

秋茄子の味へ仲よく嫁姑

太泡

三代の味が染み込む落し蓋

昌枝

方言に金では買えぬ人間味

与根一

どうしても母には勝てぬかくし味

町紅

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

結び目のたびに絆を増すおもい

弥生

恋しさがコスモス畑の中で増す

シマ子

スーパードンダン増える秋の幸

剛治

名をなして前にもまして低い腰

洋

増してくる恋の水嵩逃げられず

隆盛

喜怒哀楽増えて年輪太くなる

弘一

川の字に寝て幸せを噛みしめる

風

いつまでも己の形さだまらぬ

万歳の形で蟻が死んでゐた

偏屈という形か父の肩の線

うまさうな形になった熟柿

五百羅漢の形お喋りするよう

荷崩れの形になった肝つ玉

みたらしの串の三つめたべにくい

吉備団子甘い誘ひを鬼を討つ

今日あるを丸く味わう肉団子

うっかりと両手でもらう黍団子

もてなしは母の作った吉備団子

白い歯にビタミンCの香りする

ビタミン剤棚に並べて病んでゐる

ビタミンを転ばぬうちに飲んでゐる

夫婦喧嘩ビタミンのんでむし返す

萩の寺満ち足りて出る老夫婦

萩の私語耳をすませて聞く二人

亡母の忌にきつちり揺れる萩の花

母さんに無理は言うまいこぼれ萩

母の忌へほろほろ萩がこぼれてる

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

夏の日の思い出浮ぶ秋の空

秋空のミラーにとんぼおしやれする

秋空の手紙男を石にする

悲しい目忘れてビエロ踊り出す

コスモスが踊れば見える風の道

盆踊り菩薩も夜叉も輪にとける

厳しさへもつひとふりの塩を足す

和歌子

ダン吉

ばっは

森子

太郎

欣之

春子

柳弘

年人

英一

春蘭

ますみ

三男

東雲

宏

定男

とみを

柳伸

たもつ

千里

石ころと石ころ恋がはじまりぬ

嘘などは見抜いています澄んだ空

亡母の忌に出会った亡父の古ノート

蟻の列踊りの輪には目もくれず

黒幕と知らずに踊るイエスマン

厳しいが温みがあった義母のむち

厳しさに背を伸ばはして惹坊主

栗の実がコトリと落ちて秋の空

名月がかかり少女は満になる

秋空に浮んだままの捨てゼリフ

厳しきは柔和な母のしわにある

踊るほど妻はお酒を飲ませない

妻の手のひらで踊ってばかりいる

素晴らしい出会いでこけしの目がうるむ

はまゆう川柳会

中後 清史報

苦心して張った障子に孫の指

苦心した割に仕上がりバツとせず

苦心して大きくした子寄りつかず

着比べて値札で決めた試着室

比べるから気になる人の暮らし向き

彼と彼比べて彼の嫁になり

比べれば辛い思いのことばかり

温泉街比べて探す安い宿

この人が顔と名刺を見比べる

いつの世も下と比べて生きる知恵

七癖も飼ひ馴らされて共白髪

母の癖そのまま姉の小言聞く

癖一つ邪魔になつて惜しい人

霜石

ヒサ子

北歩

慕情

銀波

ふさふ

ツネ

井蛙

黙人

千加子

隆樹

一花

島

五楽庵

癖のある靴音はもう帰らない

女房と同じしぐさをする娘

留守なのに夫の箸も出している

帰宅して先ずはテレビをつける癖

ご用心笑くば作つたとき孫

忠告を非難と思う悪い癖

アイドルと比べる相手独りっ子

写真展孫の笑顔が一番だ

かわはら川柳会

上田 俊路報

無理にでも頭をひねり句を作る

無理をして楽しい旅行プランねる

毎日の重ねが無理の花咲かす

生い茂る草また腰に無理をさせ

無理をしてためたへそくり羽根が生え

無理のない生活楽しとなり組

法目をくぐつた無理に吹くあらし

大量の命を奪つもの憎い

あゆ太鼓兎等のいのちの汗光る

命がけ産んだ子供は羽根が生え

ときめきがほしくていのち燃やしてる

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

一歩さがって見れば焦点合ってきた

回り道重ねたことがバネになる

ゴージャスな誘ひいつとき夢を見る

職人の腕は段取りから入る

焦点へ集めた愛を掌に包む

焦点のない道を彷徨うのも若さ

修也

国彰

恵美子

悦子

雄造

比斗志

雅視

苗子

一薫

登生

悦子

寿子

余更子

静子

泰良

秀子

正子

ふじ子

俊路

紀美女

保州

富美子

克子

寿子

精子

焦点をばかして丸い絵を画こう
 焦点が合わない方が美しい
 焦点の合わない方が美しい
 焦点が今も炎えたる芸の道
 焦点を患者に合わせる童眞
 焦点を絞って狙う変化球
 焦点を宇宙に向けているカメラ
 秋の風まだ焦点が合わない恋
 低金利時代をバネに立志伝
 アルコールバネに本音が弾み出す
 バネいっぱい弾ける返事参観日
 グループの対話をバネに弾む日々
 車椅子痛む悔しさバネにする
 赤トンボに誘われいつか来た道へ
 花が開いて誘いの言葉待っている
 出不精を秋の野山が誘い出す
 腕組みをしたら私も哲学者
 手腕家と言われて下手に動けない
 紙つづて投げて世相へ腕まくり
 腕組みの庭師譲らぬ石の位置
 遠花火どちらともなく腕を組み
 難問が解けて腕組みやととく
 何時の間に腕を上げたか子の将棋
 誰よりも夫がみとめてくれた腕

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

雅代 紫香 鉄治 千寿子 高美子 美夫 吞天 佐代子 健三郎 泰子 良一 正博 豊太 さち子 大輪 優子 富湖 和重 利治 英子 三男 あつむ 勝 紀久子

投げた石こんな波紋になろうとは
 さわやかな気持で暮れる立ち話
 お茶をのむ時間はかりも草臥れる
 幸せが続くと思っているこの灯
 裏町へ続くこの道好きなら
 三十分伸びた昼寝で草臥れた
 続けざまアッパーカーツト食ったよう
 堺川柳会 河内 月子報
 松茸をさすかる今日の風の向き
 手の届く高さにはほしい物探す
 絵の裏を探す雪の切れぬ傘
 めずらしく雑巾がけをしてる妻
 スタントマンを探す夏バテのわたし
 万華鏡淋しい僕が隠れてる
 父の樹が枯れる堂々として枯れる
 満月を肴にひとり缶ビール
 新世紀へしつかり歩く靴探す
 原稿紙自分を深く探してる
 組板の秋刀魚に話す隠し事
 片隅を探すと見つめるわたし
 見慣れない花に止った登山靴
 珍しくない警官が掴まった
 一日の半分探しのしてる
 真昼からさしつさされつ怪気炎
 優勝の挨拶馬も胸を張り
 9の字が五つ並んだ日の句会
 間違いをさりとかわす勘の良さ
 松茸が届いて料理手がかず

聖子 恵美子 好栄 ちよえ 博利 清泉 白汀 春蘭 紀美女 勇太 千代 美代子 りつえ 扶美代 美子 小雪 半楓 文 五月 健吾 哲平 玄也 朋月 伽羅 日の出 舞夢

珍客に特上の酒惜し気なく
 真面目だが酒を飲んだら変わります
 また自殺サンドイッチの管理職
 堂々には屍たんと越えて来た
 胸張って生きて行きますお星様
 じつくりと夫がカレー煮込んでる
 堂々とちりめん雑魚の大将進
 まごころで咲かせた花も枯れてゆく
 ビッタリの鍵がなかなか見つからぬ
 また花の咲く頃と指からめ合い
 南大阪川柳会 吉川 寿美報
 完全燃焼微塵も今日に悔いはない
 臨終の父の手握りありがとう
 見送りの中に味方が見つからぬ
 回り寿司トロとイクラは見送ろう
 いつまでも手を振る母に輝くぐれ
 ボタン一つで木っ端微塵になる地球
 美しい花で微塵もスキがない
 リストラが木っ端微塵にする生活
 不正なくど微塵もない強い腰
 水着跡くつきり娘の夏終る
 サンオイル泳いだことのない水着
 義理人情密集してる街が減り
 密集の中で選んだ今の人
 大猫の墓さしりしと一等地
 客待ちに寄るタクシーのルール無視
 密集へテポドン断りなしにくる
 足もとをじつと見つめている未来

八千代 ざくら なぎさ つづや ちゃ子 梓 冬虹 深雪 泰子 かりん 信治 太郎 度 直子 慶一 遠野 庸佑 柳宏子 重人 ひさ乃 凡子 ばっは 章久 憲太郎 朝子

ロボットのハローワークもある未来

草に寝て未来語った青春譜

未来図へ筆は尖ったまが眠る

未来信じ母は丸ごとわが子抱く

少子化で国の未来の荷が重い

大阪はかがやく未来人とまち

夢の橋未来へ賭ける月の土地

大切な未来へ無農薬を選ぶ

産れ変わる未来やっぱり人てよい

ビル密集人は住めない街になる

真情を微塵も見せぬイヤリング

テールラング見えてるうちは見送ろう

外堀を埋めに行くのに見送られ

川柳塔鹿野みか月

土橋

王様の椅子に座ってまごつかぬ

まごついてまた振り出しを思い出す

まごついた手の中にある肥後守

まごついて自分に消火栓を向け

まごつかぬうちに真顔でリハーサル

一合の酒にまごつく齢かなあ

まごついてゴキブリ遂に仰向けり

二十一世紀へまごついてる夢ばかり

レントゲン五臓六腑をまごつかず

まごついて死にそこないをしています

まごついて浅い泥濘から出れぬ

夢うつつ天女の声を聞いている

声だけはまだまだ捨てたものでない

介護も電話の声が泣いている

萬的

寿美

雅文

たもつ

叔子

東雲

柳伸

幸子

文秋

ダン吉

澄子

度

千梢

螢報

茂

由利子

小鹿

幸枝

弘子

きみゑ

和子

かつ乃

はるお

盛桜

みさ子

八重子

睦子

人生の午後は大声ひかえねば

君が代を誦う良心から唄う

良心が後悔をした知らんぶり

褒められて良心ピンク色になる

良心もほどほど塩もほどほどに

厄日無事風の来ない稲を刈る

心電図に嵐の子報してもらおう

奇人変人五人揃って大嵐

嵐去り木綿の顔になってゆく

耳の穴掃除したのに聞こえない

洞窟の奥から響く絵描きうた

穴場にはうしろから来る波がある

年輪に穴を通した芯がある

花植えて心の穴を埋めている

蟬が出た穴に入ってゆく蚯蚓

サークル檸檬

小林

ふところへまた言い訳を落し込む

私のポリシー懐に秘めておく

暦にはない記念日を胸に抱く

白黒を付けてふところ風が吹く

欲のない男ジャンケンいつも勝つ

ふところにまっ赤なバラを隠し持つ

萩咲くや壊れた時計五つ六つ

人を責める言葉は持たぬ秋さくら

ふところに風旅の心はさわやかだ

ひとり芝居シナリオ少し変えてみる

ビタミンもカンフルも要る余命表

女好きの虫一匹をふところに

房子

喜与志

実満

節子

きみ子

野草

隆風

完司

富久江

くに子

風人

孔美子

汲香

久枝

螢

一夫報

あずき

澄子

靖巳

いわゑ

正坊

楓楽

薫

みつ子

希久子

義子

房子

智恵子

ふところの淋しい時は山にゆく

川柳塔なら

坊農

柳弘報

不景気も子供達には無関心

家計簿は高波続き溺れそう

海行かば波が奏でる鎮魂歌

コスモスが咲いて私もゆれてます

あんな人関心無いと言っけれど

違う道進めと父は宮廷え

無関心常識破りこと起こす

老い給う妻の変化に無関心

老いひとり介護の記事を二度三度

大波にさらってほしい胸のうち

他人事に関心ばかり持つ落目

酔っている時だけ私に目が向いた

明るさの波長が届く良き友よ

ほろ酔いの余波で約束させられる

山ほどの残飯出して無関心

五歳児がもう関心を抱く異性

引き出しにまだ波風の立つ手紙

反対に歩むと道の懐かしさ

割り切って別れた人の後日談

関心が両掌溢れるほど熱い

妥協する度に違っていた指紋

本音とは違う笑顔の嫁姑

開発の波に押されて蛍の灯

目の色の違いで基地の罪と罰

燃えカスの火花と老後見比べる

癌の字が胃の字が新聞から刺さる

雅子

幸代

季世恵

節子

民子

久峰

たけし

悟郎

高栄

絹子

とし子

さと美

茂雄

美和子

良一

あやめ

長生

秋泉

卓

和夫

欣之

洋子

秋雄

春蘭

常念

眞生夫

睦朗

星空へ違ふ願いの肩が寄る
さざ波が大きな波になる予感
花火百態我が煩惱を責めるのか
朝顔の浴衣火薬の香が少し

川柳大坂

坊農

柳弘報

欠点をいつも傲慢にいう度胸
欠点の最たるものが戦争や
あほやなあ謝るのんはうちやんか
悔しいがこの場となくうしろや
むつかしい人の家だろ草もない
牧草を牛が食べれば乳となり
謝って済ますつもりか銀行屋
草葺きのほれあの辺り父母の里
欠点が見えなかったよ恋の闇
欠点をかばいあつて来た夫婦仲
謝ったあとの空気の旨いこと
辛党も母の草もちだけ食べる
欠点をほんわり包むのが大人
とりあえずはめて欠点いうたげる
いたずらつ子連れて謝る母が好き
謝ればすむ一言が出ぬ頑固
五百余のいのち護つた機長ああ
愛情一本冷えたビールに妻の顔
列島の八月詫げる事ばかり
脇役に徹した母のカスミ草
かいらいしい自分見つけたセピア調
かいらいしい食器が並ぶ新所帯
草野球外野は二人しかいない

直子 三十四 酔舟 金太 笑風 重人 柳弘 照月 叭笑 芳香 民子 信醉 川童 かよこ 雅巢 青道 河南子 柳昌 柳昌 美花 朝子 一風 鉄心 本蔭棒 洛醉 ダン吉 希久志 比呂志 まつお 一歩

日の丸の論議老若一分する
謝った後で一言愚痴を言い
電話ではかいらいしい声の妻である
欠点を晒してたたかき生きる
謝つたぐらゐで婦警許さない
欠点なんにも書いてない釣書
医療ミス詫げるばかりの無責任
大原川柳社
矢内寿恵子報
内臓が売れると思う楽天家
太つてるだけで楽天家にされる
栄冠のかけに努力のものの語り
栄冠は弟子にまわしてゐる余裕
栄冠へ身心共に伸び育つ
栄冠をあげたい母の子育て記
栄冠のレールに若い夢をのせ
古い忘れストレスもなし楽天家
楽天の放置のツケが回される
まだ少し割り切れぬまま受話器おく
楽天家難問題もふつとばす
楽天家馬耳東風でのほほんと
栄冠を勝ち陰の血の努力
まだ少し話したりしないまま別れ
独り者楽天家とはやせ我慢
楽天家おろおろ親の葬送る
極楽がそこに見えてる楽天家
愛妻に捻子を巻かれて楽天家
楽天家だからこの瀬が越えられた
楽天家の嫁にもあった泣き処

三十四 酔舟 金太 笑風 重人 柳弘 地佳平 はじ芽 あすなろ 和子 昭子 絹子 はるみ 静子 ひでの たづ子 南花 こふゆ 喜美子 巴子 悦子 妻子 辰江 玉恵 さちこ あやこ

凶悪な空気が和まず楽天家
運天に任せて生きる楽天家
川柳塔唐津支部
松涛庵正剣報
異変ある度に世紀の終りかと
自然への共生未来を生んでゆく
天高く畑に嘶く馬も見ず
三十度超せばエンストする六十路
年金の財布を狙う孫のキス
野の花が一番似合う唐津焼
戻れない悔いをもみ消すお数珠の手
特攻の青春重なる甲子園
待ち侘びた検査結果の異状なし
蒸発の妻へ父ちゃん詫びている
今日もまた残暑に耐えた札申す
よくわかる法話にしばし身を委ね
パチンコで子供のいのち弾く親
横浜あおば川柳会
菱田 満秋報
置き忘れ前提にして傘を買う
国宝と気付いてからの褒め言葉
安い傘買うからすぐに置き忘れ
執着を捨てると肩の凝りも取れ
気付くまで見守りましよう子の仕種
安全と不安同居の核の傘
老いてから軽さで決める靴かばん
風に乗る綿毛元気で旅に出る
デザートに未練残して体重計
気付かないふりの打算も妻にあり

みづえ 寿恵子 あき 實 久仁於 水笑 輝夫 タミ 勝視 幸夫 晴翠 高明 虹汀 四郎 正剣 かず枝 街湖 亜希子 広和 省子 嘉信 雅子 笑子 純子 良子

輕口をたたけるうちは大丈夫
妹の分も説教されている

松茸の傘の裏まで品定め

にわか雨知らぬどうしが傘の中

満開を口惜しがらせる花嵐

リストラに屋台の酒がくどくなり

氣付くまで隠しておこういい話

氣付いても笑いとばしてとほけられ

激みなくスラスラ述べる憎い奴

肩叩き始めは軽くあと強く

明日会える軽い別れの手を振って

保証証軽い氣持ちが仇となる

売った株だがとどん上がつてる

結局は夫の傘の人で舞い

咳一つ母に氣付いた參觀日

バーゲンに定価で買った服がある

飲み屋から誘いのかかる忘れ傘

うぶみ川柳会

上田

宣子報

仲人は昇進までも予測して

人形の前進捻子の切れるまで

一杓の水くらぐらを熱らせる

風鈴の弱身は風の機微にある

明日も知れぬ命で進む僕と蟻

鈴見ると一度は振つてみたくなる

すずらんの僅かな毒にくらくらす

鈴の鳴る方には行かぬ反抗期

ひび割れた鈴になつても母は振り

スクープへ常にベン先炎えている

和可
鈴美

八重子

かつ子

サト子

句多留

徳三

絹子

土風

裕峰

道子

敏

為佐子

早智

政勝

潮華

満秋

也恵

静生

登美枝

健一

きみ子

天雀

和歌子

天人

睦子

黙光

氣がついたときは進んでいた病
目を閉じて土鈴の音色胸で聞く

進んでやつて愚痴るのは誰ですか

常夜灯心温める淡い灯に

エスカレーターしながら進む癌怖い

常日頃今の世の中腹が立つ

猫に鈴今は兄に鈴追いかける

教育勅語を常識の範とする

野心家の酒が余罪を進ませる

じれったい常識ぶつと出て来ない

鈴の音大使カラコロ下駄が鳴っている

日盛りの君にくらくらしてしまふ

川柳ささやま

酒井

靖子報

母と子のところが通うメモ用紙

メモ帳へ引き算ばかりしています

お揃いの浴衣が待つてる盆踊り

初孫を待つた重さで抱きあげる

待つ人もなくふるさとの墓参り

父と子の迷いの朝を白くする

ふるさとの板垣昔の詩がある

合成板みるみるうちに家が建つ

待つ人もなくて淋しい一人膳

道しるべ迷わず着いた目的地

毎日月蝕迷わす雨の空

久方の月蝕迷わす雨の空

瞑想に一石投じた夢の母

女の座毎日違つた匙加減

盆踊り浴衣に着かえ風を待つ

ユリ子

くにお

ひろこ

良雄

あづま

一夫

華子

螢

雄人

一枝

葉士人

宣子

純子

恵美

多美子

美智子

八重子

とみ子

つや子

かはる

すず子

かつ子

君代

ヒサ子

毬子

富美

美紗子

待つよりもこちらから行く結び糸
A型で困っています迷い癖

子の帰り寝ずに待つてて叱られる

回り道いまだとりつく父の背な

日日使う蛇口の水を疑わす

川柳会梨花

石上

悦子報

受理せぬとオウムの子供家なき子

人種差別してはならない受理します

受理をして下さいという人の子を

個人的な寄付はいつでも受理します

プロポーズさんと条件飲まれた

愚痴ばかり言つても妻と仲がいい

人よりも今度はトキに生まれたたい

方向音痴肩にリボンをつけて置く

耳鳴りの奥にたまっている美学

純行が性に合うてた昼の月

ときめきの肌へクリームよくのびる

クリームをつけても心貧し過ぎ

湯上がりにクリームつけてにんまりと

婆さんにクリーム代が高くてつき

クリームをあこれ並べ垢抜けぬ

世界地図抜いたもどこかで銃の音

成績の図抜けたやつとの不幸聞く

極楽も地獄も地図に載っていない

地図にない道で出逢つたひるの螢

設計図地所もないのに大き過ぎ

緋牡丹の図柄に走る針一途

檜山で図太く生きる紙おしめ

美緒子

房江

泰子

可住

靖子

一夫

幸子

勝見

完司

節子

多哥由

東雲

睦子

きみ子

ただし

典子

螢

久子

蟹郎

美恵子

よしえ

求芽

かつみ

ひろこ

一枝

和歌子

忠良

あの愚図があゝの別嬪のヒモらしい
ボトル瓶これ見よがしに貯める金
レントゲン透かして医者と思案顔
透けている網戸から見る社会です
透き通るまでもソーメンゆでないで
心臓を透かして見れば毛むくじやら

倉吉川柳会

松本よしえ報

彼岸花ネオンの街は夜に咲き
うんざりと言えない母のお弁当
潤滑油たった二合でよく走る
空びんでうんざりこつそり床に入り
曼珠沙華抱き昇天の蝶あわれ
彼岸花好きといわれず燃えている
秋風につて唇がよく走る
うんざりとする暇もない子沢山
期待した大風呂敷にあった穴
猫きらう私が猫にしてやられ
応援の声が孫にはきこられる
野に咲いて勇氣をくれる曼珠沙華
うんざりだやめめの友はゴミの山
天界の夫も見てるか彼岸花
走りつづけて終着駅の見える位置
しんがりの完走惜しみない拍手
ママさんがやめ招き猫いなくなる
猫ちゃんが輸血点滴してもらふ
猫よりも女のツメがおそろしや
松茸も十日つづけばうんざりだ
七章になぜか入れぬ彼岸花

石花菜 玲子 高栄 行男 悦子 和枝
喬水 智子 幸子 志郎 雄々 紀美子 康子
喜美子 秋草 西喜美子 久子 賀寿恵 十三男 ちよ子 季芳 和枝 天雀 よしえ 和歌子 一夫 玲子

弊害もあります舌の走りすぎ
惜しまれて死にたい天涯花が咲く
うちの人また優勝をしました花の
いくらでも嘘の寿命が延びる国
三度目はうんざり同じ事を聞く
歳とった猫も私も白内障
うんざりとする程金があればよい
曼珠沙華無縁仏を慰める

竹原川柳会

時広

携帯のメモリーあなたが最初です
さようなら高校最後の夏休み
雲は流れて味方を少しずつ増やす
父らしい入道雲に睨まれる
気まぐれな雲父となり母となり
千切れ雲浮気をしてはいけません
心ざれ雲裂かれた愛の絵図に見る
心象の如く晴れたり曇ったり
毎月の京都へ母も張り切つて
夏休み子供の声が聞こえない
夏の夕陽へ今日のビールはうまいなり
クーラーの部屋で扇子を使う客
風鈴のチンとも鳴らぬこの暑さ
ひまわりが見ている弱音などはけぬ
グツグツと蓋も煮え立つ夏の粥
暑い日の忘れてならぬ忌がめぐる
火と燃える花も緑にささえられ
火の草が好きでマツチが放せない
原爆忌ヒロシマの祈り燃えている

節子 螢 石花菜 次男 きみ子 睦子 かつみ ゆり子
2史子 3千枝 蘭幸 蝸牛 房子 一枝 喜美子 美佐雄 喜久恵 汎美 笑子 淑子 栄恵 貞子 正宏 比呂子 千年枝 節夫 夏喜

川柳後楽吟社

從野 健一報

幸せと言えは幸せ深海魚
微動だにしない互角の睨み合い
危機意識持たない平和ボケの国
世間知らずでいいのびのび駆けている
残り火が燃えて生きがいまだ続く
一球に泣いた球児が砂を詰め
まだ少しあてにされてる頑張ろう
倅せはあなたのレンズの片隅に
落ちこんだ仲間にあたる縄梯子
悪魔の笛に踊らされてるわたし
約束の秘密へ刺がはえてくる
人間不信とことん酒を飲んでる
天近の兄の草笛びびく夏
ままごとのように草餅作つて
目先だけ追つて自分の影を見た
酒飲みのルール伝授し二日酔い
気付かず助けられてる残暑の日
良いことがありそう信号青になり
兎小屋孫の玩具に埋まりそう
夏空へ美容の話加速する
団扇ではどうにもならぬ夜が続き
幸せは茶飲み相手がいる老後

不 静 青 力 一路
拓治 草風 秋月 道博 吉則 金吾 柳五郎 美智子 桃風 健一 正秀 忠成 邦季 まさお 信善 直樹 博友 佐加恵 照路 一夫 照明 浄美

向日葵に一部始終を見られてる
やはり酒俺の味方になつてくれ

敏明
哲郎

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

涙を押さえベンで綴つた時がある
筆ペンの愚痴並んでる老母のふみ

東雲
美弥子

法案をコラムニストのベンが責め
耳遠い母と大きな字で話す

文秋
度

客間などない気安さに友が寄る
お言葉に甘え手ぶで寄りました

シマ子
たもつ

振り出して戻って足元確かめる
職を振って生きている男

千里
太郎

まだ続く他人同士という素振り
諸行無常同行二人の鈴を振る

太朗
ばっは

おふくろの味へ学生客がよる
貧しさに慣れてだんだん強くなり

萬的
賢子

だめだめと言って女は飲み続け
団子屋でよく食う客だだんご鼻

湖風
弥生

第三者だから噂を派手に書く
ダイヤモンド私の腕でポーズする

正博
雅文

駄々こねてやろう身勝手な幹事
抱いてやるだけで絆は保たれる

あや子
緑

城北川柳会

神夏機典子報

欲しくあれもこれもとバイキング
痛烈な恋が花火と共に散り

登美子
トヨ子

親を看ぬババマ見てる子供の目
悲しみか命を叫ぶ油ゼミ

政子
チサ子

他人のため大きい傘を買ってくる

ひさ乃

良い人に拘つてもうた私です
いく度も拭いて消せない過去の罪

順三
みえ

堂々と正論を吐く女子社員
リストラが陽気な女房で救われる

はじめ
あい子

痛烈にこたわるあすに捻子を巻く
荒波にもまれて人の情け知る

久留美
とし子

手作りに批判も添えて礼がくる
たまたまとはにかんでる救世主

昭子
ただし

曲り角道間違えて誤解され
大法螺を吹いた手前の寄付の額

達子
典子

ときどき天才と思う妻の勘
妻の吹くラッパに歩調乱される

白峰
小路

警沢言わん優しい美人なれば
痛烈な生き方して来た古帽子

千里
倫子

ライバルが大きく見える日の疲労
美しく老いたしころの鏡ふく

一枝
道子

抜き足を築百年が邪魔をする
平凡にならないように朱を入れる

睦子
求芽

体中に女は発火点を持つ
君が代の君はあなたという詭弁

あやめ
史風

抜き足を濁さぬ安来節
愛憎も風化しすかに墓洗う

高栄
義江

脳死より臓器もらいて影が生き
土用干し家に減りゆく父のもの

春蘭
公一

幸せを揃う両手に明日の夢
川柳塔みぞくち

小西
雄々報

ご近所の迷惑ごとは耳ふさぐ
花回廊近い気安さまだ行けず

和代
豊枝

近道をねえと無理な知恵をつけ
神仏に近頃無沙汰しています

智恵子
信敬

近道はやめよう踏絵置いてある
引越し先親近感も年の功

鈴枝
公美枝

急用に近道行けば工事中
新世紀近く何かと気のあせり

久子
康女

近すぎて何も言えない事もある
行き先を近く決めて一人旅

弘江
静江

相槌を近くで打つたのが味方
訃報欄わたしに近い齢並ぶ

正光
雄々

三幸川柳教室

三宅

保州報

鳴き砂に合わす未練な笛を吹く
玉砂利を踏めば邪念が払われる

桂香
和代

黄昏れてまだ夢を追う砂時計
モンゴルの砂に哀しき鳥の葬

栄之進
満洲子

砂かけた報いきびしい上り坂
砂になるまでの尽きせぬ物語

さち子
保州

足元の流砂が俺を迷わせる
風紋の上を流れている音譜

秀男
章子

洗い張り母の温もりある着物
好きだった酒で親父の墓洗う

かず子
嘉平

時が今流れて流している襖
内視鏡腸を奇麗に洗いつつ

豊太郎
美子

首洗ひ相手の出方待っている
七人の敵を欺く顔洗う

三千子
当代

盃洗は要らぬかすかな紅のあと
しまい風呂仮面の裏もよく洗う

孝子
和子

三日坊主四日目からは度胸つき

マリ子

大魔王がくるぞと二千年

兄ちゃんがおっちゃんになり恋果てる

癩癩玉 私のすごいエネルギー

菜食の夫嘴よく尖る

母も子も老人手帳持っている

ど忘れが多くロダンになる私

宇宙までアトムと飛んだ二児の父

宇宙からの使者と思えば頷ける

宇宙みる子の瞳は二十一世紀

少年の夢は銀河を飛び越えて

均等法もめだかも乗せて宇宙船

ポケモンが待っているような宇宙駅

ドラえもんのかげの宇宙まで続く

岸和田川柳会

長谷川呂万報

意地なんか捨てなと背中叩く酒

うま味だけ握って移る別会社

熟成のうまみ極めるシェフの味

老婆の高野豆腐にあるうま味

うま味ない仕事若者ふり向かぬ

ひとつまみ旨味ひき立つシェフの指

終章にうま味残してある余裕

舌の上で鯉が踊った活き造り

手作りに母のうま味のにぎりめし

ひまわりのあの明るさは演技かも

そそと泣く女の涙演技かも

馬の足なりに見せ場を出す演技

黙々と原爆ドーム演技する

労災へおおげさに言うかすり傷

百合子

正 匍

めぐみ

公子

町 子

登美代

起世子

み ね

鉄 治

正 一

碧

千 秀

朱 夏

萬 的

美智子

盛 之

基

俣 子

苑 子

呂 万

白 光

狸 村

みつ江

洞 庵

甚 一

金 太

信 博

おおげさに笑い声だけ英会話

おげさの化粧ビエロの過去ある目

おおげさに笑う女に又負ける

おおげさな五人もいらぬテブカット

おおげさとなめた象が命取り

おおげさな万歳国旗国歌法

格別の思いの夏がめぐり来る

格別の価格で競う小売店

格別な仲だなく目合いすぎる

格別に旨い有機の露地野菜

どの子にも格別はない母の愛

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

長短があるから人間面白い

妻の持つ鎖の重さ思い知り

愚痴置いて帰る娘の背に月冴える

泳ぐより見せたい水着買いにゆき

振りしはるパワーでネジ巻く古時計

照る日曇る日命曳きする九十坂

妥協点探してるのは未練かも

この歳で甘えてみたい人に逢う

子の為にカジれるスネは残しとく

友達を泣かす茄子の辛子和え

孝行はかくあるべしと老い看取る

栄転の机両袖付いている

嫁いだ娘姓が変わって遠くなり

我が住居隣に漏れる話し声

ツタの巻く泉が栄枯物語る

桜の陰浜風が来る憩いの場

東 雲

野 添

鹿太郎

辰 郎

一 斎

ダン吉

洋

昭 二

蛙 城

東 吉

さよ子

ひかり

放 任

マツエ

玲 子

まさる

坊太郎

勝

輝 夫

吟 笑

文 仙

かおり

あきら

治 延

いさむ

貞 月

チカエ

列島に文化を運ぶ高速度

一言が言えない為に損をする

天に運任せ成りゆき見守ろう

才能を汗で磨いて揺るがぬ座

損すると分かっていても断れぬ

厄除けの寺で怪我した事内緒

振り向かず信じて歩くカタツムリ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

お財布は忘れたことにしておこう

空っぽの公園蟬が鳴くばかり

空っぽの家あちこちに過疎の村

憎しきは空っぽにして世を渡る

空っぽの頭を補充する辞典

歯車と思った自負へ肩たたき

支えてるあなたが少し疎ましい

明日がある僕を支えてきた言葉

川柳クラブわたの花

吉村

冗談が大手を振った四月馬鹿

言い訳をしない男の値があがり

サンクラスはずせば唯の男の子

好きですと口が裂けても言えぬ女

冗談の言えぬ男にからかわれ

冗談ですまぬ男の一本気

アメリカの血を輸血して日本人

冗談に傷ついてないふりをする

酒呑むと冗談も出る良いお人

金借りに行き冗談にされている

正 雪

なみ子

よしみ

くに子

寿々女

抱 楽

はつ恵

慶 子

能 子

香 住

シマ子

弘 直

あずき

欣史子

喜美子

一 風 報

隆 盛

寿 代

信 子

司

友 甫

朝 子

一 道

ますみ

トシエ

まさこ

怒り肩父と同じの影法師

この服が旅に出たいと言っている
増築の窓から笑顔若嫁さん

もの忘れ脳にビタミン浴びせたい

花形の芝居見に行く街の温泉

冗談で済まない棘のある言葉

コスモスの可憐に乙女とりもどす

大好きとほんと冗談さつい人

冗談とすっかり聞いていたうかつ

くるま座のかたちで会話よく弾む

冗談が本当になり喜ばれ

冗談を本気にされてうろたえる

引き潮の波に謀反が眠ってる

峠こして冗談も出る治療室

また茶碗落して割った妻の留守

昨日より今日は幸せ波枕

真にうけた冗談ひとつ秋の暮れ

川柳高知

川竹

松風報

この指輪俺の一生決めるかも

後ろ指なんが無視してタフに生き

それぞれに任務が重い指五本

なんべんも指切りさせて寝息たて

この指が農を支えて五〇年

白魚の指が下戸にも飲ませてる

奉仕する会話に躍る手話の指

白魚の指が男を手玉にし

指切りの孫の小指にだまされる

打ち水へ白い素足が涼を添え

いつふみ

春江

知佐子

美代子

民子

明子

八寿子

宏

剛治

ミツ子

道子

君江

和歌子

春子

一風

幸枝

鬼遊

熊男

節男

孝雄

快風

幸

圭二

愛宏

かず子

功

栄珍

栄珍

水入らずいつか夫婦でフルムーン

水までも銘柄きめて買うボトル

満月と話がはずむ水溜まり

蘇生した川にメダカが還らない

工場誘致水の汚染は考えず

完走の水さわかやかにのどで鳴り

昔なら飛び越えまじした水たまり

なつかしいリズムで回る水ぐるま

富柳会

池

森子報

これからの一步に靴を光らせる

光る夏サンバが街を押しして行く

神様も冗談が好き妻に恋

苦しみに耐えたあなたの詩が光る

空気にも水にもなれず薬指

紐付きのボール誰にも当らない

風紋の砂丘素足で歩く夢

叱られてその裏側の愛を知る

すばらしい遊びを知っている素足

座りだこ祖母の素足は静かなり

回り道しながら可能性を見る

ためらいの背な可能性がどんと突く

人妻に祝ってもらう誕生日

可能性信じ移植の台に乗る

満天の星をながめて詩人なり

八起き目の夢は神の掌の中で

八月の雲にギリギリ縛られる

白熊に逢いたくなっている真夏

裏切らぬ土にわたしがよく育ち

和江

美々

京子

朱坊

千鳥

良雄

松風

佳風

森子報

一夫

あかり

宏

夕子

潤子

和子

けい子

三和子

扶美代

美代子

文子

冬虹

由一

勇

昭水

紅紫朗

アキ

登子

信子

ふつふつと煎じた知恵が顔を出す

クマ蟬が手づかみ出来る大阪城

日を追って亡母の言葉が光りだす

きっちり着物姿で飢えている

地の響き確か切っている素足

望郷の念かき立てる蟬しぐれ

末娘にも老眼鏡が要るや阿阿

盆踊り今年は星になった友

火の女命ひとつの恋をする

一本の薔薇が一本もつ主張

一冊のノートに風をはらませて

京都塔の会

松川

杜的報

こんがり肌や若さうらやまし

もみじ葉が一枚浮いて露天風呂

減量をせよとベルトに叱られる

葉の陰で雨と見送る雨蛙

山小屋の炭火へこんがり焼けてくる

だんだんとコンビニに慣れ手抜きする

こんがり焼いた鱈素敵だった頃

病葉はらはら私の鱗剥ぐように

若葉萌える丘に怪しい戦友の墓

あげなすにハーブを添える若い嫁

こんがり地球を焼いている詩人

残るものはもう数えない母の知恵

枯葉舞う夜寒に思う老母のこと

ビルが出来るそ駄菓子屋が消えてゆく

リストラはああ現代の口減らし

枯葉一枚悲しみ秘めた日記帳

和歌子

東雲

勇太

信博

たかし

義清

としを

くに子

花梢

欣之

春蘭

杜的報

宏子

吉之助

正坊

紫香

杜的

松宏

礫

百合子

波留吉

輝美

友照

葉子

風雲児

豊次

求芽

芳子

海水浴こんがり焼いて孫戻る

腹減った減ったと若さたくましい
ダイエツト減らぬ体重はがゆがる

つぎつぎと老友減りまわり寒くなる
健康や寝ているだけで腹が減る

散り敷いて幹太らせてゆく落葉
落ち椿掃く尼僧の背なへ散る枯葉

青紫蘇が引き立てている活造り
松茸の香りこんがり焼けてくる

こんがりと焼けて里から帰る孫
こんがりの餅に仕上げてきた火鉢

老いも若さも立読み好きが居る本屋
ストレスをためない愚痴をこぼしてる

どっかりとしているようで頼りない

水客

川柳藤井寺

高田美代子報

アイジョージ異国の丘も遠い日に
哀しいな子守歌だけ歌う母

軍歌と共に征ったままの友がいる
引き出しに母が残した数え歌

人生の岐路で聞こえる応援歌
女房に釘をささげた艶歌すき

恋かしら歌がシャープになつてきた
夕焼けに口ずさむわらべ歌

ナツメロの調べねむりにさそい込む
伴奏があつたらダメなボクの歌

口笛の軍歌 悲しさが走る

売り家の庭でひまわり凜と咲く
納得をせぬひまわりが横を向く

志洋

メ女 満子 庸佑 ルイ子 福子 白だし 白漢子 典子 飛鳥 巨詩 欣之 達子 美穂 水客

六 点

向日葵にちよつぱり日陰者が好き
ひまわりのうしろに憎いいじめっ子
ひまわりにメロドラマの秋がある
ひまわりのおごりを吊るす秋の音
ひまわりの瞳に原爆息が残る
喜びが弾けてひまわりが咲いた
何もかも姑の流儀にして平和
赴任地の流儀に溶けて酒を酌む
神武に始まる天皇家の流儀
流儀守つてとも律儀なロボットだ
泣き笑い寅さん流にある情け
一徹な父の背中も丸くなる
そつめんの流儀にする音がある
私の流儀で雨の日は休む
すぐに泣くこれが私の流儀です
どんぐりで流儀に縁のない背中
七人の敵に隠してある流儀

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

毒のある言葉は避けて嫁という
永遠の地球信じて種を播く
地球儀を回せばこもヒト科の愚
核ボタン地球ハラハラ見えています
情熱のさめないうちに漕ぐボート
馬ボート自転車父は忙し
愛憎のはざままで漕いでいるボート
救命ボート助ける人も命がけ
ほとほとと根が尽きた二枚舌
酒飲めばほとほと困る女癖

志洋

史郎 夕花 かつみ 和樹 森子 アキ 春蘭 シマリ 和子 大八 朝子 花梢 瑠美子 扶美代 桂子 鐘造 しげお

一 笛

決断が鈍くほとほと待つたらさ
川底のよこれのひどさ諦める
金無くてストレス逆手に長生きす
台風が来たかそうかと地下喫茶
紅葉は異常気象が出し惜し
いい天気 回転木馬に妻とい
鳩尾に溜まる鵝呑みにした話
お互いに傷つけ合つていた夫婦
故郷の柿の木にある少年期
亡き父がしきりに恋し桐の花
晩年の母に似て来て母恋し

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

木像の涙ぶくろがぬれている
神様がこちらを向いてくれるまで
友の計を風が知らせる彼岸花
飴玉に故里があり祭りあり
飴作る大事な柱まだ凜と
日傘くるくる明日の夢追う秋まつり
さりげない余生さりげなく光る
追憶の中で生きている乳母車
家付きに母も小さく付いている
ターゲツト決めた無口の胸算用
八畳の真ん中に寝て落ちつかず
姿見に少し疲れたわたしの背
子言かも知れぬ鴉の声を聞く
遺伝子のせいにしないで痴呆症
おしゃべりがとび交う午後美容院
明日という駅を見つめて直向きに

志洋

知香子 和歌子 吉太郎 紫香 肋骨 蕨児 萬的 寿美子 周信 正坊 女

春 枝

荒千花寿
介代子夕子

幸子報

睦善和
子江歌

一 禎 元 夫
か つ み
喬 水

博 丈
きみ子
よしえ

玲 玲 螢
坊 泉

一龍佳
枝枝女

克季順
枝芳子

セツ子

勇喜男

完貴
司惠

幸節玲秀勝孝芳
子子子峰見惠光

江
口

弘仁益時
一清弘弘

重三 博泉
あやめ

一朝順
風子三

忠文
央秋

ルイ子 度 礫

波留吉

惠子

亞冬
成葉

吉之助 睦子 勇太郎 洋 小路とし子 利昭

安芸田泰子報

昇 かつみ 庸 敦
子 佑 子

重辰
敏人子

志 昭 和
洋 平 歌
子

桂吐昭
子来子

滿壽藏

ダン吉

洞俊
庵男

— 123 —

スーパ―のはしご日課の老夫婦
スーパ―のチラシに無駄を買われる
スーパ―の一品セールスも並び
スーパ―で四季を束ねて売っている
延長戦勝って涙の応援歌
応援しないのに握手してしまふ
モーニングコールは妻の応援歌
カスミ草キミに応援してあげる
どの子へも静かに母の応援歌
新聞のコラムに生きる知恵もらふ

岩美川柳会

石谷美恵子報

弱い声聞ける政治にして欲しい
追伸の一行百の声がする
世渡りへ玉虫色の声を持つ
良心を楯にこの世は渡れない
生きている証大声出してみる
嵐より怖い静かなお母さん
まごついた時は迷わず寝てかかる
秋の声聞いてまごつくギリギリス
停退へ声まで強い妻となり
花も嵐も越えて川柳詠んでいる
良心を切り売りしては悪になる
嵐過ぎ手抜き工事が顔を出す
一年の汗を嵐に吸い取られ
変声期息子が急に遠くなる
夫婦でも時にまごつく事がある
援助の手嵐の中で欲しかった
蓑虫になつて嵐をやり過ごす

専平 一壺 一壺 扶美代 美喜 泰子 絢子 美代子 みつこ 聡 単車 大漁 忠良 蟹郎 孝男 一夫 季芳 圭一郎 喬水 一京 和歌子 公乃 芳江 節子 裕子 たぬ 美恵子

ローズ川柳会

山崎

君子報

嫁自慢願望たっぷり入れてある
苦勞した昔を自慢に酒ちびり
ヤジロベ―真つ直ぐ立てぬまま秋に
大志とは程遠いとこ生きている
自慢の種をそつと仕舞つておく手箱
五十年召された彼は行つたきり
無駄遣いせよと政府が外国が
魁夷倒れ遠くへ去りぬ白い馬
昔むかしが脳裏を過ぎる稲光
同じなら大きく自慢しておこつ
ふるさとを歩く義理にけつまずぐ
遠い日のこだまが返る丘に立つ
カラスの目恐くて日傘遠まわり
水平線の遠い青さにある故郷
釣つた鮎 自慢のたびに寸が伸び

てる ミサヲ みつ子 藍 哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子 義子 雅子

吉本川柳予告

吉本川柳予告	題目	投句締切日	句会日(6時から)
第七回	笑	11・11・11	11・11・26金
第八回	運	12・1・11	12・1・28金
第九回	汚ない	12・3・11	12・3・24金
第十回	横	12・5・11	12・5・26金
第十一回	憎い	12・7・11	12・7・28金
第十二回	銭おも	12・9・11	12・9・22金
投句料	80円切手5枚または年間2000円		
投句先	〒542-0075 大阪市中央区難波千日前11-6		

吉本文芸館

京都塔の会 秋の吟行句会

とき 11月29日(月)
ところ 京阪出町柳駅(鴨川べり地上)

食事 11時半 下鴨茶寮

句会場 下賀茂神社 1時から

兼題 乗る・案・しつとり

席題 当日雑感(各題3句)

会費 5000円(当日)

申込 11月25日まで

〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下る
弁財天町328 都倉求芽
電話075-351-4109

第35回 川柳塔きやらばく忘年句会

とき 12月12日(日) 午前10時開場

ところ 米子市観光センター2F

米子駅から皆生温泉行きバス終点下車

電話0859-3510175

兼題 頭・玩具・貸す・魚・広場

像・鉛・ダンボール

選者は当日決定・各題2句

出句締切 12時半(欠席投句拝辞)

開会 13時40分 散会 17時の予定

会費 4500円(昼食・懇親宴共)

連絡先 川柳塔きやらばく事務室

電話0859-2214213



(各書の内容見本進呈)

川柳表現辞典

田口麦彦著・46判上製箱入
税込価三五七〇円送料340円

四年間の歳月を費して、現代川柳三〇万句より六九二七句を選び、一五四二語の項目、解説内の八三九語をあげて、語の意味、難解な言葉、新語等を説明。実作例句で川柳表現の方法と技術を示した。

川柳技法入門

田口麦彦著・川柳の作り方
定価(税込)一八三五円送料310円

川柳上達の技術を九二五句の引例で分りやすく説明。添削・推敲は一句の完成まで、風刺・ユーモア・リズム・比喩・イメージ形成等

時事川柳入門

田口麦彦著・基本と方法と技法
定価(税込)一八三五円送料310円

現在を17音で切りとる諸諷精神と作り方の方法・技術を説明。新聞雑誌投稿句、サラリーマン川柳の即興性など引例九五三句で解明。

現代川柳入門

田口麦彦著・実作教室、慶弔句
定価(税込)一九八〇円送料310円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を詠む方法を現代の言葉で現代的に例句をあげて説明。全力で書きおろした入門書。

川柳の書き方

松橋巨山著・川柳書マニユアル
定価(税込)三八七三円送料340円

はじめて筆を持つ人から、中級の技術まで修得。自由に色紙・短冊・扇面・団扇・掛け軸が書ける。一七〇の手本と図表、下敷き六枚付

柳界展望

大阪川柳の会

とき 12月2日(木) 17時開場 ところ サンケイビル本館3階322号室 題と選者 今年・杉森節子△どなた・岩井三窓△咳・橘高薫風△登る・磯野いさむ 各題2句 席題なし 会費800円 18時締切 各題秀句に産経新聞社賞

★十和田市の第一回光と風のアートプロムナード「野外文芸館」の川柳部門天位に板尾岳人副理事長の句が選ばれ、「日本の道百選」の通りの歩道に石彫りして永久に保存展示された。

人間に逢いたくなつて歩く道 板尾 岳人

★第23回茗人賞川柳大会は8月29日、鳥取市「白兎会館」で開催、本社同人の政岡日枝子さんと山中康子さんが佳作に入賞した。

なお、同日の本社関係の秀句は次のとおり。

テレビから届く料理人の味覚 林 荒介

さりげなく光るわたしはミニトマト 田村きみ子

胸揺する厳しさがある父の眉 西原 艶子

貫いて明日の道をあけておく 田中 友子

ノーマアを叫んだ鳩も老いてきた 岸本 孝子

ゆとりある時は優しい顔になる 福永ひかり

★第7回和歌山県川柳大会は9月5日、田辺市ガーデニングホテル・ハナヨで行われ、本社関係の受賞者は次のとおり。

〈県議会議長賞〉

結び目の甘さへ鬼の矢がささる 青枝 鉄治

〈田辺市議会議長賞〉

人間の驕りを叱る茄子の花 武本 碧

零れやすきもの掌という器 川上 富湖

★第18回国際高齢者年島根大会記念企画として「川柳で考える高齢者問題」の作品を募集した。「老い」「介護」「未来」「女性」の4テーマに全国から5400句の応募があり、9月11日、表彰式が行われた。本社関係は特選に竹治ちかし氏の他、澤田和重・録沢風花・福岡芳枝の三氏が入選した。

介護してされて人間らしく生き 竹治ちかし

★10月3日、いずも川柳会では堀江正朗・園山多賀子両氏の米寿、板垣夢酔・恒松町紅両氏の喜寿祝賀川柳会を銀輪荘で開催した。当

新同人紹介

北村 賢子
—ダン吉・朝子・哲夫・遠野推薦—

田辺 鹿太
—薫風・紫香・みつ子推薦—

山下 省子
—薫風・満秋・潮華推薦—

西村 りつえ
—天笑・敏・美代子推薦—

太田 扶美代
—薫風・天笑・美代子推薦—

日は薫風主幹が、四氏にお集り。川柳未発表自由吟・祝いの色紙を持って急遽参選者 和田光代・小松原爽介・森田栄一・春城武庫坊村山勇太郎・福島直球 締

★第22回阪神文芸祭作品募集

切 10月31日 参加料 1

000円 宛て先 〒266

018588 尼崎市東難波

町5-21-8 兵庫県阪神泉

民局阪神文芸祭事務局

★第5回はがき歌全国コン

テスト。形式 短歌形式で

想いを伝える。応募方法

はがきに縦書きで作品とそ

の宛先「〇〇へ」と書き、

住所・氏名・年齢・性別・電話

番号を明記。締切 11月30

日(当日消印有効) 応募先

〒790-8601 松山

お知らせ

平成12年1月号から

渺湖抄を愛染帖と改め

波多野五楽庵選となり

ます。投句数その他は

従来通り。

また、今月6日の本

社句会から、句会費1

000円、投句料50

0円に変更します。

中央郵便局私書箱第234

号「はがき歌」係

★「こんにちはは川柳塔です」

第5号は9月末発行された。

★第9回「太平記の里」全

国川柳大会。とき 12月5

日(日) 9時半。ところ

太田市市民会館(群馬県太田

市飯田町818・東武鉄道

伊勢崎線太田駅下車南口徒

歩10分) 第一部(当日参加

者) 課題及び選者「仙人」

今川乱魚・「理由」山崎涼

史・「友情」竹本瓢太郎・

「野立」西村在我・「目白」

川俣喜猿・「渡船場」荻原

柳絮・「果実」鈴木柳太郎

「太刀」太田紀伊子・特別

課題「田園」清水惣七。各

題2句。投句締切 11時半

参加費 2000円。第二

部(郵送での参加者) 宿題

「人気」(共選) 斎藤大雄

関水華・大野風柳・加藤翠

谷・橘高風・磯野いさむ

山本翠公・小松原爽介・吉

岡龍城。参加費 1000

円。応募方法 新作2句・

指定の用紙または便箋に住

所・氏名を記入、参加費を

添えて郵送。第一部・第二

部の特選句の最優秀作品の

句碑を建立。投句締切 11

月10日。申込先 〒373

10851 群馬県太田市飯

田町818 太田市市民会館内

太田春秋会「太平記の里」

全国川柳大会係・電話 02

7614518291

計報

■定金冬二氏(元一枚

の会主宰・富田林市)

は、10月1日病氣のた

め死去。85歳。

■寺尾俊平氏(岡山市・

川柳「塾」塾長)は、

10月19日病氣のため死

去。74歳。告別式は21

日、「JA西大寺やす

らぎ」で行われた。

▽人事往来△

■9月8日、老人健康ホー

ム「ニューライフ・ガラシ

ア」(箕面市)で薫風主幹は

敬老週間の催しとして川柳

のお話をして喜ばれた。

■10月2日・3日に富田林

市の「フューネラルホーム

安楽」で行われた定金冬二

氏の通夜、告別式に薫風主

幹、天笑理事長が参列した。

■10月10日、第23回鳥取県

川柳大会に、黒川紫香相談

役は薫風主幹に代って「鳥

の選者をつとめた。

▼訂正とお詫び▲

■9月号 P19 (川柳塔)

め死去。88歳。

■一瀬福柳氏(元同人・堺

市)は8月11日、病氣のた

め死去。88歳。

■諏訪柳々氏(同人・青森

県)は9月29日、病氣のた

め死去。60歳。10月1日、

板柳町役場で行われた告別

式には多数の柳人が見送

川柳塔碑合祀法要の御案内

高野山大霊園内の川柳塔碑への本年度物故者の合

祀慰霊法要を11月12日(金)に行います。

集合場所 大阪なんば・新歌舞伎座前(25人乗りバス)

集合時間 午前8時半・9時出発・18時なんば解散

参加費 7000円(昼食費・交通費)

◎川柳塔社事務所で申し込み受け付けていますので

御参列賜りますようお願い申し上げます。

上段8行目きんとん雲↓き

んと雲

■10月号 P130 (各地

柳壇) 下段9行目並んで↓

なんでも P89 (川柳塔賞)

上段横浜市和泉あかり川

崎市和泉あかり

▼計報▲

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 電気・得意・およそ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卵 の 花	18日(木)正午から 相談・ネクタイ・出会い さよなら・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川 柳 会 梨 花	20日(土)午後1時から 茶・トラック・まる・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	20日(土)午後1時半から うるさい・鉛筆・奥の手・格安	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
城 北 川 柳 会	20日(土)～21日(日)一泊吟行 面・レーン・奥・自由吟	「河内長野荘」河内長野駅 午前11時20分集合 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 互選「穏やか」・よそゆき・大将	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後7時半から 洗う・祝	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	24日(水)午後6時から 盲愛・儲ける・目撃・もしか	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から 鈴・嬉しい・水仙	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川 柳 塔 ふ く べ	27日(土)午後1時から ふるえる・ストーブ・廻る・「柱」	福部村中央公民館2F研修室 〒689-0115 鳥取県若美郡福部村細川16-3 村上信子
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 深い・神・ドラマ・やがて	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日)午後1時から 神よ・ガラガラ・胸	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市 川 柳 会	28日(日)午後1時から 世話・暦・いよいよ・「デート」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	29日(月)午前11時集合 京 阪 電 車 出 町 柳 駅 (鴨川べり地上)	秋の吟行句会 本号P124参照 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

11 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
富 柳 会	10月31日(日)12時半から 富田林市民川柳大会	富田林市立中央公民館 前月号P132参照 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 ねやがわ	3日(水・祝)正午から 寝屋川市民川柳大会	寝屋川市立総合センター4F 前月号P132参照 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 塔 な ら	4日(木)午後2時から 度胸・腰・吹く	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	5日(金)午後1時から 谷・人形・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 みちのく	6日(土)午後4時から ドラマ・降りる・重い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	7日(日)正午から 八尾市文化祭川柳大会	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 前月号P132参照 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 唐津支部	7日(日)午後1時半から 晴・餅・いっぱい	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
西宮北口 川 柳 会	8日(月)午後1時から モナリザ・植える・斜め・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市岡度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	9日(火)午後1時から 苦手・変る・気まずい	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール堂池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9日(火)午後1時半から 偶発・立案・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘北口から 市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	11日(木)午後1時から つもる(折句)・半日(共選)・戻る	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	13日(土)午後1時から ひょこひょこ・蜜・自惚れ	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	13日(土)午後1時半から 枯れる・魚・役者	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 壁・中心・背伸び・「無人」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

編集後記

の課題としなければ……。

★どなたかの句に最近の若い女性の靴は履いているのではなく、乗っているというような表現があったように思う。20センチ位の厚底の靴、見ている方がハラハラする。流行とはいえ、厚底の靴による捻挫や骨折が多いそうぞ。何故、そんな危険を冒してまで高い靴を履くのか。目の位置が違っからと聞いた。目の位置が

★第五回川柳塔まつりは皆さまの御協力で無事、盛会裡に終わり、ありがとうございました。今年は都合で同人総会と記念句会が二日にわたったので、同人総会に出たかったのに出られず残念だったとの声もあり、来年以降の課題としたい。

★年一回の全国から参加してくださる大会に、皆さんとふれ合いお話を伺って記事にも生かしたいと思うがゆっくりお話しする時間がない。十月十日の塔まつりの記事を十月二十日校了の十一月号に載せるには、皆さんに原稿を書いて送って頂くのでは間に合わない。広い方々の声を聞きたくて参加者にアンケートをお願いしたが、徹底したとは言えない。これも併せて来年

★ファッションにも流行色がある。今年は白だとか。ファッション業界で一年位前に、世界の流れを見てこれからの色を決め、布地を織り服を作り、流行色が街中に広がることになるそうぞ。服にしても靴にしても流行の力の強さよ。「目立ちたくないで流行服を着る(本間満津子)」(み)

ひとこと

瑞鳥よ羽搏け

当時、三幸川柳教室のことを、山の分教場と智水庵主幹から口癖のように聞かされていたので、森茜さんの「川柳塔賞準優秀作第二席」の報は正に青天の霹靂だった。花束贈呈の役を仰せ付かった私は「何を着て行こうか」自分が表彰される気分、早速紫の地模様で黄金色の鳳凰が舞う鮮やかな色彩の服を買った。以来受賞作は途切れることなく、今回三宅保州さんの「一路賞」受賞で九回目となった。そして私は何の躊躇いもなくこの服を着用、受賞者は変わっても花束贈呈の私は服を変えらることなく晴れの表彰式に臨んだ。表彰される作者の喜びにも増して「もう山の分教場ではない」との誇らしさで体が熱くなる。可成り派手気味になって来たこの服、来年も出番があるのでしょうか。 桜井千秀

☆地方での大会に参加することにより、旅と川柳を同時に楽しむことができる。子育て中は家にこもり勝ちだった私は、この際とはばかりに、できる限り川柳と旅の二重の楽しみを味わうことにしている。出張だ単身赴任だと家を明けることのも多かった夫は、退職後は限り度付きにしろ、留守番を快く引き受けてくれる。だが老いた親の事、家庭の事情

のことを思えば、これは私の人生に与えられた束の間自由であることは百も承知である。

☆九月四日は岡山県久米南町弓削で行われた路郎師句碑建立50年のまつりに参加した。翌五日は第51回西日本川柳大会であった。何より感激したことは、五十年前、麻生路郎師の詩かれた一粒の種が、この町にしっかりと根を下ろし、大きく枝を張り、大木となり実を結んでいる事実である。

☆久米南町町長は結婚式の祝辞には必ず「俺に似や俺に似るなと子を思ひ」の句を借りて、少子化の世へ、子への愛を強調されると言う。教育長も、校長室には句を掲げ、川柳を通じて、心を一つにする教育方針を貫いたと言われる、川柳のふるさと弓削はいつ訪れても心地良い風が吹く。(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（1月号）

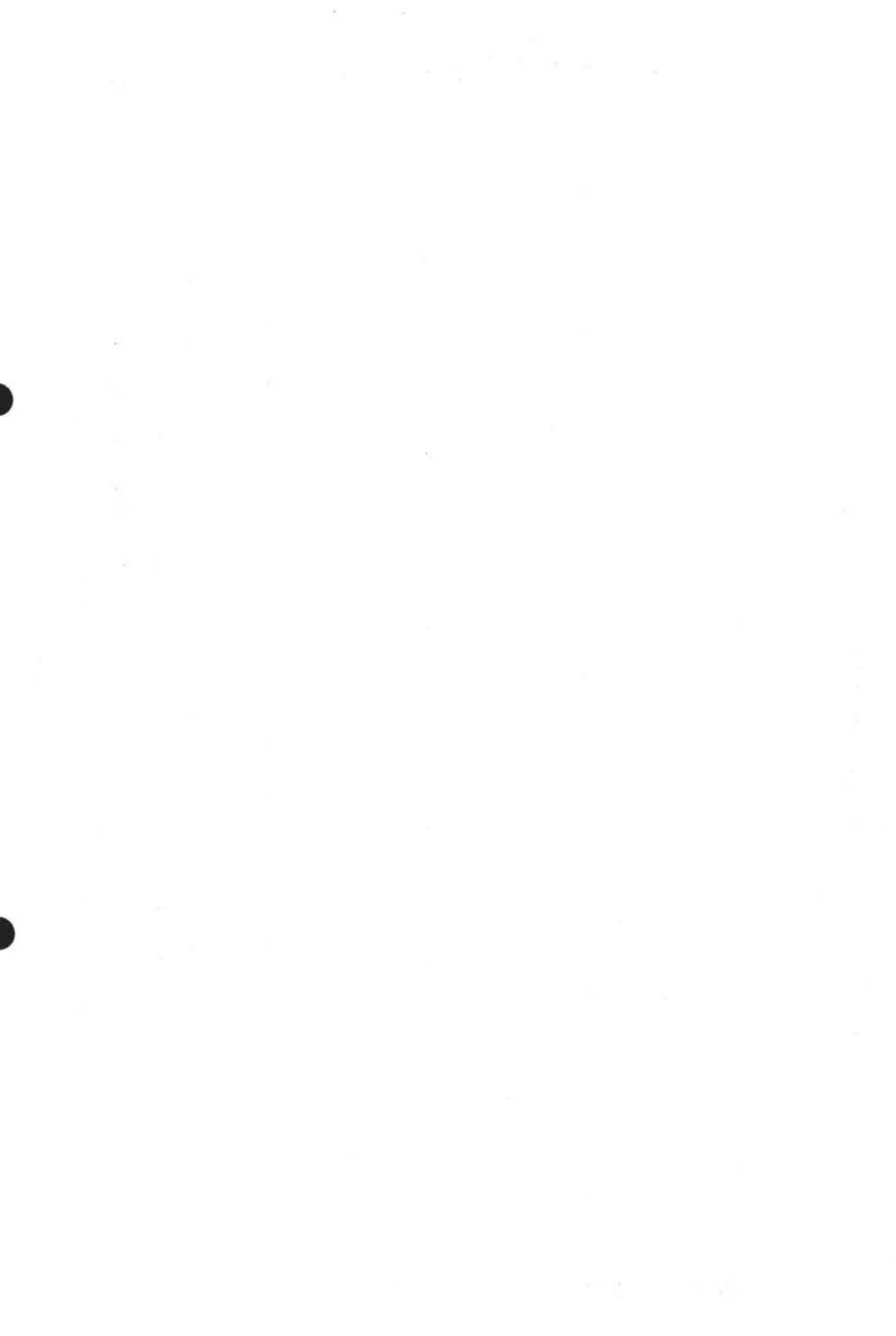
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句) 河内 天笑 選
愛染帖 (3句) 波多野 五楽庵 選
茴香の花 (3句) 宮西 弥生 選
課題吟 (3句) 「晴」 高野 宵草 選
「餅」 川上 富湖 選
「いっばい」 篠原 いつみ 選
初歩教室 「未来」 (3句) 吐田 公一 担当

2月号
課題吟 「梅」「つまり」「頂く」
初歩教室 「流れる」

本社11月句会

とき 11月6日 (土) 午後5時半
ところ アウィーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「謎」 稲葉 冬葉 選
「イヤリング」 山本 希久子 選
「突然」 八十田 洞庵 選
「たくらむ」 榎本 吐来 選
「迷う」 橋高 薫風 選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円
(会費・投句料、変更します)

本社12月句会 7日 (火) 予定

兼題 「ピエロ」「ばら」「憎い」
「惜しむ」「結ぶ」

夜市川柳募集

第6回「集」 奥田 みつ子 選
ハガキに3句 11月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 六百元 (送料84円)
半年分 四千元 (送料共)
一年分 七千九百元 (同)
平成十一年十一月一日発行
編集兼 橋 高 薫
発行人 橋 高 薫
印刷所 美研アイト
〒545-0005
大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話 (06) 691-1691 四番
振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集 (課題吟) および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所 (県・市名) を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 6941-9631